

A.6.8.0.
E33

秘

ヒトラー 總統 著
マイン・カンプの
内政篇(其の二)

昭和十四年十月

外務省情報部

情
127
外史

外務省
31.11.10
圖書室
E33-75

調一0113

0214

306-N-2d

外務省
情 127
圖 書 館
41.9.-7



調一0113

0215

緒言

數年前ドイツにナチス独頭以來ヒトラー總統のマイン・カムフは俄かに有名となり、苟くもナチスを語るものはマイン・カムフを讀まざる者なきの勢となつた。而して過般獨蘇不侵略協定の締結に次で歐羅巴動亂の勃發を見るに及び、更めて新聞に雜誌にマイン・カムフは連りに論議されるに至つた。これまでも政治家の著書で讀まれたものはないが、凡そヒトラー氏の此の書程廣く讀まれ、又多く問題とされたものは少からう。

當情報部は、曩にマイン・カムフのうち、特に外交に關係あるもの、「ミュンヘンの卷」以下四章を集め、之を「マイン・カムフの外交篇」として刊行した。本輯はその後篇として左の諸章を採録せるものである。

- 第一章 生ひ立の卷 (原書第一篇第一章)
- 第二章 修養の卷 (「第一篇第二章」)
- 第三章 ヴーリンの卷 (「第一篇第四章」)
- 第四章 世界大戰の卷 附、戦争と宣傳 (「第一篇第五章及第六章」)
- 第五章 革命の卷 (「第一篇第七章」)

而して第一章の「生ひ立の巻」より「革命の巻」に至るまでいづれも内政に關するものなるが故に、さきの「外交篇」に對し、之を「内政篇」と稱し、參考用として上梓することとした。

マイン・カムフは大部の書であり、之だけで全部が盡きたのでないこと勿論であつて、こゝに擧げたものの他に尙十六章をあましてゐるが、それらも機會があれば「内政篇」の續きとして採録刊行したい考であつて、本輯が「内政篇」(其のことなせるもの爲である)。

本輯に採録せる第一章より第五章までのうち、ヴィーアの巻は既に一度「國際事情」に公表せるものをそのまゝ本輯に採録したものであつて、マイン・カムフの原文に比し左の箇所が削除されて居ることを注意されたい。

『私もそれまでは王室に對する忠誠は則ち祖國に對する忠誠と考へて居た。今やオーストリ・ドイツ人がドイツ民族の將來を思ふが故にハプスブルグ王室を敵として戦ふの止むなきに至り、私は始めて尊王と愛國とは二つであつて一つでないことを悟るに至つた。かくて忠君と愛國とが分れて二つの觀念となつたことも亦近世ドイツ史に於ける始めての現象である。』

王室が國民の尊敬を、かち得るのは、國民の福祉に資するところあるが爲である。國民の福祉をはかることなく、反つて國民の進運を阻むに至つて、王室が國民に縁の薄いものとせらるるのは當然であらう。

抑も王室は國民の爲に存するものであつて、國民は王室の爲に存するものでない。若し國家が王室の爲に存するものとなれば、君主はいかなる秕政をなしても差支ないといふことになるが、世の中に、そんな不合理なことはな

さ。かくて政府も王室の爲でなくて國民の爲に存するものなるが故に、政府の惡政に依り國家の中堅をなすドイツ民族が亡滅の淵にまで追詰められるやうな羽目になれば、起つて政府に反抗をなすに至るは寧ろ國民の權利にして且つ義務である。

蓋し誤れる政府は國家の權力を以て國民を抑壓せんとする。従つて國民も亦之と對抗するに於て執るべきいかなる手段をも恐れてはならぬ。政府のやり方が合法的である間は國民の行動も合法的であらねばならぬが、相手がさうでなくなれば、我等も遠慮して居るに及ばぬ。これ民族の自己保存の本能によるものである。

惟ふに人類存在の最高目的は種の保存である。かくてオール・ドイツ黨は、止むを得ずハプスブルグ王室を容赦なく攻撃するに至つた。』

他の諸國は措いて問はず、我が國では尊王と愛國とは一であつて二でない。而して之亦我が國體の世界無比なる所以である。然るに支那及歐米に於ては、尊王と愛國とは別な觀念であつて、尊王であつても愛國でないことがあり、愛國、必ずしも尊王でないこととせられるのである。此の如きは國體を異にし、傳襲を異にする外國では毫も不思議なこととなく、寧ろ當然なこととして容認せられ、と總統の如きもマイン・カムフのなかで、こゝばかりでなく他のところでも屢々忠君愛國の別を説

くのであるが、我が國にとつては左様な説を紹介するも害あつて益なく、殊に時節柄公刊する物には載せざるを妥當なりと考へたから、「國際事情」では右の箇所を削除して載せなかつた。讀者の諒察を乞ふ。

編者

目次

緒言

第一章 生ひ立の巻

- 一 ブラウナウの町.....一
- 二 父は田舎の腰辨.....二
- 三 俄鬼大將.....四
- 四 晝かきが志望.....五
- 五 若きナショナリスト.....九
- 六 ハプスブルグ王朝の罪惡.....一二
- 七 讀史論.....一三
- 八 ワグネル崇拜.....一六
- 九 兩親の死.....一七
- 一〇 ヴァーレンへの旅立.....一九

五

第二章 修養の巻

一 入學試験に落第	二〇
二 思想の根柢が出来た	二三
三 生きた社会の見學	二五
四 田舎田の労働者	二八
五 労働者の運命	三〇
六 ヴィーンの貧民窟	三二
七 社会問題解決の鍵	三三
八 國家觀念の缺如	三四
九 讀 書 論	三八
一〇 社会民主黨の内幕	四二
一一 大衆の心理	四七
一二 既成政黨の罪	五〇
一三 既成政黨の責任	五一

六

第三章 ヴィーンの巻

一四 労働組合の没落	五四
一五 ユダヤ人問題	五五
一六 ヴィーン新聞のカイゼル攻撃	五八
一七 マルキシズムは人類の敵	六五
一八 ヴィーン	六九
一九 若くして政治家となる勿れ	六九
二〇 オーストリ瓦解の運命	七二
二一 議會政治の缺陷	七九
二二 無責任な議會政治	八四
二三 グレンシャムの法則	八六
二四 製造される輿論	八九
二五 ハプスブルグ王朝とドイツ民族	九七
二六 シェーネレルとリューゲル	一〇三
二七 「オール・ドイツ」の敗因	一〇六

七

一〇 基督教社會黨	一二四
一一 モザイクのオーストリ	一二七

第四章 世界大戦の卷

一 戦前の局面	一三二
二 大 戦 来	一三六
三 死の洗禮	一三九
四 好機去る	一四三
五 新理想の確立	一四六

附、戦争と宣傳(第一卷第六章)

緒 言	一五〇
一 宣傳は手段のみ	一五一
二 目標は大眾	一五四
三 宣傳の使命	一五四

四 英米の宣傳振	一五六
五 迂闊なるドイツの宣傳	一五七
六 宣傳と根氣	一六〇

第五章 革命の卷

一 宣傳、たなドイツ	一六三
二 聯合軍の宣傳ビラ	一六五
三 軍需工場のストライキ	一七二
四 毒瓦斯で失明	一七七
五 革命の勃發	一八一

第一章 生ひ立の巻

一、ブラウナウの町

イン河畔のブラウナウは私の生れた町である。ドイツとオーストリとは同一の民族として早晩一つに纏まるべき國である。ブラウナウは丁度兩國の國境に當る町であつたから兩國の合同を希望する私がこゝに生れたのも偶然でないやうに思はれる。

ドイツはあらゆるドイツ人の母國である。オーストリのドイツ人は母國ドイツに復歸すべきである。同じくドイツとオーストリとの合併を主張する者でも理由とするところは必ずしも一でない。或者は經濟上の理由よりして合併を要求する。兩國合併の經濟的利益は今更喋々する必要はない。然りながら私の理由とするところは經濟的なものでない。私には全然異つた理由がある。私は云ふ、假令經濟的利益がなくても宜しい。或は又經濟的に不利を來すことがあつても損得を度外視しても兩國は合併しなければならぬといふのが私の持論である。何となれば同一の民族は同一の國家に住むのが當然だからである。近頃はドイツ人の間に植民地獲得の聲が高まりつゝあるやうだが、オーストリの

一

二
イツ人を收容することさへ出来なくて何の拓地植民をやだ。ドイツは他國の領土を獲得する前に一先
づオーストリ・ドイツ人を收容せねばならぬ。獨逸の兩國は是非とも一つになるべきだ。かう考へて來
ると、小さしと雖も兩國の國境であるブラウナウに私の生れたことは決して偶然ではない。

ブラウナウの町に就ては、もう一つ忘れてならぬことがある。ブラウナウは、つまらぬ田舎であるが、
少くともドイツ人の歴史を學ぶ者には忘れることの出来ない悲劇の舞臺である。今より凡そ百年前フ
ランスからやつつけられてドイツが存亡の危機に立つて居た頃である。ニュールンベルグの商人で火
のやうな愛國の士であつたヨハン・バルムが祖國に殉じたのも亦此のブラウナウであつた。彼はドイ
ツ官憲の手に捕へられてフランス側へ引き渡され、一味の者の名を問はれたけれども最後迄口を割ら
ず、むごたらしい吟味のうちに男を立てて死んで往つた。彼を敵の手に交付したドイツの官吏こそ今
から考へても意氣地ないが、現在のゼーヴェリング内閣にだつて、そんなのがいくらもある。

二、父は田舎の腰辨

ブラウナウは所屬はオーストリであるけれども、住民の心持は寧ろドイツのバイエルンに近かつ
た。私の両親が此の町に住んでゐたのは、前世紀の八十年代であつた。父は律義な官吏であつた。母
は内にありて子供達の世話に餘念なかつた。さうしてゐるうちに、バッサウへ轉任となり引きあげたか

ら、ブラウナウについての當時の記憶はこの位のことでは多く頭に残つて居ない。

その頃のオーストリの稅務署の官吏と云へば永く一ところに止まることがなく、絶えず異動が續い
た。バッサウへ赴任した父はそこを切つて、今度はリンツの町へ移り、そこで退職となつ
た。然りながら退職した父は決して、つとはして居なかつた。貧乏人の小俸に生れて官吏までに經上
つた父は職を退いても遊んで居ることが出来なかつたのだ。十三歳になるかならぬ小僧の時に家をと
び出し、所謂世故に長けた村人のと、いめるのも振きつて故郷を離れ、手に職を覺えたと云つてグイー
ンへ出た彼である。やがて十三の小僧が十七歳になり、一人前の職人となつたが、扱て職人になつて
見ると又それで満足が出来ず、職人をやめて今度は官吏にならうと決心した。村に居た時は村で一番
偉いのは坊さんだつたから、坊さんを理想にしたこともあつたが、首府へ出て官吏の幅の利くのを見
ると氣が變つて官吏になり度くなつたのであらう。十七歳といつても苦勞をして年よりもませて居た
彼は猛然として勉強を始め、たうとう官吏となつた。それまでに二十三年もかゝつたらしい。それで
やうく役人になつたのだ。父は郷關を出る時學若し成らずんば死すとも歸らずと心に誓つた。リン
ツへ引込んだ父は、今や學成つて歸れば歸れるのだが、故郷にはもう知つてゐる人も少く、自分も亦
故郷に親しみを持たなくなつて居たから、役を退くと共に上オーストリの國境に近いランパッハで土
地を買ひ求め、それを耕して父祖以來の百姓に歸つた。

三、餓鬼大將

私が漸く大きくなつて將來何になるか、そんなことを考へはじめたのは丁度その頃のやうに思はれる。外ばかり遊んで歩いて家に歸つて來ない。學校が遠いので途々惡戯をやる。之が幼い時の私であつて、遊び仲間が手におへぬ腕白者ばかりであつたことも母の心配の種であつた。そんなことで將來何になるかなどとは深くは考へなかつたのだけれども、官吏だけは始めから嫌であつた。私の演說好きは幼い頃より見え、小學校時代から仲間の者ともよく議論めいたことを言ひ合つたものだ。そして私は餓鬼大將であり、學校では勉強はしたが始末に終へぬ子供であつたことは自分にもわかつて居た。その頃休みになると教會へ行つて讃美歌を歌つたものだ。その爲、自然嚴かな宗教の儀式や金襴の衣に包まれた坊さんの華やかな姿を見るにつけ、いつしか私は坊さんに成る氣持になつて居た。私はつむじ曲りであつたけれども、辯舌はうまかつたから父がこの長所を認めて伸ばして呉れたら坊さんとしても相當なところまで漕ぎつけたかも知れぬが、父は私の志望に反對した。そんなことで坊さんのことはその後、いつの間にか忘れられて新しい志望が私の頭へ上つて來た。私は父の本棚を探してゐるうち、戰爭に關するものを發見し、飽かずこれを耽讀するやうになつた。殊に繪入雜誌社から出版された二冊續きの普佛戰記は私の心を惹き、それを愛讀してゐるうちに、いつとなく私は戰が好きになり、今度は軍人にならうかと思ふやうになつた。

それはかりでない、普佛戰記を讀んで居るうちに、私は始めて獨逸合併を考へるやうになつた。同じくドイツ人である。然るに本國のドイツ人は此の如く勇敢に戦ひ、オーストリアのドイツ人はかくの如く意氣地がない。それは抑も、どんな譯なのか。本國のドイツ人が戦つたら、どうしてオーストリアのドイツ人も一緒に戦はないか。オーストリアと云ひ、ドイツといつても、ドイツ人たるに變りはないではないか。私はそんなことを考へるやうになつて來たのだ。而して他から、ドイツ人と言つても皆がビスマルクのドイツに屬するのではないと言はれても、幼い私には合點が行かなかつた。

四、畫かきが志望

そのうち私は小學校を出て上の學校へ行くこととなつた。父は中學校から高等學校へと進んで行く大學教育が嫌ひであつたし、私の性質にも適しないと考へたらしく、私の行くべき學校として實科の學校を選んだ。彼の考へに依ると中學校では繪畫が疎かにされて居る。然るに私は天性繪が好きであつたから、その點から言つても中學校は駄目だといふのだ。父は又屢々大學は實地に適せぬと云つて居たから、そんなことも頭のうちにあつたのであらう。兎に角私は實科の學校へ入ることとなつたが、父は、どうしても私に官吏になれといふのだ。苦學をして官吏になつた父は、官吏になつたことが非常

に得意であつた。それ故に私にも同じく官吏になれといふのである。父から言へば、自分は下から經上つたのだから思ふところへは行けなかつたが、息子には、うんと勉強させたら、もつと良いところまで行かれようといふのだ。

父は官吏をこの上もない貴いものと思つて居たから、息子が厭だと言つて拒絶しようなどとは夢にも思はなかつた。彼はわけもなく私が承知するものと思つて居たらしい。その上子供の將來は親がきめてやるものであつて、経験のない子供は親の言ふが儘になるべきものだといふのが彼の持論であつたから、彼は私が父の命にそむいて反對するものとは最後迄豫期しなかつたらしい。

と、ころでそれがさうゆかなかつた。

私はその頃十一歳の小僧であつたけれども、父のいふがまゝにならなかつた。父は一度言ひ出したら後へ引かぬ人間であつたが、息子の私も亦厭だと言つたら挺子でも動かぬ變り者であつた。

私はどうしても官吏になるのが厭だと言ひ張つた。

父は手を代へ品を代へて説いたが、なだめてもすかしても私は背かなかつた。父が自分の経験から官吏の有難いことを説いてその方へ引つぱつて行かうとすればする程、私は父の手を逃れようとした。窮屈な思をして役所に坐つてゐる、そんなことを考へるだけでも私にはだまらなく官吏の生活がいやであつた。からだを縛られて形ばかりの生活する、そんなことが出来るものか、私は又さうも心のうちで囁いた。

小學校に居た頃は他の者が難しがつて居る科目でも私には難作なく出来たから、家へ歸つても時間の餘裕があり、いつも机の前に居るよりも外へ出て、たづなをやる日が多かつた。それで今日でも私の政敵は此の頃の生活まで引き合に出して來てヒトラは幼い時から手におへぬやぐざであつたといふが、やぐざかどうか知らぬが私が野や山を飛び廻つて居たことだけは確である。それでも父との衝突で憂鬱になつた私はいつか森に入り、牧場に臥して深い思に耽るやうになつた。

かくて實科學校へ通ふうちに私の悩みは愈々大きくなつた。

官吏になるかならぬかの問題は父から責められても私さへ黙つて居ればそれですんだ。私がどうしても官吏にならぬといふ決心さへすれば、外から他人がそれをどうすることも出来ないんだ。私は父から責められる毎にさう思つて高を括つて居た。と、ころが今度は反對に私から要求を出さなければならぬことになつて來た。いつの頃であつたか忘れたが私はふと書家にならうと考へ出したのである。

尤も私には前にも言つたやうに繪の天分があり、父が中學へ入れず實科へ入れたのも私の繪の才分を認めたからであるが、併し繪を職業にさせようとする考は父の頭に毛頭もなかつた。それ故にある日のこと例の如く職業選擇の問題が起り、父から官吏になるのが厭なら一體お前は何になるつもりかと質され、ありやうに私の望みを打ち開けると、父は茫然として暫く言葉もなかつた。

七

書家？ 繪、かき？

父は私がどうかしたのであるまいかと疑った。又己の耳の聴き違ひでないかとも考へたらしいが、私の極めて眞面目なのを見ると一言の下に私の希望を退けた。

繪、かき？ 俺の眼の黒いうちは繪かきなどにするものか！

父は、かう言つて悴の方を睨んだ。ところが一度言ひ出したら背かない頑固な點でも父によく似た息子の私は、

『それでも私は繪、かきになります。』

と言ひ張つて屈しなかつた。

かくて父は斷じて書、かきにはせぬとがんばり、息子はどうしても書、かきになると言ひ張り、親子は久しく白眼で對立した。

勿論結果は面白くなかつた。父は毎日六ヶ敷い顔をして居たが、私も終日、むつとして居た。而も不可ぬと言ひきつて譲らぬ父を見た私は繪、かきにしてくれぬならもう學校へも行くなりと言つて駄々をこねた。私はそれで父がへこたれるだらうと思つたが、意外にも父は俺を馬鹿にしたと言つて更に私にあつ、かぶさつて來た。そこで今度は私が術を代へて口では言はず、行動で父を降参させる方法を考へ始めた。實科學校へ通つて居ても勉強しない。そして成績がひどくなつたら流石の父でも私に思ふ

やうにさせてくれるであらう。父を、こま、らせるのはそれに限る。私はさう考へて實行に着手した。

果してその爲であつたか、どうかは知らないが、學校の成績は見るうちに悪くなつた。私は繪に關係のある學科は勉強したが、繪に關係のない學科は完全にさぼつた。それ故にその頃の學校の成績は良いものはずと良くて、わるいものは完全にわるかつた。而してその良いものうちでも最も私の得意な學科は歴史と地理とであつて、地、歴では級で私が一番であつた。

私が今日ナシヨナリストであることも、私に歴史を味讀する習慣のあるのも、みんなその頃に培はれたのである。

五、若きナシヨナリスト

戦前のオーストリアは異民族の寄合世帯であつた。之がオーストリアのドイツ人にとり、どんな厄介なものであつたかは、本國ドイツ人の容易に思ひ及ばぬところであつた。普佛戦争後本國のドイツ人は他國に居るドイツ人の運命に漸く冷淡となつた。而してオーストリア・ドイツ人を深く知らざる本國のドイツ人は、ハプスブルグ王室のなすさまを見てオーストリアのドイツ人をも併せて救ふべからざる無力な人民と考へた。それが抑も間違のもとであつた。

オーストリアは人口五千二百萬を算する大國であるが、そのうちドイツ人は千萬人に過ぎないのだ。

それにも係らず、オーストリアは外に對してドイツ人の國家たるの觀を呈した。オーストリアはそれ程ドイツ色が濃厚であつたのだ。若しオーストリア・ドイツ人が頼りない人民であつたならば他の異民族に壓倒せられてこゝに至ることが出来なかつたであらう。

オーストリア・ドイツ人は有爲な人民であつた。オーストリア・ドイツ人はドイツ人の國語、ドイツ人の學校、ドイツ人の魂を維持する爲に久しい戦を戦ひ續けて來た。この間の惡戰苦闘は本國ドイツ人の想像も及ばぬところであつたらう。今日ドイツでは或る地方は他國に編入され、或地方は他の統治を受けて居る。之等の地方では住民はドイツ語の維持に必死となつて居るから、オーストリア・ドイツ人がこれ迄國語維持の爲にどんな苦勞を重ねて來たかは一部の人間にも判るやうになつたであらうが、今でも大部分の人間には依然として理解が困難であらう。

オーストリア・ドイツ人はドイツ民族の東部國境を護り、ドイツの國語を護つて今日に至れるものであつて、本國のドイツが海外の植民地を云爲しても、オーストリア・ドイツ人の運命に冷淡であつた時でも、オーストリアのドイツ人はドイツ民族の爲に孤軍奮闘することを忘れなかつた。

古今東西を問はず、どの戦でもさうであるが、オーストリアに於けるドイツ語を繞つての戦に於てもドイツ人の間に三つの型が認められ、進んでも後へ引かず、戦ひ續ける者が一つ。どちらでも宜しとする煮え切らぬ者が一つ。ドイツ語を捨てて他の民族の言葉へ奔る裏切者が一つである。

異種族の寄合世帯である國では、小學校に居る時から兒童の間にも既に右のやうな三様の型が認められた。子供は單純で遷り易いものであるから、多くの民族の集つて居るところではどの民族も就うて小學校をねらふ。オーストリア・ドイツ人も亦その軌にもれず、ドイツ語を護る運動は小學校で開始され、學童は次の如く呼びかけられた。

ドイツの兒童よ、ドイツ人たるを忘るな。

ドイツの子女よ、ドイツ人の母たるべきを忘るな。

兒童は喜んで、こんな呼びかけに耳を傾けるものである。ドイツの學童はドイツの歌でない歌は歌はなかつた。ドイツの教師でない教師には言ふことをきかなかつた。而してドイツの徽章をつけてはならぬと云へば反抗的に之をつけ、それが爲に叱られることを得意とした。又欣んでドイツの偉人の話を聞いた。併しなかにはさうでないものもあつたことも勿論である。

オーストリアに生れた私は幼い時から既に民族のせり合ひも、また、矢車草はドイツの國華であり、黒、赤、黄の三色旗はドイツの國旗である。オーストリア・ドイツ人の父兄は屢々矢車草や三色旗を用ゐてドイツの色彩を兒童の間に深めようとしたものである。「ハイル」といふ呼びかけの言葉をを用ゐたりしたのもその爲であつた。而して兒童はオーストリアの國歌の代りにドイツの國歌であるドイツチュラント・ユバ・アレスを歌つた。

勿論その爲に問せられるのも承知の上であつた。雑多な民族を包容するオーストリアの児童は、単一民族の國家である他國の児童に比し小さい時から政治的に頭が動いた。國語問題について私は、どちらでも宜しとする煮え切らぬ仲間では無論なかつた。私は頑強なドイツ・ナチヨナルとなつた。但し同じくドイツ・ナチヨナルと言つてもドイツ現今の國權黨と一つにされては困る。

六、ハプスブルグ王朝の罪惡

かくて未だ十五歳にもならない私は、こんなことが原因となつて既にオーストリアの皇室を中心とするバトリオチズムと、民族を中心とするナチヨナルイズムとの間に大きな區別の存するを知つた。而して私の重きを置いたのは無論前者でなくて後者であつた。

斯く言つたら或は私の考が間違つてゐるといふ人もあらう。然りながら、それはハプスブルグ王朝の歴史を知らざる者である。苟くもドイツ民族の間に於けるオーストリアの地位を知る者であつたら、私がハプスブルグ王室を輕しとしてドイツ民族を重しとする所以を解するに苦しまないであらう。試みに歐羅巴の歴史を繰りて見よ。オーストリアだけの歴史といふものがどこにある。オーストリアの歴史はドイツ民族の歴史の一部として存在するに過ぎない。ドイツの歴史の外に別にオーストリアの歴史を立てるのは困難である。それ程オーストリアはドイツ民族の運命に結びついて居るのだ。近世に入りて

オーストリアと普魯西とは二つのドイツに分れた。而もその分離さへも、二つの別々な歴史としてでなく、ドイツ史の一頁として採録されたものである。

世界大戦に依りハプスブルグ王室の没落となるや、オーストリア・ドイツ人はドイツへの復歸を要望した。所謂アンシュルスの運動である。之則ちオーストリア・ドイツ人が以前よりドイツを母國とし、ドイツへの復歸を熱望して居た爲であつて、一朝一夕の氣紛れの運動ではない。

七、讀史論

歴史と云へば、今日でも中學校あたりの歴史教育はなつて居ない。歴史教育の目的は大きな出来事や、又その出来事のあつた年月を諸記させることでない。そんなことは怎うでも宜い。某の戦は、どこで戦はれたか、某の大將は何年に生れたか、又某の王は紀元何年に即位したか、などは凡そ歴史教育に縁の遠いことだ。

抑も歴史を學ぶといふことは、歴史の由つて來るところの背後の力や原因を探求することである。讀書の術は要領をとつていらぬことを速く忘れるにある。必要なことだけ覚えて枝葉の點に因はれないことである。

リンツの學校に居た頃、歴史の先生にレオポルド・ベツチといふ爺さんが居た。この人は自らよく歴

史を読むと共に、又よく他に歴史を教へる術を解して居た。私は此の老先生に依つて多大の感化を受けたものであるが、極めて親切で、しつかりした人であつた。講義がうまくて古い歴史のことでも聞いて居ると眼の前に動いて居ることのやうに思はれた。世には温故知新といふ言葉があるけれども、先生は屢々新しきによつて古きを説かれた。先生の講義にのると、どんな事件でも生動した。無論興に乗つてくると時事問題を辯じて皆を喜ばせた。

先生は尊王家でなかつたが、愛國家であつた。

一度ドイツ民族の偉大なる歴史を説く時には、老先生の眼はいつも光つた。かくて私は此の先生の講義に依つて歴史が好きになると同時に、私は既にハプスブルグ家に不快の意を持つ革命家となつてゐた。

ドイツ民族がドイツとオーストリアとの二つの國家に分れて居るのはハプスブルグ王室の私利に基づくのである。ハプスブルグは自家の王朝を維持する爲にドイツとの合併を欲しないのだ。ハプスブルグ家はドイツ民族の敵だ。ベッチ先生の講義に魅せられた私が、夙にヴィーンの朝廷に敵意を持つに至つたのは當然であらう。

ハプスブルグ王朝は自家の利益の爲にドイツ民族の利害を裏切つたこと過去に於て屢々であつた如く、現在に於ても然りである。ハプスブルグはドイツ民族の敵である。敵である王朝に對して尊王の念が起つて来るものか。實科學校に居た頃、私の頭から既に尊王の念の消え去つたことに何の不思議があらう。

歴史ばかりでなく、目を現代に移して日々周圍に起る出来事を見て居るだけでも、私はハプスブルグ王朝の存在が不快になつた。オーストリアでは異種族が目を逐うて根を張つて往つた。而してドイツ民族は次第に凋落の色を示した。ヴィーンはドイツ人の都である。それがいつの間にかスラヴの都たらんとしてゐる。皇儲フランツ・フェルデナンドの家庭は萬事チラク風であつた。皇儲はドイツ人を抑へてオーストリアをスラヴ族のオーストリアに化せんとして居たのだ。このスラヴびいきの皇儲がスラヴ人の手に依つて暗殺されたのは偶々天の配剤であつた。

ハプスブルグ家が内に於てスラヴの勢力を援け來り、ドイツ人を壓迫しつゝも外に對しては依然としてオーストリアをドイツ民族の國家たるが如く見せかけて居たのは憎むべきことである。更にオーストリアのスラヴ化に就て遺憾とすべきは、ドイツ本國が同盟國たるの故を以てハプスブルグ王室のオーストリア・ドイツ人壓迫を默認することである。

オーストリアは既に生ける屍である。屍と同盟したとて何になるか。ドイツ本國の所謂本職の外交官連ほど迂闊な人種はない。

ドイツは新興の國家であり、オーストリアは老廢の國である。世界戦争はこの新興國家が老廢國に結

んで居た爲に起つたものである。従つてドイツの崩壊も亦煎じ詰めるとオーストリアとの同盟に基因せるものであつた。この事については猶他の章で深く論ずるとして、こゝには私の得た次の結論だけを述べて置かう。

則ちドイツ民族の生存にはオーストリアが邪魔になつた。これが一つ。尊王と愛國とは二つであつて一つでない。王室の興亡は軽く、民族の運命は重い。フェルデナンド大公の皇儲となつたのは全ドイツ民族の禍であつた。之が一つ。

以上三つの理由に依つて、私はオーストリアの故郷は好きであつたけれども、オーストリアの國家は嫌ひであつた。

八、ワグネル崇拜

歴史は過去の政治であり、政治は現在の歴史である。學校に居て歴史の好きになつた私は、又自らいつか政治に興味を持つやうになつた。而も私は書籍で政治を學ぶのではなく、政治が私に學ばしめられたのだ。

斯くて私は幼時既に政治の革命兒であつた如く、藝術に對する目醒めも早かつた。

當時上オーストリアの町に一の劇場があつた。地方のものとしては比較的に整つて居て大抵の戯曲は上場された。こゝで始めてウィリアム・テルを観たのは私が十二の年であつて、それから二三ヶ月後に更に歌劇のローエングリンを観た私はすっかり魅せられ、一朝にしてワグネルが好きで止められなくなつた。

こんなことで役人になるのが益々厭になつた。私はどうしても役人にならぬと言ひ張り、苟くても賤しても耳に入れなかつた。

私は繪かきになるべく決心し、死んでも役人にならぬことにした。

さうしてゐるうちに建築にも興味を感じるやうになつた。けれども私は別に氣にとめなかつた。繪畫も建築も藝術としては同じやうなものだと考へて居たのだが、世間ではさう簡單に認めてくれぬことが後になつて判つた。

九、両親の死

職業決定の問題は私の豫期したよりも早く來た。私の十三歳の時父は突然亡くなつた。

平常は丈夫な人であつたが、卒中でぼつくりと逝つたのだ。父は私を樂に慕はせ度いと考へいろいろ計畫したのだが、それが出來上らないうちに此の世を去つた。遺憾であつたらうが、そこに父にも私にも知られなかつた運命が潜んで居た。

父が亡くなった跡の家庭は、當分以前通りで變つたことはなかった。

母は父の遺志を繼いで私を同じく役人に仕立てようとして學校のことを心配したが、學校を變へて中學校へ行くのも厭だつた。さうかうするうちに突然私は病氣になつた。肋膜炎だといふのである。醫師は私の體を診て、役所生活はこの兒に適應ぬから、官吏志望はやめさせた方が良しと忠告し、今通つて居る實科學校も、一年は休學せねばならぬと言つた。かくて私の永い悩みは急に拭ひ去られた。母は私の希望を容れ、實科學校をも下げて美術學校へ入學することを許してくれた。

私は夢のやうな楽しい日を送つた。併しそれは殆んどほんたうの夢であつた。それから二年も経たないうちに母も亦父の後を追つた。私の夢は虹の如く果敢なく消えた。

母は永思ひで、始めから癒る望みはなく、覺悟はしてゐたけれども、永の訣れとなればつらかつた。

父には偉いと思つても親しめなかつた私は、母に、あま、へてゐたのだ。

私も愚圖々々して居られなくなつた。父の遺産は多少あつたけれども、母の病氣で殆んど消えて了つた。

役所から私の爲に扶助料のやうなものが下がるけれども、それでは水も飲めない程僅かなものであつたから、何とかして私自身が稼いでパンを得なければならなくなつた。

一〇、ヴィーンへの旅立

着物やシャツを行李に詰め、それを持つて私は家を出た。父は五十年前にヴィーンへ出て人になつた。私は五十年後にヴィーンへ出て、父と同じく何かにならうと云ふのだ。但し官吏だけは眞平だ。

第二章 修養の巻

一、入學試験に落第

母が亡くならない前に、私は一度美術學校の入學の試験を受ける爲にヴィーンへ出かけたことがあ
る。書き溜めて置いた繪を袍に入れ、心も軽く家を出た。試験にパスすることなど譯もないと信じ切
つて居たからである。學校に居た頃は、クラスでも繪は私が一番上手であつた。その時から見れば、ッ
ンと腕が進んで居たから、學校でも欣んで迎へて呉れるだらうと思つて強氣だつたのだ。
かくて繪には自信があつたけれども、そこに一つの不安があつたといふのは、同じく繪と云つても
花鳥風月が好きなのか、製圖の方が好きなのか、それがはつきり自身にも判らぬことであつた。繪は
無論好きであつたが、それと並んで建築の方が次第に面白くなつて往つた。まだ十六歳にもなるかな
らぬ幼い時であつた。私は始めてヴィーンへ行つて二週間ばかり滞在したことがある。その時も帝室
博物館の繪畫を見に行つたが、肝腎の繪畫を忘れて博物館の建築に見とれたものである。それから引
續いて、あちこちと見物して歩いたが、目にとまつたものは殆んど建築ばかりであつた。私はオペ

ラ館の前に立つて數時間もその建築を眺めた。議會の前でも同じく數時間立ち續けてその宏壯な建築
を嘆美した。かくて立派な建築の建ち並ぶヴィーンのリング街は目の前に豪華な宮殿を打ち建てて見
せるアラビヤン・ナイトの魔術を思はせた。私の建築美に對する憧憬がそれに依つて飛躍的に高めら
れたことは勿論である。

そんなことで今度自ら繪を携へてヴィーンの町へ來たのは之で二度目である。私は試験の成績を待
ちかねたが、落第しようなどとは夢にも思はなかつた。ところが學校からの通告は確かに落第といふ
のであつた。

己の力柄を信じ切つて居た私には、この通告は晴天のへきれきであつた。私は學校へ出かけて行つ
て校長に面會を求め、落第の理由を質すと、校長の返事は次のやうなものであつた。

『汝の持つて來た繪を見ると繪かきさんにはなれないよ。建築なら或はものになるかも知れぬ。だか
ら繪畫の部をあきらめて、建築科へ行つたら宜からう。』

ところが私はこれまで建築の先生についたこともなければ、建築の學校へ通つたこともないのだか
ら、畢竟どうにもならないといふことになるのだ。

悄然として私はそこを辭して家に歸つた。

私はその時まで理由のわからぬ悶えを感じたことが度々あつた。それはやつぱり繪かきになるか建

築家になるかについての心の惑ひであつたのだ。それでもその心のもどかしさがどこから来るかは自分にも氣がつかなかつたのだ。然るに今校長に眞向から言ひきかされて、始めて目がさめたやうに感じた。

私も漸く自分の天分が建築にあることを悟つた。

ところで學校出てなくて建築家になるのは容易でない。それも自業自得とでも云ふべきであらう。美術學校の建築科へ入るには建築科の學校を出て居なければならぬが、そのまた建築の學校へ入るに中學を出て居なければならぬ。然るに私は中學を出て居らぬから、要するに美術學校の建築科へ入る資格がないのだ。私は引下がるの他なかつた。

こんなことで母が亡くなつてから、今度ウィーンへ出たのは私としてはこれで三度目であつた。以前と違つて今度は腰を据えて勉強する積りであつたから、月日の経つにつれ心に落付が出て來た。同時に、それとともに再び、ちまへの利かぬ氣が頭を持ち上げ、どうしても建築家にならうときめた。

精神一到何事か成らざらん。困難があらうが、世の中に打ち勝てない困難はなからう。障礙があつたら蹴破つて通るばかりだ。私はかく、肚をきめて猛進することとした。而して苦しいことがあると亡くなつた父のことを思ひ起した。父は田舎の靴屋の小僧から勉強してお上のお役人にまで出世したのだ。それに較べたら私の今の境遇は、ずつと樂になつて居る。私はさう思つて奮闘した。そして今から

考へて見ると、その時の苦勞こそは今日の幸福の基になつたやうに思ふ。苦勞が私をつかんで、み潰さうとする毎に、私はそれに負けまいとして頭をあげた。而してその負けぬ氣でたうとう最後の勝利を得た。

私は鍛へられた。これからでもなほ鍛へに堪えるだけの力が出來た。これも皆當時の苦難のおかげだ。併しそれにも増して有難いことは天が私に安易な生活を與へず、早く私を母の懷より奪ひ去つて貧困のどん底へ投げ落したことである。私は之に依つて下層階級の生活を體驗し、それが又縁となつて下層階級の爲に奮起することとなつた。

二、思想の根柢が出來た

凡そ當今ドイツ民族の存在を危うするものが二つある。それはマルキシズムとユダヤ禍とである。この二つの禍害について私の意見の定まつたものも、亦ウィーン時代である。ウィーンへ出るまで、私はマルキシズムやユダヤ禍といふ名は聞いて居たが、どんな恐いものであるかは、少しも知らなかつた。

ウィーンは多くの人々に、とりて此の世の歡樂境だ。そのウィーンの町は私にとりては一生のうちに最も苦勞の多かつた時代の思出ばかりである。

今になつて思ひ出してもウィーンはつらかつた。ウィーンは私にとりて五年の苦しい生活を秘めたところだ。ウィーンの滞在五年間の始めは労働者の下働として働き、後には貧弱な給、かきとして稼いだ、そんなことによつて得る乏しいパンは飢を支へるに足らなかつた。私は年中、ひもじい腹をかへて居た。當時私の傍を離れざる忠實な親友と云へば、ひもじい思ひのみであつた。書籍一冊買へばもう食事を控へねばならなかつた。オペラへ一度行けば幾日もひもじい思ひをせねばならなかつた。私はひもじい思ひと絶えず闘つた。それでも生涯のうちで一番勉強の出来たのは此の時代だ。建築の研究と、パンを割いても出かけて行かねば気がすまぬ程のオペラとを除き、楽しみと云へば嫌な私の讀書慾であつた。

二四

私は限りなく多く書籍を読んだ。而も何れも熟讀精讀した。そして仕事の餘暇は全部讀書に費されたと云つても過言でない。而して三年を出でざるうちに私の學問の基礎が出来上つた。

學問ばかりでなく、私の人生觀の定まつたのも同じく此の時代であつた。此の時に出来上つた人生觀は今になつても改めようとは思はない。

惟ふに人間の思想なるものは、若い時に頭へ浮んで来るものが最も生命のあるものであつて、年をとつてからは、唯若い時の思想を完成するだけである。若い時にはあとから／＼という／＼の思想が湧いて來て整理がつかない程だ。それでも一生の思想の根柢となるものは悉くそのうちに雜つて居るのである。かくて私の人生觀も全く私の青年時代にかたちづけられた。

三、生きた社會の見學

故郷に居た時の私の生活は友達的生活と同じで殆んど異なるところなかつた。何の屈托もなく、あすの日を待つ、之が皆のもの生活であつて、社會問題などを考へることは些かもなかつた。

周圍は中産の家ばかりで職人とか労働者とかいふ者の家は軒もなかつた。中産の人達は金の無い癖に労働者や職人を眼下に見下す風があつて、この二つは暗に反目して居るものである。その理由は次のやうな事情に基く。則ち中産の家でも下の方は職人や労働者から經上つて來て間のないものである。そこでいつでも彼等には、もの賤しい職人や労働者へ轉落したくないとの氣持がある。之が貧民との交際を厭ふ一つの理由であつて、もう一つは往來すれば貧民の仲間やうに見られる虞がある。

それを避けたといふのであらう。又なかには下層社會の野蠻な生活が厭だといふものもある。中産階級の人達は漸くにして下層階級から經登つて來たものであるだけに、他に同情するだけの餘裕がない。中産階級が貧民社會に對して理解のないのはこんなことも理由の一つとなつてゐる。

私は中産の家に生れながら、幸にして中産の人々の有する偏見に陥らずにすんだ。

私の父は貧窮のうちより身を起した人であるが、私は又そこから、もの貧民の仲間へ身を落さねば

二五

ならなくなつた。

而もそれに依つて私は労働者や職人を輕蔑するの過誤から救はれた。下層階級の人間は、つき合つて見ればみんな良い人達だ。

前世紀の終りから今世紀へかけてのウィーンは既に社會問題に悩める大都市であつた。

ウィーンは輝かしい富と陰、さへな貧乏との交錯するところであつた。異種族の寄合世帯といつてもオーストリアは五千二百萬の大帝國であつた。ウィーンでも都心に近いところでは、人目を眩惑する華麗無比な宮殿は、磁石の如く國內の隅々から富豪やインテリを首都へ引きつけた。ハプスブルグ王朝は總てをウィーンへ集中するにつとめた。

オーストリアは雑多な民族を包容する寄木細工の國である。この寄木を纏めて行くにはウィーンを中心にして、そこへ總ての力を集めるの他はない。かくて官衙といふ官衙は悉く首都に集められた。

ウィーンは政治文化の中心であるのみならず、經濟方面に於ても二重王國の中心となつて居た。ウィーンは政治の都たるばかりでなく、經濟の都でもあつた。従つて上級の官吏、將校、藝術家、學者も亦こゝに集つて居れば、しがた暮しの労働者も集まつて居た。貴族、實業家の宏壯を誇る屋敷があるかと思ふと、リング街頭には多數の失業者がウヨ／＼して居た。ウィーンの町は貧澤な金持と貧のドン底にある者とが對立して棲んで居るところであつた。

かくて凡そドイツ人の町でウィーン程社會問題の研究に都合の良いところはなかつた。併し考へ違ひをしては不可ない。社會問題の研究といふのは形式的な御坐なりの研究でもなければ、皮相な調査でもない。自分が貧民窟へとび込んで往つて下層民の生活苦を親しく體驗することである。然らざれば研究も調査も浮薄なものになる。然らざれば唯センチに陥るばかりだが、浮薄もセンチも社會問題の研究には、ともに有害だ。世のなかには始めから、下層民の生活に盲目な人間がある。坊ちゃん育ちの人間か、然らざれば自力で鍛えあげた努力家なるものがそれである。之に反して窮民に同情するんだと言つて社會運動に従事して居る奥さん達もある。この人達は始めから貧民を眼下に見下してゐる。前者は下層民の苦勞を知らざらんとする者であり、後者は下層民の苦勞を知つて居るかに振舞ふものであり、どちらも良くないが、私に云はせると寧ろ生半可な世話をやきたがる人達の方がわるいのでないかと思ふ。之等の人々の世話は感謝を受けることなくして反つて下層民にいやな思ひを抱かせる。奥さん達に云はせると、貧民は感謝することを知らない度し難い人間のやうに云ふが、畢竟は下層階級の心理がわからない爲であり、又自分達のやつて居ることについて徹底した考へがないからだ。

凡そ社會運動に従事して下層民を有難がらせようなどと考へるのは以ての外の不心得だ。社會運動は下層民に恩恵を施すのではなく、下層民の爲に下層民の權利を確保してやることだ。

世の所謂慈善家には之がわからない。幸にして私がそんな過誤を犯さずにすんだのは己自らが下層社会へ投げ込まれ、貧民の苦難を日々に躬ら體驗せざるを得なかつたからである。

四、田舎出の労働者

當時の私の體驗を悉くこゝに述べることは企てても不可能なことだ。依つて私の得た體驗のうちで最も印象の強かつたのを以下少しく述べてみる。

私がグリーンで働いたのは熟練工としてでなく、所謂手間取りとか、下働きとかいふもので、仕事を求めるのはそれ程困難でなかつた。

歐羅巴の足の塵を拂つてアメリカへ渡る移民は、あちらへ着くとどんな仕事でも避けない。職業や身分の區別も忘れ、近所隣のうさ、眼や、村の因襲からすっかり解放された彼等は、目の前へ出された仕事なら、いいことでない限り、何でも欣んでやつて退ける。職業に高下がないのだ。私も亦アメリカ移民のやうな心持になつてグリーンでは、どんな仕事でもいゝやと言つたことはなかつた。

「世の中は廣い。探せばどこにか仕事はあるものだ。併し同時に仕事を失ふことも亦造作ないものだ。」

仕事に取りついたかと思ふとすぐに失業する。私はこんなことを口にするやうになつた。

かくてパンの不安といふことがやがて私の新しい生活の脅威となつた。

熟練労働者は下働きのやうに手軽に街頭へは、うり出される虞はないが、手間取りは仕事を得ることも早ければ、之を失ふことも亦早く、今日あつて明日のわからぬ生活である。熟練労働者にはそんなことのないかほりに、工場閉鎖や同盟罷業があつて、彼等とても亦時々失業を経験せねばならぬ。労働者の生活は不安だ。

近頃は仕事が増えた。労働時間が短いと言つて、田舎から都會へ出て来る若者がある。

なかには都の華やかさに眩惑されて来るもののあることは勿論であるが、之等の青年は村にありては失業などの経験のないものである。田舎では労働者が不足してゐるからである。ところで都會へ出て来る之等の青年を、村に残つてゐる青年よりも始から質がわるいのだと考へるのは誤りである。事實は事ろ反對で村を出る青年は丈夫で覇氣のある元氣な若者なのだ。彼等のうちにはアメリカへ行くものもあるが都會へ出て来るものもある。アメリカへ行く若者の元氣なことは云ふ迄もないが、都會へ出る農村青年だつて出て来る時の心がけは殊勝なのだ。どんな苦勞にも負けることではない。かう肚をさめて都會に足を踏み入れる若者は多くの場合、いくらかの金を身につけてゐるから、始めの間仕事がなくともさしあたり食ふに困ることはないが、仕事に有りついたかと思ふと直ぐにそれを失ふ。そんな苦痛を味ふ頃から生活の不安がつつて、一度失業すれば再び仕事を得ることが容易でない。

殊に冬期などでは一度失業したら二度は仕事を見つけることは出来ぬ。そこで始めの間は組合の失業手當などをもらつてやつて行くが、身につけて居た金も盡き、組合の補助もなくなると生活の苦勞がひし／＼と身に迫つて堪らなくなり、飢えた肚を抱へて街頭をうろつき廻るが、かゝる間に僅かばかりの持物を質に入れたり、賣り飛ばしたりして身なりが急に、わびしくなると共に、わるい仲間へ墮落して、からだばかりでなく、心までも墮落して下ふ。そのうちに偶々仕事が見つかつて、長くは續かぬ。間もなくお拂ひ箱になるから生活に安定がなく、二度三度と失業を重ねるうちに不安な生活を、あたりまへな事と考へるやうになる。田舎から出て來た眞面目な青年もかうなると立派なやぐざに變つて下ふ。

三〇

五、労働者の運命

ひとり農村出の若い者はかりでなく、労働者は一般に失業を重ねる毎に墮落するのであるが、己の過誤でなく、雇主の都合で手軽に解雇されるやうなことが續くと、いつの間にか自暴自棄な人間となり、どんなことでも平氣でやつてのけるやうになる。ところが大都會では綱を張つて之等の人間を待つて居る者が少くないのだ。彼等は國家を破壊し、社會を破壊し、一般文化を破壊せんとする陰謀の一味であつて、名を同盟罷業に藉りて労働者を手先に利用する。

私は労働者が失業を繰り返すうちに同盟罷業に参加し、それに依つて陰謀家の喰物になつて行く徑路を到るところで目撃した。私は地方から人間を引きつけて置いて、その人間をすり潰して下ふ大都會なるものに反感を持たざるを得なかつた。

故郷を出て都會へ來た時はまだ彼等も國民の一人であつた。都にとまつて居る間に國家を知らざる無籍者に墮して下ふ。

私自身も亦此の世界的都市ダインのうちにあつて不安な労働者の運命を體驗した。労働者の生活とは就職から失業へ、そして失業から就職への絶えざる循環である。収入があると思へば直ちに又収入の途がなくなる。かうなると無い時に備へるといふやうな貯蓄觀念などはすつかりなくなり、肉體も亦それに慣れ、有る時勝負となつて、金のある時は贅澤を盡し、金がなくなると餓じい肚を抱えて我慢する。之が彼等の生活だ。之も一面から云へば無理もないことだ。失業して収入の途が絶え食はずに居る間は「い、や」といふ程食ひ度い」の思で肚が一ぱいなんだから、偶々仕事に有つて金が手に入つたら、第一に「食ふ」といふことになるのは、止むを得ないことであらう。永い間何も當てがはなかつたんだから、うまいものを一時に詰め込む。飲めよ歌へであしたことはわからない。そんな氣持になる彼等の生活を憐むべきでないか。それでも始めのうちは一週間の給金を五日に分けて使ふが、やがては三日になり、二日になり、最後にはもらつた給金をその日の晩に使つて下ふやうなこ

三一

ともなる。なかには女房や子供のいるものもある。この女房子供が又だらしなく、氣の良い亭主だと親子夫婦が金のある間揃つて飲み食ひをし、金がなくなると、女房が近所へ往つて工面をしたり、商人から借りたりして急場を凌ぎ、次の給料日まで何とかしてつないで置く。かくて小供も小さい時からこんな生活にならされる。

併し之等は、まだ良い方で、亭主のわるいになると、自分でひとり飲んで歩いて女房子供を顧みないのがある。こんな家庭では子供が可哀想だから女房は懸命になつて、亭主に金を使はせまいとし取らうと云ふ者と離すまいとする者とがぶつ、かつて掴み合が始まる。土曜日の晩と云へば大抵もらつた給金を持つて亭主は飲みに行き、金のある間飲んで日曜か月曜でないと歸つて来ないが、歸つて来た時は懷中無一物だから、女房は土曜日の晩から工場の前に亭主を待ち伏せして、いくらでもとれるだけ、とらうとして追ひ廻すといふ有様だ。

私は、いやといふ程之等の實例を見せつけられた。私も始めは腹立たしく思つたが、後には無理もないことだと思ふやうになつた。何れは社會の罪なんだ。

六、ヴィーンの貧民窟

彼等の住宅も亦ひどいものであつた。當時のヴィーンの貧民窟は寧ろ凄じい感じであつた。私はヴィ

ーンの合宿所や木賃ホテルやそこに起臥してゐるドン底の人間どもを思ひ出すと今でも身の毛のよだつ感じがする。彼等は人間といふよりも寧ろ獸に近い。此の獸も貧民窟に潜んでゐるから良いものこゝを出て社會へ、さばり出る時があつたらどうだらう。私は屢々そんなことを考へた。何となれば社會はこんな危険な分子を包容しながら、嘗てその危険に想ひ到らないのだ。

それにしてもヴィーンの下層社會へ投げ込まれたことは私にとりては大なる幸であつた。欲すると欲せざるとに係らず、私は日々社會問題に當面せざるを得なかつた。

私の朝夕接觸する人間は何れも度し難いものであつた。私がそれらの人間と附き合つて行けたのは、墮落して居ると云つても心は良い人間どもであつたからだ。墮落は彼等の罪でなくて社會の罪であつて見れば、責めてみたとして仕方がない。私は徒らに彼等を責めてセンチになるよりも、進んで彼等を救済する方法を考へた。

七、社會問題解決の鍵

勞働問題の解決は勞働者の境遇を改善すると共に、善に還る望なき不良の勞働者を容赦なく處断することだ。私は之が一番有効な方法でないかと思ふ。

自然は今あるものを良くするよりも、後に來るものを良くすることに力を用ゐる。それと同様に人

間の社會でも既に惡に染まつた人間を良くしようとしても、九十九%まで駄目だ。見込のあるのは、これから来る若い者が良くなるやうにしてやることだ。

凡そ慈善なるものは無意義だ。社會運動は慈善運動であつてはならない。現代の生活に於て人々の下層社會へ落ち込んで行くのは、經濟又は文化の根柢に大きな缺陷が存する爲だ。社會運動の使命はその缺陷を見つけて排除するにある。

私はヴァーリンに居た頃社會運動については既に右のやうな結論を持つて居た。

労働者のうちでも非國家的の不良分子は躊躇することなく、とり除かねばならぬが、扱て労働者を取り締るには、之を取締るに先だち、與へるものを與へて置かねばならぬ。労働者の境遇を改善せずしてストライキを抑壓せんとするは當を得たものでない。オーストリアは社會的立法といふやうなものを殆んど持つて居なかつた。それ故に不穩な労働者の取締りに就ても、思ひきつたことが出来なかつたのは當然だ。

八、國家觀念の缺如

ヴァーリンに居た頃の仲間の労働者は經濟的に困つて居たばかりでなく、道德的には墮落し、文化的には無智であつた。而してこれも亦經濟問題に劣らぬ厄介な問題であつた。

こゝに一人の與太者があつて、僕はドイツ人であらうとあるまいと、そんなことはどうでも良い、食つてさへゆければ良いのだと言つたら、何人も憤慨せざるものはあるまい。

ドイツ人であつてもドイツ人でなくても構はぬといふのは、いかにも祖國を侮辱した言葉である。ドイツ人ならばかゝる非國民的言辭を默して聞いて居ないであらう。

然りながら、同じくドイツ人である。己はドイツ人たるを誇りとし、他の者はドイツ人たることに何等の誇りをも感じないのはどういふ譯か。そこに何等かの原因があらう。それを注意して研究したものがあるか。

ドイツ民族は輝しき歴史を有してゐる。而して我等がドイツ人たるを誇りとするのもそのためであるが、我等のうちで眞に祖國の歴史を理解してゐるものがあるかどうか。

國民の祖國愛を強めるものは祖國の歴史である。然るに我等の間では子弟に歴史を教へることが疎かにされてゐる。而して之も亦久しく識者の注意を逸してゐる。

人或は云ふ、労働者に國家的の觀念のないのはドイツばかりでない。どこの國でも同じことだ。國家觀念が薄いと云つたとて國民たることには關係がないと。然りながら他國のことは他國のことだ。我等の關知したことでない。他國の労働者に愛國の思想が乏しいからといって、我等の間でも非愛國的な労働者をそのまゝに放任して置くといふ理由にはならない。況んや外國の労働者は頗る愛國思想

盛んなるに於てをやだ。例へばフランスの如き、専ら國民の愛國思想を涵養するに努め、祖國の偉大なことを説いて少年を鼓舞するから、フランスの勞働者は勞働運動に携つて居ても、フランス人であることを一度でも忘れることはない。

三六

ドイツでは、こんな教育が行はれないばかりでなく、偶々學校で學んでも、家庭に歸つて來れば洗ひ流されて跡をもとめなくなる。試みに兒童の育つ環境を想像してみよう。

濕つばい二室ばかりの貧民長屋に七人家族の勞働者が住んで居ると假定しよう。五人の子供のうち末の子は三歳とする。三歳と云へばもう物心のつく頃で、頭の良い人間だと高齡になつてもこの頃の思出をはつきり覚えてゐるものがある。扱て、狭い室に多くの人間が住んでゐるんだから、ろくなことがない。朝から晩まで喧嘩ばかりだ。之が廣い家で、どこか行くところがあれば、喧嘩しても離れてゐるうちに納まつて了うのだが、顔と顔とをつき合はせて居るところでは、やんだかと思へば直ぐに始まり、喧嘩のやむ時がないのも止むを得ない。それも子供同志ならまだ良いが、夫婦喧嘩となると手のつけやうがない。彼等は無論子供の前で掴み合をやる。亭主は酔ばらつて來て女房をぶつたり、蹴つたりする。こんな所に育つ子供の行末が、どんなものであるかは想像に餘あらう。子供が六歳頃になるともう大人もあされる程の仕草をする。それでも市民の子弟として小學校へ行くが榮養不良で身體は弱く、家庭がわるいから智能の發達も良くない。學校へ通つて讀み書きが出來れば上の方だ。無論

家庭で教へてもらふといふことはない。家庭と云へば反つてゐるいしつけを教へ込むところとなつて居る。父親は酒を食らつて世間を罵つてゐる。子供の前で先生や學校のわる口ばかり云つて得意になつて居る。凡そこの種の下層社會では、宗教もなければ道徳もない。國家もなければ社會もない。唯獸の如き生活あるのみだ。かくて十四歳になつて學校を出る頃は子供も一人前になり、世の中を白眼視するやうになつてゐるが、無智なことは驚くばかりだ。

彼等は恐いもの知らずのしれものである。こんなしれものが世の中へ出て行くのだ。考へて見ればこれ程危険なことはない。こんな子供には學校を出る時から、もう「おかみ」の威光などは眼中にないのだ。

學校を終へて世の中へ出る彼等は、おやぢと同じやうに給料を手にすれば飲んでゐるき、氣に入らなければ、おふくろでも何でも頼着なくぐりとばす。そのうちに何かの機會に引つばられて半屋へぶち込まれると、磨きのかゝつた立派な惡漢となる。

之等の惡漢に國家觀念とか、愛國思想のないのは當然のことである。彼等は國際的無籍者であるが無籍者になるにも理由がある。それを究めずして徒らに彼等を罵るのは聞えぬ話だ。

大衆の非國家的思想を煽るには、わるい新聞雜誌や、あくだい、演藝映畫の影響が少くない。従つて大衆を愛國的ならしむるには、先づ非國家的の讀み物や演藝を取締る必要がある。

三七

就中、大衆の愛國思想を養成するに必要なことは、労働者の生活條件を改善し、家庭をして子弟教育の温床たらしめ、同時に學校に於て祖國の偉大さを教へさせることである。蓋し己の國を偉いと思ふから、その國に生れたことを誇りとするのだ。偉いと知らなければ、その國に生れたことを誇りとする考へは浮んで來ない。國の爲に欣んで死するの心あるは國を愛するが爲であり、國を愛するは國を敬する爲であり、國を敬するは國を知るが爲である。我等は先づ祖國の偉大さを知る爲に我等の歴史を學ばねばならぬ。

三八

九、讀書論

かくて私は社會問題を根本的に研究することとなつた。

一九〇九年から一〇年にかけては、私自らの境遇も多少變つて來た。私はこれまでのやうに下働きでなく、獨立した一人前の畫かきになつた。この方は暮しは困難であつたが、選んだ途を歩いて行くには都合が好かつた。私はこれまでのやうに仕事場から歸つて來ても疲れ切つて本も讀めないやうなことがなく、時間に餘裕が出來たばかりでなく、やつて居る仕事が自分のこれからやつて行かうといふ仕事に縁のないものでないから、働いて居ても働き甲斐があり、その上自分で欲するが儘に時間の都合をつけることが出來た。私は働きつゝ勉強した。

私は既に社會問題についていろいろの場面を見せつけられた。足りないところはそれを裏づけるだけの理論が私に出來て居ないばかりだ。そこで時間の餘裕が出來るとともに私はこの方面の書物を漁つた。私は讀んでは考へた。

當時の私を傍から見居たら恐らくは狂人のやうに思はれたであらう。社會問題を研究しながら私の心は常に建築にあつたことは勿論である。音楽を除いたら私にとりては建築は藝術の司であつた。建築の研究は勉強でなくて愉快であつた。私は深更に至るまで讀んでは繪を畫き、畫いては讀んで疲れを知らなかつた。建築師になるのが私の未來の夢であつた。かくて私は勉強を続けるうちにこれならば假令遅れることはあつても、私の夢は必ず實現するであらうと自ら信ずるに至つた。

建築の研究に心を傾け、社會問題に興味を持つた私は、政治にも少からぬ關心を抱いた。然しながらそれは普通の人間なら當然のことであると思つたから、特に氣にとめるといふことはなかつた。

政治に理解のない人間は政治を云爲する資格はない。それ故に私は政治に就ても出來るだけ本を讀んだ。但し私の讀み方は所謂インテリの讀み方とは大分異つて居た。

世の中には限りなく讀む人間がある。彼等は書籍から書籍に移り、文字から文字へ目を移して行く。それでも私は彼等を讀書人とは云はない。彼等は恐らくは物識りであらう。然りながら讀んだものをこなして、頭のなかで整理する力がない。書物を讀んでもさしあたり己に必要なことと、必要で

三九

ないことがある。そこで必要なことは、つて死ぬまで頭にとめて置かねばならぬ。不必要なものは出来るなら始めから讀まぬに越したことはないが、讀んでも成るべく早く忘れるやうになし、いつまでも背負つて居ては不可ない。普通の讀書人にはこの必要なことと、不必要なことの取捨が出来ないのだ。讀書は手段であつて目的でない。之も讀書人の心得で置くべきことだ。讀書のうちには職業の用に資するものと、修養の爲にするものがあるけれども、何れにしても讀んだものがその儘頭のうちに束ねられて居るやうでは役をなさぬ。讀んだものは直ちに生きて働くのでなければ眞の讀書とは云はれない。然らざる限り讀書したら反つて馬鹿になるばかりだ。多くの者のうちには書籍を讀むこと愈々多くして愈々世間の實情に迂くなるものがある。こんなのに限り自分は物識りで世間を知つて居ると、ぬ惚れて居るのが多いのは痛嘆の至りだ。殊に代議士などにこんな手あいが多い。世上多く書を讀む者は多いが讀んで得た知識を活用する者は少い。讀んだものを漫然と頭に仕舞込んで置くからだ。この種の人間は事があると何の書物に何と書いてあるとか、どの書物の頁は何百あるとか枝葉のことばかり云つて居て、自ら奈何に處すべきやの工夫がつかない。これが一般讀書人の通弊である。

今日廟堂に椅子を並べて居るもの、しりの政治家が迂闊なことばかりやつて居るのも、彼等の間に本を讀む者がなく、本に讀まれた者が多いからだ。

凡そ讀書の術を解するものは書籍を讀んでも、新聞雜誌を讀んでも或は又、よつとしたパンフレットを手にしても、漫然と讀み去ることなく、爲になることとか、或は又必要なことだけに注意し、讀んでそれを覚えて置くやうにする。さうして居るうちに、己の頭が自然に豊富になつて、何か事があつても狼狽することなく、嘗て學んだものを活用して滞りなく問題を處理して行けるやうになる。讀書もここまで來なければ駄目だ。

物を讀つて居るだけではない。讀んだものを實際の役に立てねばならぬこと屢々述べた通りである。唯讀んだといふだけでは他の説を辯駁するにも、又己の説を主張するにも、適切にして人を首肯せしむることが出来ない。それも常人だけの事ですむ時は良いが、物識りと云ふだけで他に能のない人間が政府の首脳となつたりしたら、それこそ災難だ。

私は若い時から讀書に注意し唯漫然と書籍を手にするとはなかつた。此の意味に於てもグーテンの生活は私に最も良い讀書の方法を教へた。私は朝から晩まで下層社會の實際生活を目撃しながら書物に依りて理論の方面を研究した。かくて私は實際の生活に理論を與へ、理論を實際にあてはめて研究して行つたから、同じく社會問題を研究しても、他の人々のやうに理論に偏することなきと同時に又淺薄な實際にとどまつて居ることもなかつた。

私がマルキシズムと社會民主黨の關係を研究するに至つたのも、正に此の時代であつて、之亦當時

私の環境が自ら私を驅つてこゝに至らせたのである。然らざればマルキシズムや社会民主黨についても本當の研究が出来なかつたかも知れぬ。

四二

一〇、社会民主黨の内幕

私は青年時代から社会民主黨なるものの存在を知つて居た。併し社会民主黨に關する私の知識は貧弱で且思ひ違ひが多かつた。

社会民主黨が普通選舉運動の旗を掲げて花々しく戰を開始した時、私は之に共鳴した。ハプスブルグ王朝は早晚瓦解せねばならぬ。而して普通選舉制の採用は必然的にオーストリアの頽勢を促進するだらうとの考へも加はつて居たのである。オーストリアはドイツ人を犠牲にしスラヴ族の力に依つて國を維持せんと試みて居る。併しながらスラヴ族には國家建設の能力がない。ドイツ人を驅逐してスラヴ化したオーストリアを維持せんとしても維持することは出来まい。既に維持の出来ない國家なりとすれば普通選舉に依りスラヴ族の代議士が多くなり、議會が維多利亞民族の討論場となつて早く國が亡びた方がよい。さうすれば私の多年希望する獨逸の合併が、反つて都合よく運ばれるであらう。私はそんなことも考へて社会民主黨の普通選舉運動を歓迎した。

私はまだ若い時分であつて、世間を知らなかつたから、社会民主黨は労働者の爲に戰つて居るもの

との思ひ込んで居た。従つて此の點について私は同黨に對して好感を持つた。唯氣に喰はないのは社会民主黨がオーストリア・ドイツ人の運命にいつも冷淡であつて、時にスラヴ諸黨と苟合妥協してドイツ黨に當ることであつた。

社会民主主義は必ずしも社会主義と同一でない。而も十七歳頃の私は社会民主主義と社会主義との區別も知らなかつた。マルキシズムに就ても何等の知るところがなかつた。然るに偶然の出來事に依つて、私はマルキシズムや社会民主主義の恐しい陰謀であることを知るに至つた。

有體に云へば當時私が社会民主主義を云々しても實際未だ同主義について多く知るところがなかつたのだ。街頭で折々大衆の示威運動を目撃したくゝるが私の知識の總てであつた。黨員の頭の動き方や、黨の實體などについては毫も知るところがなかつた。然るに私は不圖した出來事に依り、普通ならば二三十年かゝつても得られぬものを二三月の間に學習することが出來た。隣人愛とか、社會の爲にとかいふ黨の標語は世を欺く偽りの看板であつて、社会民主主義は世と人とを賊する恐しいベスト菌であつた。

抑も私が始めて社会民主黨の人間とぶつかり合つたのは仕事先の建築場であつた。當時故郷を出て間もない私は、服裝もわるくなつて居なければ言葉も崩れず、人間もすれないから大人しかつた。而して俄かに變つた自分の身の上に心を引かれることが多かつたから、自然周囲の者と口を利くことも

四三

なかつた。私は仕事を求めて口を糊し、徐ろに己の欲する途に精進しようと、そればかり考へて居た。それ故に若しそのまゝ行つたら、私は遂に仲間の者共と知り合ふこともなくてすんだであらうと思ふ。然るに私が仕事場へ通ふことになつてから三日目であつたか、或は四日目であつたか、はつきりしたことは忘れたが、ある日のこと、先方から私に組合加入を勧誘して來た。

私は労働組合の何ものであるかを知らなかつたから、彼等からの加入の勧告を受けた時私は直ちに辭退した。私は、まだ労働組合なるものを知らないからといふのが第一の理由であり、強ひられて入るのは厭だといふのが第二の理由であつた。それでもその時に直ぐ追ひ出されなかつたのは、知らないから加入せぬといふのは無理のないことだとされた爲であらう。彼等はそのうちに加入するに相違ないと思つて居たらしい。飽く迄加入を拒めば腕づくで加入させるばかりだとも考へて居たのであらう。ところがそれがとんでもない誤算であつた。二週間の間に私は周囲の者共を熱心に考察した。そして彼等の様子の好もしくらぬことを知るに及んで、私は漸じて組合に加入せぬことに決した。私の決心は挺子でも動かさぬ程固いものとなつた。

仕事場では正午になると一部の者は近所のカフェーへ出掛けて行き、一部のものは仕事場に就つて粗末な食事をとつた。残つた方は何れも世帯持で、ひるになれば女房が汚い器に入れて晝飯を運んで來た。

私は少し傍へ寄つてビンから牛乳を飲み、パンを嚼つた。而して仲間の者の動作を、それとなく探つたり、或は又思を自分の身の上に馳せたりした。私はかくて人を避けてゐたにも係らず、何でも聞えて來た。聞えて來たといふよりも寧ろ聞えよがしに私に話しかけて居るのだ。而も聞えて來ることは、しやくに觸ることばかりであつた。聞いてゐる私は、ひとりで腹立たしくなつた。ネーションとは資本階級のねごとだといはれた。労働者を搾取るブルジョアの機關、それが祖國だとも言つた。法律の權威！それが何だ、プロレタリア彈壓の手段ではないか。學校は奴隸たる労働者の卵を養成するところだ。宗教は搾取される労働者の頭を、ひさせる阿片だ、等々、其の他あらゆる毒口がつかれた。

始め黙つて聞いて居た私も、終に我慢が出来なくなつた。私は口を利き始めたが、こちらでも研究して材料を握つてかゝらぬ以上、議論をして、でも駄目だと悟つたから、私はひそかに彼等の讀んでゐる書籍を片つ端から讀み始めた。

かくて私は社會民主主義についても彼等以上に學ぶところがあり、議論では往々彼等をへこますところとあるに及んで彼等は奥の手を出して來た。テロで私を脅迫するのだ。彼等は云つた、即座に仕事場を出て行け、然らざれば家根の上からつき落とすぞと。亂暴な話だが、こちらは一人で對手は多數だ。衆寡敵せず、争つたとて勝つ見込はないんだから、私は旗を卷いて引揚げた。これで又一つ経験がふ

えたと思へばそれで良いのだ。

私は足から塵を拂つて仕事場を去つたが、そのまゝ引きさがるのは實に、しやくだつた。時が経つて冷静をとり戻すとともに、私は再び他の仕事場へ行くことにした。一つはその間に、とつて置き、用意の金も費ひ果して、厭でも厭でも働かなくてはならぬといふ事情もあつたのだ。ところがそこでも前と同じやうな活劇があつて、前と同じやうな團圓となつた。私はそこをも引きあげた。私は心ひそかに考へた。こんな人間共をもドイツ人と云ひ得るのかと。私はドイツ人でありながら國を忘れて國際的無籍者のやうになつて行く労働大衆を見て溜息をついた。

それから間もなく、インの町では労働者の大示威運動があつた。四列縦隊でどこまでも續く職工の列は、字の如く長蛇のうねりをなして居た。私は、いきなり殺して二時間も立ち續けて列の過ぐるのを見送つた。そして憂鬱な思を抱いて家路についた時、みすばらしい煙草屋の店頭で労働新聞といふ、所謂「アルバイタ・ツァイツング」紙を目にした。オーストリ社會民主黨の機關新聞なのだ。私が新聞を読みに行くカフェーにもこの新聞はあつたが、厭な新聞だから二分間と読み續けたことはなかつた。然るに示威運動の光景に憤慨して歸りつゝあつた私は、ふとこの新聞を読んでみようと思へるに至つた。而してそれから毎日アルバイタ・ツァイツングを我慢しながら根氣よく讀んだ。

私は前にも述べたやうに、社會民主黨に關する文獻を、出来るだけ多く研究した。而も今アルバイ

タ・ツァイツング紙を讀むに至つて、始めて社會民主黨の内幕を暴き得たやうな感じがした。

蓋しマルキシズムや社會民主主義の掲ぐる理論では、自由とか、ノーブルとかいつたやうな言葉が到るところに説かれてゐる。之に反してその機關新聞は悖德の限りをつくし、うそで固めた低級なものである。理論はインテリに讀ませ、新聞は大衆向きに造つてあるのだ。

私は理論をかいだパンフレットと大衆向の新聞とを併せ讀むに至つて、今迄の愚かな大衆を見る私の目が變つて來た。

大衆に罪がないのだ。憎むべきは社會民主黨であつて、大衆は唯その手先に使はれて居るばかりだ。社會民主黨が憎いと云つて、何も知らない大衆をまで憎むの道理はない。社會民主黨は、非常な勢力を持つて居る。私はやがてその勢力の由つて來る秘密を洞見した。社會民主黨では新聞は赤でなければ讀んでほしくない。集會は赤でなければ行つてはならない。書籍も赤でなければ讀んでほしくない。社會民主黨員たるものは赤以外のものに一切交渉を持つてはならないのだ。誠に横暴なことであるが、社會民主主義の勝利は、標榜する自由にあるのではなくて、この横暴にあるのだ。

一、大衆の心理

蓋し大衆は惹き切らぬことが、きらいなんだ。

世の中の女は理窟や道理よりも力に憧れを持つ。それ故に又弱い男を自由にするよりも、強い男の自由になることを欣ぶ。労働大衆は女である。腰の低い者よりも高く、まつて命令する者に引きつけられる。社会民主党は黨以外の主義や學說を研究してはならぬといふ。而して社会民主党の出版物だけを讀ませる。他を排して黨のものだけを強制するのは精神的テロであり、人間の自由を蹂躪したものであるが、大衆は反つてそれを欣ぶ。總ての運動に押しの必要なものこの爲だ。

社会民主党の勝利はこの押しにある。従つて社会民主党を打倒するには、社会民主党の押しを以て社会民主党よりも優れた主義を通して行くにある。説が優れてゐるといふだけでは不可ない。押しが伴はなければ駄目だ。

かくして後二年を出でざるうちに、マルクスの學說も社会民主党の秘密も、私には、すっかり手品の種があがつた。

社会民主党が黨員に對して赤以外の書籍を讀ませなかつたり、赤以外のものとの交際を禁じたりして、黨員を赤に終始せしめるは精神的テロであること前にも述べた。而して彼等が政敵に對してあらゆるざん、誣中傷を事として、毫も顧みるところのないのも亦この精神的テロに基くのである。

かくて彼等は又道理よりも無理の強いこと、頭より腕のものを言ふことを知るが故に、同じ政敵と云つても氣の弱いものは恐れない。腕つぶしの太い方を警戒する。頭があつても意志の弱いものは恐

るに足らずとして、唯元氣な強いものをのみ警戒するのだ。故に一度氣力のないものと見てとれば、彼等は、おだてあげて之に接近し、いつの間にか仲間へ這入り込んで喰物にする。そのやり方の巧みなことは驚くべきものがある。この手にかゝつたら大抵のものは參つて了ふ。

社会民主党は精神的テロの他に腕力のテロをも併せ用ゐる。これも亦知つて置かねばならぬことだ。

社会民主党の腕力のテロとは、つまり腕力沙汰のことだ。而してその腕力沙汰も亦精神的テロとひとしく大衆の心理を研究した結果で、決して氣まぐれなものではない。

先方が鎗を持つて來れば、こちらも鎗を以て之に應じ、向ふが腕力に出て來れば、こちらも輪にかけた腕力で立ち向つて往けば良いが、向ふが腕力で來て、こちらが黙つて居るやうなことがあれば、大抵の場合腕で來るものが勝を占める。職場でも、工場でも、カフェーでも、集會の席でも、或は又示威運動の場合でも、こちらが大人しくして居れば腕力がものを言ふこと、之亦人々の知るところである。社会民主党の腕力沙汰はこんなことを充分研究してのことである。

社会民主党はかくて好んで腕力に訴へるが、對手も亦腕力で對抗して來る場合には横暴であるとか、官權を無視するものとか云つて、己のことは棚に上げて、警察の取締を要求し、政黨におもねる官憲のあるのを利用してうまく對手を取り締らせる。そのやりくちも亦巧みなものであるが、この

結果對手は意氣地がなくなり、社会民主黨のものばかりが凱歌を擧げることになる。

五〇

かくて社会民主黨の腕力沙汰を見せつけられること愈々多きに及んで、労働者に對する私の同情はいやが上にならなかつた。私は社会民主黨のわいの二三の幹部であつて、黨員たる労働者は道具にされて居るに過ぎないことを知つた。労働者は私とひとしく本來國家的な人間なんだ。私は社会民主黨と労働者とを區別して考へるやうになつた。而して之も亦ウィーン時代の賜物だ。

労働者は全く手先に使はれて居るだけなんだ。人は彼等をドン底生活者だといつて馬鹿にする。併しドン底の暗闇にも美しい光が點ぜられてゐる。仲間への義理の堅いこと、慈のないこと、人の良いことなどは、ドン底生活者共通の美點だ。殊に昔もの労働者は、さうであつたが、都市生活ですれて居たと云つても、若い者のうちにもなほ健全な分子が少くなかつた。彼等はほんとに善良な市民だ。社会民主黨のストライキは國家の害毒である。この善良な市民が國家の害毒たるストライキに加入して悔ゆるところを知らないのは、マルキシズムの害を知らない爲であり、他に労働者を世話してくれる者がなかつた爲であり、最後に社会生活が苦しくて、うそでも労働者の味方と稱する者の許へ奔る他なかつた爲である。彼等を社会民主黨の陣營へ驅り込んだものは彼等の窮迫せる生活であつた。

一二、既成政黨の罪

労働者を社会民主黨に赴かした主なる責任は既成政黨にある。苟くも労働者の生活改善に關する法案とさへ言へば既成政黨はわけもなく反對したものだ。労働者の質のわるいものばかりでなく、組合に加入せる大人しい労働者までが政治運動へ投じ、社会民主黨の勢力を高めて行つたのは、専ら之が爲である。既成政黨には社会問題に對する理解がなかつた。

労働者も始めは社会民主黨に背を向けて居た。而も社會的立法の悉くが既成政黨に依つて葬らるるを見るに及んで、心ならずも社会民主黨に奔らざるを得なかつた。労働者の生活改善に關する提案とさへ言へば、既成政黨は工場保健の設備と云ひ、機械の災害防止と云ひ、幼年工の労働禁止といひ、労働婦人の保護といひ、片端から反對したものだ。それに依つて犯された彼等の過誤は、とり返しのつかぬものであつた。労働大衆は既成政黨を以て理解なきものとなし、労働者の味方と云へば社会民主黨の他になきものと考へるに至つた。思ひ出しても遺憾なことだ。

かくて労働組合は、擧げて社会民主黨の政治運動を支持する團體となつた。

一三、既成政黨の責任

ウィーン時代は總ての點に於て私の修養時代であつた。私は労働組合問題についても考へた。私ははじめ社会民主黨と不可分の關係にあるものと思つて労働組合を憎んで居た。それが二十歳になつて

五一

始めて私の誤りであつたことが判つた。労働組合は労働者の權益を擁護する團體であるが、社会民主党は之を階級闘争の道具に利用してゐる。それ故に同じく労働組合と云つても労働者の權益を擁護する團體としての労働組合と、社会民主党に利用せらるる階級闘争の道具としての労働組合との間に、明らかな區別が劃されねばならぬ。私はそこに思ひ到つたのだ。

五二

労働組合の生命は労働者の權益擁護にある。従つて労働組合の運動は益々勢を加へねばならぬ。ここに着目して味方としたのが社会民主党であつて、同黨の膨脹は全く労働組合を味方とした爲であり、既成政黨の凋落は労働組合を無視した必然の結果である。蓋し労働組合を以て非國家的な運動なりとなすは誤りの甚しきものである。労働者は國家の中堅層をなすものであつて、労働者の生活向上を目的とする限り、労働組合は寧ろ國民的な運動といはるべきである。何となれば社会生活なくして國家思想の涵養はない。従つて労働者の生活を改善せんとする労働組合は、國家思想の涵養に最も熱心なものともいふべきである。労働組合存在の必要なるは論を俟たぬ。

蓋し資本家なるもののうちに、社会問題に理解なく、又正義の觀念を缺くもの少からざる間は、労働者が團體を組織して僭主の貪慾と没分曉とに對抗するは労働者の權利にして義務である。我等は我が國民の間に貪慾と不信とを事とする者を存在せしめてはならぬ。

己さへ良ければそれでよい。同胞の運命など意に介するに足らずとする資本家は、國民の心身を毒

すること甚だしきものである。従て資本家のど、ん、んと破廉恥とを訓する労働組合は、寧ろ國家に貢獻するものとも云ふべきである。

人或は言ふ、雇傭主からひどい目に逢ふやうなことがあつたら、個人で對抗すれば良い。團體を結んで資本家に敵對せんとするのは良くない。然りながら労働問題は國民の重大問題である。既に重大問題なりとすれば、之が解決にあらゆる手段を用ゐることも亦當然であつて、弱いことを言つてゐてはならぬ。

資本家が労働者を犬猫の如くに取扱うて顧みるところなく、而して政府亦之を取締るべき機關を設けずして労働者を資本家のなすが儘に放任する場合には、労働者は團結して資本家に對するの他に途がない。然らざれば戦を開始しても、間もなく敗北して打ちのめされるのは始めから明かなことだ。

かくて労働組合は労働者の權利を確保するを目的とし、發生の動機も亦始めから國家的なものであつた。然るにそれがやがて非國家的な存在となつたのは、一は既成政黨が労働者の運命に冷淡なりし爲であり、一は社会民主党が己の陰謀を遂ぐる爲に労働組合を利用せるに由る。

労働組合は労働者の權利確保を目的とするものである。而して社会民主党は政治的陰謀の手段として労働者の同盟罷業を利用せるものである。労働組合は社会民主党と結合するに至つて労働者保護の機關から國民經濟破壊の機關と化し去つた。労働組合の遺憾とせられるのは組合の政治化である。

五三

一四、労働組合の没落

五四

十九世紀の終から今世紀の始にかけて、労働組合は既に最初の目的を忘れ、社会民主党の爲に狂奔する政治團體となつてゐた。社会民主党に利用されて階級闘争の道具となつたのだ。ドイツの經濟は一方ならぬ努力を以て築き上げられたものだ。然るに社会民主党はストライキに依つて先づドイツの經濟を破壊し、ドイツの經濟を破壊して後ドイツ國家に及ぼした。之は社会民主党の陰謀であつて、労働者の眞の利害などは始めから眼中にないのだ。その労働者の味方たるが如く装ふのは労働者を誘惑する爲に過ぎなかつた。蓋しほんたうに地位が向上すれば労働者は、もはや他の傀儡たるに甘んじなくなるであらう。社会民主党はそれを知つてゐるから、労働者の爲に闘ふと云つてゐても、實て裏心から労働者の爲に闘つたことはない。

労働組合は労働者の生活が豊になれば政治運動から離れて行く。社会民主党はそれを畏れたから労働者の生活改善をはからざるばかりでなく、労働者に有益な立法に表面から反對することさへあつた。かくの如きは労働者の味方と稱する同黨の態度としては不可解なことで考へられるが、而も彼等は之を言ひ抜けるだけの詭辯に毫も不自由を感じなかつた。彼等は言つた、資本家の譲歩は惡魔の誘惑である。資本家は小さいところで譲歩し、大きなところで、ま、か、さうといふのである。我等は彼等

の奸策にのせられてはならぬと。かくて彼等は一再ならず有益な労働立法を葬つた。

既成政黨は勿論社会民主党の右の如き態度を怪しからぬといつて憤慨したが、自ら進んで労働者の爲に働くといふ親切がなかつた。彼等は僅かに社会民主党の矛盾を攻撃するのみで、労働者の爲に有益な立法を作り、それを議會で押し通すだけの勇氣はなかつた。若し彼等に聊かも社會問題を理解し、労働者の利害を考慮するの賢明さがあつたら、労働者は夙に既成政黨に歸し、社会民主党は今日の如き大を致さなかつたであらう。

既成政黨も、後に至り世間の不評なるにつれて漸く社會立法なるものを提出したけれども、その法案は時機を逸せるが爲に注意を惹かず、形式的なものであつたから、労働者からは欣ばれなかつた。かくするうちにやがて政界の一方に自由労働組合なるものが入道雲の如く頭をもたげた。この組合は國民經濟の獨立と國家の鞏固と、個人の自由とを脅かすテロ團の一つであつた。腕力沙汰に訴へて労働者を組合へ加入せしめたることも、彼等の數多き横暴の一つであつた。

一五、ユダヤ人問題

私は此の如くにして略々社会民主党の輪廓を知るに及んで、同黨の内幕をも知らうとする心が口を逐うて強くなつた。

五五

社会民主党の公開する文獻を讀んだだけでは、黨の正體をつかむことは出來ぬ。蓋し同黨の公刊物は經濟問題に關するものは間違だらけなものであり、政治に關するものは出鱈目なものである。殊にその書き振りが私には氣にくはぬ。わからぬことを勿體ぶつて、ど／＼と並べたてて居る社会民主党の文章を、有難がつて讀んで居るのは、これらの閑人ばかりだ。

社会民主党には他人の窺知を許さぬ秘密があるに相違ない。同黨の理論は間違だらけであるが、それにも係らず、どこかに無氣味な暗い力を持つてゐる。私はそれを探求して遂に民主黨の秘密に到達した。

社会民主党の眞の肚を知らんとせばユダヤ人を知る必要がある。ユダヤ人を知ることによつて始めて社会民主党の内幕と、その禍心とが明かになる。人若しユダヤ民族に就て知るところあるに至れば、いままです社会民主党を包んで居た雲や霧が一時に霽れて、その底からマルキシズムのかかしが現はれて來るのを見るであらう。

抑も私がジューといふ言葉を聞いて厭な思を抱くやうになつたのは、いつの頃からであるか。今となつてははつきりしたことを覚えてゐない。父の生きて居た頃は家庭でジューといふ言葉の語頭に上つたのを嘗て耳にしたことはない。父は、い／＼か國際的な考を持つて居り、ユダヤ人などを排斥するは偏狹だと考へて居たからであるらしく、私も亦幼い時はその影響を受けてか、ユダヤ人を排斥するやうなことはなかつた。

小學校時代も同様で特にユダヤ人をわるいとは思はなかつた。

實科學校に居た頃、級に一人のユダヤ人があり、仲間外れのやうになつては居たけれども、之も他の理由があつた爲でなく、その生徒が黙つて居て、さ／＼とく／＼とく／＼といふに過ぎない。

私が屢々ユダヤ人とかジューとかいふ言葉を耳にするに至つたのは十四五歳の頃で、政談演説の時など盛んにジューといふ言葉が辯士の口から放たれた。私は何となくその言葉に不快の響を感じたやうであつたけれども、それも僅かにユダヤ人が異教徒であるといふくらゐのことであつた。それ以上に突込んでユダヤ人の問題を考へることはなかつた。

リンツの町にはユダヤ人が少かつた。而して町に居たユダヤ人は數百年も一所に住み慣れた關係上、すつかり歐羅巴化し、人間らしくなつて見たところドイツ人と區別がつかなかつた。私は彼等をドイツ人とはかり思つて居た。そして他のドイツ人と區別されるのは宗教の關係に止まるものと信じて居た。従つてユダヤ人をわるいものがあると、私は寧ろ之を不快に感じた程である。而して世のなかにユダヤ人排斥の組織的の運動のあることをも未だ知らなかつた。

そのうちにウィーンの首都へ出ることになつた。

ウィーンに入つてから始めの間は軒を連ねる大廈高樓の建築の粹に見とれ、新たに踏み出した世

路の艱難を思ひ、町の生活は目にも入らなかつた。當時は既にヴァーリン二百五十萬の人口中一割の二十五萬はユダヤ人であつたけれども、ユダヤ人なるものは私の目にとまらなかつた。而も一日經ち二日と流れて生活が落ちつき始めると、周囲の様子が今迄の環境と非常に異つて居ることに気がつき出した。私は始めてユダヤ人問題なるものにぶつかつた。

私がユダヤ人問題に注意するに至つた経緯は愉快なものでなかつた。當時私はなほユダヤ人の攻撃されるのは基督教徒でないからだと思つて居たから、ユダヤ人を排斥するものがあると、心の狭いことだと考へた。ドイツ人たる大國民の度量にはあるまじきことだと思つた。ヴァーリンにはユダヤ人排斥の新聞があつたが、私はその新聞が厭であつた。それらの新聞は問題にされない程の無力なものであつた爲といふでもないが、彼等のユダヤ人排斥は深き研究の結果でなく、單に商賣敵の爲に過ぎないと思ひ、多く氣にとめなかつた。

一六、ヴァーリン新聞のカイゼル攻撃

ノイエ・フライエ・プレスとかヴァーナ・ターゲブラットなどはユダヤ人の新聞であつたが、何れも一流の世界的新聞であつた。之等の新聞はユダヤ人排斥の新聞から攻撃されても泥仕合をなすといふことなく、多くの場合攻撃されても黙殺して對手にならなかつた。而して偶々之に答ふことある場合には、どこまでも紳士的態度を持した。それが亦私の氣に入るとともに、私は益々ユダヤ人排斥の新聞のやうく、陋とした。報道の豊富にして公平らしく見えたことも之等大新聞の特色であつた。唯その浮華な書き振りが聊か氣に入らなかつたけれども、大都市の新聞だと思へば當然のことのやうにも思はれた。

かくするうちに私の目についたことは之等大新聞のヴァーリン宮廷に關する記事が白々しい程、おべつかの多いことであつた。苟くも宮中のことさへ言へば小さいことも大袈裟に書き立てるばかりでなく、フランツ・ヨーゼフの如きは帝王中の帝王といふやうに持ち上げたものである。ノイエ・フライエ・プレスでもヴァーナ・ターゲブラットでもデモクラシーの大新聞である。その大新聞が宮廷に、おべつかを使つて居るのはデモクラシーの名折である。私がそれまで好きであつたヴァーリンの大新聞に厭氣のさしはじめたのはこの爲である。

以前からさうであつたが、ヴァーリンへ來てからも私は政治でも文化でも苟くもドイツに關係あるものは注意して讀んだ。當時のドイツは東天の日であり、オーストリアは西天の日であつた。私は昇るものと没し去るものとを較べて、そかにドイツの隆盛を心に欣んだ。政治の點ではドイツの外交は活潑を極めた。私はカイゼルを以て全ドイツ人のカイゼルなりと認むると共に、偉大な海軍の創設者であることに對して多大の尊敬を拂つた。そのカイゼルに對し議會が嵌口令に依つてカイゼルの口を封じ

て居ることは私にとって不可解なことであつた。私は憤懣に堪へなかつた

六〇

與太者揃ひの議會が勝手に、おしやべりをしながら、國家の元首であるカイゼルに喋らせないとは何事だ。世のなかにこんなわけのわからぬことはない。

然りながら、それにも増して私の不快に感じたのは例のヴァーリンの大新聞が婉曲にはあるが、事ある毎に隣邦ドイツのカイゼルを、わ、いふことである。我等は他國の内政に干渉せんとする者ではないが、時にその痛い傷口に指を觸れるのも同盟國民の誼であり、義務でもあるといつたやうな、ちやわした筆使ひで、皮肉な攻撃を續けたものである。こんな記事を読む時はいつもくわつと血が頭へ上るのを感じた。之が又ヴァーリンの大新聞に反感を持たせた一つの理由となつた。

當時ヴァーリンにフォルクスブラットと稱するユダヤ人排斥の新聞があつた。大新聞のドイツ攻撃と反對に、フォルクスブラットはカイゼルを擁護した。私はいつかそれを徳とするに至つた。

ヴァーリンの大新聞が厭になつた理由は前に述べたが、そればかりでなく、ヴァーリンの新聞を厭と思はせたもう一つの理由がある。それはヴァーリンの新聞の濃厚な親佛的色彩であつた。彼等はフランスを以て世界文化の大本山なりとして讃めた、へ、寧ろドイツ人たるを恥とするやうな態度があつた。そんな記事にぶつかる毎に私は所謂大新聞を抛り出して、例のフォルクスブラットを手取るやうになつた。同新聞は無論甚しいユダヤ人排斥であつたが、その主張には見るべく聞くべきものが少くなかつた。

つた。私は次第にフォルクスブラットに共鳴すると共に、いろいろの事から當時のヴァーリン政界を牛耳つて居たカール・リューゲルと、その率ゐる基督教社會黨の運動にも關心を持つに至つた。

ヴァーリンへ來た當座はリューゲルも基督教社會黨も私は嫌であつた。人間もその運動も反動的だと思へたのである。然るにその後リューゲルと基督教社會黨の運動とを知るに及んで、私はリューゲルを見直した。反動的と見て居たリューゲルは偉い人間になつて來た。ドイツ人で彼程腕利きの市長はなかつた。

リューゲル及び基督教社會黨を見る目が變るとともに、私の頭にもいろいろの變化が生じた。良いと思つてゐたものがわるくなつたり、わるいと思つて居たものが良くなつたりした。

かくてユダヤ人排斥に關する私の考へも、生きた經驗を重ねるに至つて漸く變化を示した。

私は感情に於て排ユダヤ主義を退け、理性に於て之を是とした。而も二ヶ年に互る心の葛藤の後理性は感情を征服して排ユダヤ主義に對する私の態度は確乎不動なものとなつた。

排ユダヤ主義則ちアンチ・セミチズムに關し私が心のうちに悶えを感じて居た時であつた。私は街頭に於てアンチ・セミチズムに就て實物教育に接した。私は町を歩いても建築ばかりに見とれて居た時代は過ぎて、そこを往來する人間にも目を向けるやうになつて居た。

かくてある日、偶々通りすがりに黒い髪をして長いカフタンに身を包んで居る人間に出遇つた。始

六一

めは之もユダヤ人なのかと思つた。リンツの町では、ユダヤ人はこんな風をしてゐなかつた。そこで私がひそかにその人物の顔や姿を見廻はすに及んで、今度は之もドイツ人といふべきなのかと思つた。

六二

私はいつもの通り數、ヘラの金を出してアンチ・セミチズムの本を買つた。之が私の始めて手にした排ユダヤ主義の書籍である。遺憾ながらその書籍はユダヤ人排斥に就て相當研究した者でなければ讀んでも判らぬ。大雑把なものであるばかりでなく、説明も非科學的であつて多く役に立たなかつた。それにしても、此の頃の私はユダヤ人に就てもいゝ、から正しい判断を持つやうになつて居た。以前はユダヤ人を排斥するのは宗教を異にする爲であつて、ユダヤ人だとしてドイツ人たることは變りがないと考へて居た私は、もうその考の間違であることに氣がついて居た。ユダヤ人とは宗教を異にするドイツ人ではなくてドイツ人とは全然種族を異にする人間なのだ。私は最早やユダヤ人をドイツ人ととは思はなくなつて居た。かう考へて周囲を見るとダーリンの町の姿が俄かに變つて来る。都心に近い部分とドナウカナルの北部にはユダヤ人がウヨ／＼して居た。而して之等の地域のユダヤ人は容貌からして既にドイツ人でないことが明かであり、見れば見る程特別の種族であることを思はせた。

當時ダーリンの町にもシオン運動が盛んであつた。シオン運動は各國に散在するユダヤ人が故郷のバレスチナへ歸つて纏まつた國家を造らうといふのである。然るに自由主義を標榜する一部のユダヤ

人は之を欣ばなかつた。蓋し、彼等が今日の地位を保つてゐるのは、白人の間に交つて白人らしい顔をしてゐる爲である。若しユダヤ人として明かに區別されるやうになつたら、非常に不便である。彼等がシオン運動に反對なのは、ユダヤ人たることを他から知らるゝのが厭なのである。利己的といふべきだ。

ユダヤ人は純潔な人間である、と彼等自らはいふ。然しながら實際さうでないことは、外から見ただけでも明かである。ユダヤ人は近づくともう臭い香がする。その上着物はあかじみて歩く格好まで無氣味だ。ユダヤ人は見ただけで厭な感じを與へる人種だが、厭なのは形ばかりでなく、内面の精神的な生活が亦不潔極まるものがある。

凡そ文藝、演劇、新聞、映畫の墮落今日程甚しきはない。而もこの墮落はみなユダヤ人から来るのであつて、映畫でも演劇でも、名の賣れて居る者は何れもユダヤ人である。ベストは恐しい病氣である。ユダヤ人の文化生活に及ぼす害毒はベストよりも甚しい。彼等は卑猥な作品に依つて觀客の心を毒する。

ユダヤ人自らは天の選民だといふ。或はさうであるかも知れぬ。併し良き意味の選民でなくて惡き此の世に振りまく爲の選民だ。

ユダヤ人の人口は總人口の一分にも當らずして文學、映畫、演劇の作品は九割九分までユダヤ人の

六三

手に成れるものである。ユダヤ人は映書や演劇を獨占して居た。而して彼の所謂世界的大新聞と稱せられるものも亦同様ユダヤ人のものであつた。私は再びウィーンの大新聞を読み直した。

今度はすつかり見方が違つた。嘗てはうまいと思つた新聞の書き振りが氣觸になつた。内容は淺薄に思はれて來た。而して公正なりと思はれた記事は、公正でなくて虚偽であつた。その上記者は何れもユダヤ人であつた。同時に私はいろいろのことを學んだ。

ウィーンの新聞の自由主義は嘘であつた。他の攻撃に對して町重であつたり、或は又默殺して對手にならなかつたのはトリックであつた。批評欄で讃め上げられて居る文士や映書俳優はユダヤ人で、ドイツ人の文士や俳優はいつもわるく言はれた。同時にフランス文化は賞揚せられて、ドイツのカイゼルはこき下ろされた。かくウィーンの新聞のドイツ嫌は抑も何に由るのか。それは偶然の結果であるのか、或は又故意にドイツを傷けんとするのか。ユダヤ人は馬鹿でない。ドイツ人をかくの如く嫌ふのは何かの理由がなければなるまい。

凡そ南フランスの船つきを除いて賣春の風の甚しいのはウィーンの町に過ぐるものはない。日が暮れてレオポルド・シュタットの町や辻を歩くと、うるさい程袖を引くもののあることは餘りにも有名だ。而もこの淫賣を商賣にさせてゐる者はユダヤ人なのだ。

世のなかに厭な商賣が少くない。併し淫賣程賤しむべく憎むべきはない。而もこの賤しむべき商賣を營業としてゐるのがユダヤ人であるとすれば、ユダヤ人は他のところでも何をなしてゐるかわからない。私は今や總てのわるいものゝ奥にユダヤ人のあることを知るに至つた。而して社會民主黨を動かして居るのも亦畢竟ユダヤ人の魔手であることに思ひ至つて、私のこれまでの疑惑は一朝にして解き明かされた。

私は仲間の労働者と議論する毎に、彼等の没分曉なのに惱まされた。彼等はいつも不満であつた。それも良い。彼等は資本家を憎んだ。それも良い。彼等は官憲を敵視した。それも良い。資本家は無情であり、官憲は労働者の世話をしない。而して労働者は人間の生活をなしてゐないのだ。自ら不満であり、資本家や役人を憎むのに何の無理があらう。食料品の値下を要求して街頭に示威運動を試みることも必ずしもわるいとは云はれぬ。それにはそれだけの諒とすべき理由がある。唯労働者の労働運動について、うしろも附に落ちないのは、彼等のドイツ人でありながらドイツの歴史を忘れてドイツをわるく言ふことである。而も此のことだけは、いくら言つて聞かせてもわからない。而して彼等がかくの如く非國家的なもの、これ亦社會民主黨とユダヤ人とにだまされてゐるのだ。

一七、マルキシズムは人類の敵

社會民主黨の新聞がユダヤ人に依つて動かされて居ることは以前から氣がついて居た。併しそれは

一二の大新聞ばかりでなく、どの新聞だつて同じであつたから、私は深く氣にとめなかつたが、國家主義の新聞といふと、記者に一人のユダヤ人も居ないことだけは不思議であつた。然るにユダヤ人と社會民主黨の關係が明かにされてからは、今迄唯不思議とのみ思はれたこともそれだけの理由のあることがわかつて來た。

六六

社會民主黨は徹頭徹尾ユダヤ人の機關だ。新聞社は發行人から記者に至るまでユダヤ人である。社會民主黨のバンフレットをとつて見ると、筆者は何れもユダヤ人だ。代議員會の代議士、勞働組合の幹部、街頭の宣傳者にして苟くも名ある者はユダヤ人であつた。試みに思へ、アウステルリッツ、アイドラ、エーレンボーゲン、ダビッド等は隠れもないユダヤ人だ。私はかくて社會民主黨を動かす勢力がドイツ人のやうな顔をして居るが、ドイツ人でない他の民族も、ユダヤ民族の掌中にあることを確むるを得た。

ユダヤ人であり社會民主黨である。勞働者は、わがらぬことを言つても、こちらの道理が正しければ過を改めてこちらの云ふことに耳を傾けて來る。私は僅か一年の経験であつたけれども、勞働者は之を救ふの望あることを知つた。

之に反して、ユダヤ人は何と云つてもついて來ない。彼等は始め馬鹿にして議論を吹きかけて來るが手硬いと思ふと急に話頭を他に轉じて誤魔化して丁ふ。誤魔化しが利かなくてグーの音も出なくなると降参したやうなことを言ふが、翌日になるともう忘れたやうな顔をしてゐる。

要するにわるいのはユダヤ人であつて、可哀相なのは操られて踊つて居るドイツの勞働者である。私はユダヤ人を知り社會民主黨の首領達の惡戯を知るに至つて、彼等の魔手より勞働者を救ひ出すことを自分の使命と信ずるに至つた。

勞働者に罪はない。勞働者をして社會民主黨へ奔らせたのは勞働問題に理解のなかつた既成政黨の罪だ。社會民主黨やマルキシズムを放任して取締ることを知らなかつた爲政者の罪だ。

私はマルキシズムの真相を探り始めた。今やマルキシズムは全盛を極めて居り、マルキシストは口を逐ふて増加しつゝある。此の勢で進んだならば結果は知るべきのみだ。マルキシズムは有害な運動である。唯問題は社會民主黨に赴くドイツの人々が、有害なことを知りつゝ運動してゐるのか、知らないで參加してゐるかである。

マルキシズムは畢竟人類文化の破壊と世界の荒廢とを招來せざるを得ない。ドイツ人にして社會民主黨に奔れる人々が、知らずして之に關係してゐるとすれば無論多く責むべきでないが、然らずして意識的にマルキシズムを鼓吹してゐるものとすれば、彼等の行動は人間でなくて惡魔である。

かくて私は、マルキシズムの内幕を更に深く研究する爲に社會民主黨の連中に接觸して往つた。而

六七

して案外に速く彼等の秘密を握ることが出来た。それは丁度私がユダヤ人の研究を始めた時であり、ユダヤ人の二枚舌を充分心得て居たからであらうと思ふ。マルキシズムは書物の表からはわからぬ。その裏を見なければならぬ。

やがて私の心に大きな革命が起つた。私は弱い世界同胞主義から頑強な排ユダヤ人主義に轉じた。徹底した排ユダヤ人主義者となる前にも、一度私は振り返つて考へて見た。ユダヤ人の陰險なことは言ふまでもないが、それにしても此の民族の頑強さは、どうだ、世の中は畢竟ユダヤ人の天下となるのではあるまいかと。然しながら私は再びそれを否定した。

自然はアリストクラシーである。優れた者、力ある者が勝つ。マルキシズムは自然のアリストクラシーに反し、大衆の力を説く。人類文化の進歩は各民族が分れて國を建てて居るからである。マルキシズムは國內にありては個人の價値を否定し、外にありては國家の存在を否定し、世界を擧げて混亂の巷に化せんとする。ユダヤ人がマルキシズムの力を借りて世界から國といふものを亡くし得たとすれば、我等の住む地球星は遠からずして死の墓場となるであらう。我等はユダヤ人をして跋扈せしむべきでない。マルキシズムは自然の法則に背馳するものは神の御心に反するものである。従つて私が打倒マルキシズムの旗を押し立ててユダヤ人を排撃するのは、神の御旨に依るものである。私はさう信じて疑はない。

第三章 ヴァーの巻

一、若くして政治家となる勿れ

特別の天分のあるものは別だが、人生れて三十歳以前に政治に携はつてはならぬ。これは私の常に抱懐する持論である。蓋し政治問題について自分に意見が立つまでは、人事一般の修養が必要である。人間三十歳迄は則ち修養の時代であつて、夫が過ぎれば思想も固まつて徒らに他から動かされることもなく、自分にも独自の判断が出来てくる。こゝまで来れば大丈夫だ。私が男子三十歳になるまで政治に關與するなといふのは之が爲である。

若し思想の固まらないうちに關係しつか一黨一派の首領とでもなるやうなことがあれば、他日思想の慣熟するにつれて從來の主義主張を中途で改めねばならなくなるやうな事も出来る。然らば心のうちで、わゝいとは知りながら、改めることが出来ずして、いつまでも誤つた主張を固持して居なければならぬやうなことになる。第一の場合には自分が先づ不愉快であつて、部下に對しても強いことが言へなくなり、部下の者は今迄攻撃して來た反對黨に對して面目が立たなくなる。又主義が既に

變つて居りながら行きがかりの爲にそれを固守して居る第二の場合には、己の言ふことが空虚になつて力がない。而も、自分が既に信じて居ないくせに、部下のものには強ひて之を信じさせようとして、いろ／＼破廉恥な行爲を敢てしなければならなくなる。今日世の政黨者流と稱するもののうちに無節操を以て節操とし、あつかましくその上う、そのうまい人間の多いのも、一つは時代にとり残された黨の主義を、強ひて守つて居るものが多い爲でもある。之等の人々は政治的破産者である。

次に思想の固まらぬ若年のうちに代議士にでも打つて出るやうなことがあれば、亦當人一生の不幸であつて、こんな人間が一度議會の味を占めると、代議士になつて出ることばかりが政治の全部となり、それのみ浮身をやつし、やがて妻君や子供までが代議士の空名に憧れるやうになつてくるとど、うしても落選が出来なくなり、他を排しても己だけが當選しようとする結果は、少しでも政治に興味を持つて居る人間は、誰でも己の政敵のやうに思はれ、政界に何等かの運動が起ると、先づ自分の地位が心配になり、少しでも己より才能のある候補者が現はれると不安で眠れず、朝から晩まで片時も落着いて居られなくなるのが之等の人物に通有の弊害である。

人間の修養は三十歳に限つたことはない。三十歳を過ぎても學ぶべきことは多々ある。併しながら人は三十歳迄に大體思想の傾向が固まるのであつて、夫れから後は、前に學んだことの増強又は完成となり、將來の主張を全部書き換へるやうな心の變化などは起らないのを常とする。従つて己の率ゐ

る部下の者も之迄教へられたことを、中途で俄かに捨てねばならぬといふやうな苦しい立場に置かれることがなく、黨首の修養の深まるにつれて、信頼を増すことになる。

政治家が一度自己の主張の誤れることを悟つたら、他から云はれるまでもなく自ら處決の途を講ずべきである。夫れが政治家として當然の義務である。即ち自分の主張が誤であつたと分つたら、潔く之を捨てると共に、政界の表面より勇敢に引退するのである。己既に一度部下を誤つたのである。今後再び同じ過ちを繰り返さないとな誰が保證し得よう。いづれにせよ、世人を誤つた政治家が平然として政界にのさばつて居るが如きは到底許さるべきでない。

私は右の如き理由に依り思想の熟せざるうちに、政界に出ることを避けた。他の事なら知らず、苟くも政治のことなら、他人に比して、ひけはとらぬとの自信はあつたが、夫れを抑へて出なかつたのもその爲だ。唯少數の仲間のものとは時に政治問題を論じたこともある。而して夫が又他日非常に役に立つたといふのは、かくの如く友達と個人的に話し合つて居るうちに、大きな集會の席では得られぬいろ／＼の經驗を得ることが出来たからである。顔と顔とをつき合せて話して居ると、思ひもよらぬ奇抜な質問にぶつかるともあれば、又、こんなことが解らないのかと思ふやうなぢつた、いことも度度ある。同時に夫れによつて大衆の心理なるものを知ることが出来、私の修養にもなつたが之を修養といふならドイツのどこへ行つても私の居た當時のヴァーレン程修養の機會の多いところはなかつた。

二、オーストリ瓦解の運命

オーストリが王國の心臓であつたとすれば、首都ウィーンはオーストリの頭であり、同時にその意思であつた。

戦前のオーストリは既に民族争闘の巷と化して居たけれども、ウィーンは昔ながらのきびやかさを示した。而してウィーンの外観に眩惑された者は、二重帝國の運命が土崩瓦解の瀬戸際に迫つて居ることを悟るに由がなかつた。殊に當時のウィーンは消え去らんとする蠟燭の最後の妖光を見せて居たのだから、他國の人にはオーストリの内部が一層わからなかつた。

當時のウィーンの市長はリューゲル博士であつた。彼はオーストリ・ドイツ人のうちでも最もドイツ的の男であり、世の所謂政治家といふものではなかつたが、三面六臂、あらゆるところへ手を延ばし、目ざましい活動をした上に於て普通の政治家の遠く及ばぬところがあつた。殊に外交方面に於ける活動に至つては、本職の外交家達が東になつて行つても足許へ寄りつけないものがあつた。ウィーンは彼を得て益々外観を張つた爲、ウィーンを見た者は何人もオーストリが存亡の危機にあることは氣がつかなかつた。

かくてウィーンの榮も亡び行く運命を挽回する能はずして、オーストリは遂に瓦解した。併しオー

ストリの潰滅は決してオーストリ・ドイツ人の政治的無能に由る爲でない。オーストリは雑多の民族を包容した人口五千萬の大帝國である。そのうちドイツ人は千萬人に過ぎない。千萬人の少數を以て五千萬人の異種族の國家を率ゐて行くだけの前提條件が充たされねばならぬ。さうでなければ如何にドイツ人が優秀でも國を支へることは出来ない。ところでオーストリの政治はドイツ人を働かせる前提を缺いて居た。

オーストリ・ドイツ人には大きな抱負があつた。夫れは他でもない、オーストリがドイツから離れた後に於ても、オーストリ・ドイツ人は本國から離れたものとは考へず、依然としてもとのドイツに屬するものと考へた。而してドイツ民族としてオーストリ・ハンガリ内の異種族を統御して行くのは祖先の遺業を守る所以であると考へた。蓋しオーストリ・ハンガリの國土は、ドイツ民族が嘗て劍によつて獲得した地方である。オーストリ・ドイツ人は本國のドイツ人に代つて、之等の地方を守るといふ意氣があつた。

オーストリは多種多様の民族の居住するところだ。従つて同じくオーストリと云つても、土地の異なるに従つて全然地方の事情が異なる。夫れでもドイツ人だけは國內どこへ行つても經濟的關係を持つて居ないところはなく、大きな企業と云へば殆んどドイツ人の所有で、官吏でも技術家でも主立つたものはドイツ人であり、外國貿易もドイツ人の手にあつた。ドイツ人は又政治的にも優越な地位を占

め、軍隊でもドイツ人はドイツの聯隊に入つた。而してドイツ聯隊なるものはヴィーンの地方ばかりでなく、ヘルツェゴウィナにもあればガリシヤにもあり、その上將校も亦ドイツ人が絶對的に多數であつた。科學、藝術亦然りて、ヴィーンは音樂、繪畫、彫刻の盡さざる生命の源泉であつた。而して外交がドイツ人の手にあつたことはこれ亦言ふまでもない。かくてオーストリアは事實に於てドイツ人の勢力下にあつたと言つてよい。唯ドイツ人が之だけの勢力を擁しながら、遂にオーストリアの亡滅を防ぐことの出来なかつたのには理由がある。

七四

オーストリアは民族の寄合世帯である。而して各民族は乗すべき間隙さへあれば四方へ離れ去らんとするものであるから、之を一つの國家に纏めて行かうすれば、欲すると否とを問はず鞏固な中央集權が必要となつて来る。オーストリアは中央集權でなければ治まらない。中央集權の出来ないオーストリアは瓦解の他に道がないのだ。

オーストリアでも此に思ひ至つたものがないではなかつたが、多くのものは思つても間もなく忘れて了つた。然らざれば實行の出来ないことだと云つて始めから投げた。然りながら前にも言つたやうに中央集權でなくてはオーストリアの存立は困難だ。此の點はドイツとは著しく事情が違ふ。ドイツ人は割據主義で容易に一つにならないと云つても、夫れは唯政治的に分裂して居るといふだけで、文化的には、ドイツ人といふ共同の紐帶で繋がれて居るが、オーストリアには民族的文化の紐帶なるものがない。

い。オーストリアは所詮力で纏めて行くの他はない。

オーストリアの民族は各々傳襲を異にしてゐるばかりでなく、バルカン地方にスラヴ族獨立國家が出来、夫れが又外からいろいろの誘惑を試みるやうになつてからは、國內異種族の統御はオーストリアにとりて益々困難な問題となつた。

オーストリア諸民族の遠心的傾向は各民族が争うて各自の首都を持つやうになつて、漸く露骨となつた。ハンガリ人の都ブダペストは先づウィーンと競争するやうになつた。オーストリアの重心の一つがハンガリへ移つたのだ。而して間もなくブラグが之に倣ひ、レーンベルグ、ライバツハも亦民族的の都市となつた。かくて之等の都市はオーストリアの地方的都市より各民族の中央都市となるに及んで各民族がオーストリアといふ共同の國家の運命よりも、各民族の獨立した利害を考へるやうになつたのは是非もない。此の如くにしてオーストリアが亡びなかつたらそれこそ奇蹟だ。

オーストリア土崩の勢はヨゼフ二世の崩御以來特に明かとなつた。蓋しオーストリアを維持する途は鐵腕を以て中央集權を強行するにある。而して中央集權を強行せんとせば先づ國語の統一をはかる必要がある。國語の統一なくしてオーストリアの存立を考へることは出来ぬ。次は學校教育に依りて統一國家の觀念を養成することである。この事たる、十年二十年の短い歲月の良くするところでない。植民地の統治は一時の勉強よりも根氣の良い努力を要する。教育も亦これと同じく、良き成績を擧げんと

七五

せば、百年二百年といふ長年月のかかるのを畏れてはならぬ。

七六

獨り國語と教育ばかりでなく、行政も中央に統一されること、之亦言ふ迄もない。然るにオーストリではそれが行はれなかつた。何故に行はれなかつたか、或は、もつと率直に云へば何故にそれを行はなかつたか。その理由を、きめ、ことは私にとりて極めて大切なことであつた。蓋しオーストリを亡ぼした者は、畢竟中央集權の實行を怠つた者である。

オーストリの政治は他の國よりも骨が折れる。従つて、グーテンの政治家は、他の國の政治家よりも優れた手腕を有する者でなければならぬ。蓋し同一の民族で固まつて居る國は施政が、わくても、夫れが爲に亡びるといふ虞は少い。多くの國家のうちには、一時の秕政の爲殆んど亡びたかと思はれるものがあるが、何かの機會が來ると、勃然として生氣を回復して來る。之が、民族的國家の強味である。

然るに單一でなく雜多の民族を包容して居る國家では、さうは行かぬ。此の如き國家は本來血で繋がつて居るのでなく、拳骨で固められて居るのだから、上から加はる力が少しでも衰へることがあると抑へられて居たものと思ひ、の行動に出で、雜多な民族の雜多な本能がとび出し、收拾が出来なくなる。同じく異民族の集合と言つても共同の教育、共同の傳襲、共同の利害で結びつき久しく年數を経たものは比較的其の處が少いことは明かだが、それも絶對とは言はれぬ。若し夫れ寄合世帯の建

國日尙淺き國家にありては、國を建てて間もなく瓦解して行くものが往々ある。建國の久しいところは、それ程、ろいことはないといふだけで、國內にはいつも分裂の危險が潜んで居て、少しでも統御の綱がゆるむと思ひ、に勝手な行動をとる。單一の民族でない國家にはこんな弱味がある。

然ればオーストリに君臨するハプスブルグ王朝としては、眞さきに思を此に致すべきであつた。思を此に致してさへ統治は容易でないのに、ハプスブルグ家は之を怠つた。此にオーストリとハプスブルグ家の悲劇がある。ハプスブルグ家の君主のうちでも、ここに思ひ至つた者もあつた。而もその人一度逝いてからは後に續くものがなくなつた。

ヨゼフ二世はオーストリが民族輓轡の舞臺と化し、ハプスブルグ王朝がその犠牲となりて亡び行くの危險を想見した一人であつた。而して疎かにされた父祖數百年の怠慢を、一代のうちにとり返さんと試みたのは悲壯である。若し王に假すに尙四十餘年の歲月を以てし、且王に次で中央集權の事業を續けるものがあつたら、オーストリは或は亡滅の危機を免かれ得たかも知れぬ。然るに遺憾ながら天は彼に久しき壽を與ふることなく、王は即位後十年にして崩御し、彼の著手したる事業は彼と共に葬られ去つて跡をとめなかつた。

ヨゼフ二世の歿後間もなく歐羅巴大陸に革命運動が起り、オーストリも亦その渦中に投じた。當時の革命は社會問題及び政治問題に依つて惹起されたものであつたが、オーストリの革命は既に多分に

七七

民族的色彩を混へて居た。

即ち革命は他の國では階級闘争の形で行はれたが、オーストリアでは國內民族闘争の端緒となつた。

唯オーストリア・ドイツ人は、ここに氣がつかなかつた爲、革命の先頭に立つて西歐デモクラシーの思想を國內に導き入れることに努めた。而してこのことがやがてオーストリアに、いかなる禍を持ち來たものであるかに想到しなかつたのは、千秋の恨事である。オーストリアのデモクラシーと共にオーストリアに於けるドイツの優越的地位が失はれた。

デモクラシー及びそれに伴ふ議會政治の採用にはオーストリアとしては豫めドイツ語を標準語とした國語の統一を行はねばならぬ。オーストリアはその準備なくして一足、及びに議會政治に移つて往つた。而してそれと同時に、ドイツ民族の政治的地位は動搖し、オーストリアの國家自身も維持出來なくなつた。オーストリアは議會政治の採用と共に崩壊を開始した。

議會政治になつてからのオーストリアは、たゞ土崩の道を急いだ。而して世界戦争で行くところまで行つた。この間に於ける國家瓦解の徑路は政治を研究するものにとり、極めて興味多いことである。オーストリアの潰亂は吾等に幾多の政治的問題を提供する。私はそれらのうち特に主要なものに就いて述べて見度いと思ふ。

三、議會政治の缺陷

オーストリアの支離滅裂な國情は、同國の議會代議員會を一目見ただけで明かであつた。どんな馬鹿な人間でも一度オーストリアの議會を見たら、まどまりのない四分五裂のこの國の内情を察知するに苦しまなかつたであらう。

オーストリアの議會は無論英國の制度をそのままグレートンに移したものであつた。私が未だ二十歳にもならぬとさのことであつた。生れて始めて議會の傍聴に出かけたのだが、ひとめ見ただけで私は、むつとしやくにさはつた。

私は議會を憎んで居る。それはこの時から始まつたのである。併しながら私の議會を憎むのは議會政治を非とするのではない。苟くも自由を尊ぶ人間なら、あらゆる政治のうち議會政治が最も良い政治と考へるであらう。獨裁といふやうな政治は自由に反し、理性に反したものである。

私は若い頃頻りに新聞を讀んだ。その爲でもあらう、私は不知不識の間に英の議會政治に憧れを持つやうになつて居た。私が議會政治を可とするのは新聞の影響であらう。上から治められずして國民が下において自由に政治をやる。世のなかに之程優れた政治がまたあらうか。私は議會政治を、いつもさう云ふ風に考へて居た。それ故にオーストリア議會が、英の議會のやうに立憲的でないのが私には

物足らぬ程であつた。

八〇

普通選挙施行前は僅かではあつたが、ドイツ人は議會の過半数を占めて居た。唯同じくドイツ人と云つても、社會民主黨は、ドイツの利害に重大な關係をもつ議案については、往々反對の態度に出て當にならなかつたから、安心は出来なかつたが、數だけは兎に角他の民族代表を抜いて居た。然るに普通選挙になつてからは、頼みとした頭數に於てさへ、ドイツ人は議會を制することが出来なくなつた。かくの如くしてオーストリ國內のドイツ人の優越的地位が保たれるわけではない。之にも私は同じく不満であつたが、考へて見れば、これもオーストリの國情がさうさせるわけである。他日ドイツ人が牛耳をとるやうになれば、オーストリの議會政治は立ち直るであらう。

かくてオーストリの議會政治についてそんなことを考へて居た私は、今度はじめて議會の傍聴に行つたのだ。議會の建物はギリシャ風の華麗なものであつた。私は胸をどろかして廊下を歩いて行つた。而も一度議場を見るに及んで、忽ち私は言ひしれぬ憤りを胸に感じた。

議場には數百人の議員が參列して重要な經濟問題を討議して居た。然るに議員のあるものはドイツ語ではなくてスラヴ語で演説をやつて居る。新聞では讀んで居たが、代議士が各所屬民族の言葉で入り亂れて演説をなしたり、怒鳴つたり、叫んだりして居る實況を目のあたりに目撃したのは此の時からはじめてであつた。議長は、しきりに鈴を振つて「靜慮に」を連呼し、その懸命な様子は、たゞ見ても

氣の毒な程であつた。

始めに憤つた私は遂に吹き出してすつた。

其の後二三週間を経て再び傍聴に往つたときは、議場の光景は、がらりと一變して、前日の面影はどこにも残つて居ない。議員の席は殆んどがら空きで、議場に居る僅かの議員は相對してあくびをして居るなかに、壇上では一人の男が何か速りにしゃべつて居る。議長席にも議長は居なくて、副議長が退屈さうに院内をながめて居た。

私は之はいかぬと考へた。夫から後は暇さへあれば議會へ行つて、議場の模様を見たり、演説もわかるだけのものに耳を傾けた。オーストリの議員はいろ／＼の民族から選出された所謂民族の選良なるものだ。而して私は夫れらの選良なるものの顔をも併せて研究して居るうちに、いつのまにか議會政治について私自身に一箇の考が出来上るやうになつた。

斯くてオーストリ議會の傍聴を續けること此に一年、議會政治に關する私の考は、以前とはすつかり變つた。所謂代議政治は私の頭から消えてなくなつた。同じく議會政治といつてもオーストリ議會はお話にならぬ程わるいのだ。それ故オーストリの例を以て直ちに議會政治の當否を論ずることは出来ぬが、私は今やオーストリばかりでなく、廻つて議會制度そのものに反感を持つやうになつた。前にも述べたやうに、私は必ずしもオーストリの議會政治には反對ではなかつた。唯不満に感じたのは

八一

ドイツ人が議場に多数を占めて居ないことであつた。然るに一年間の経験はドイツ人が過半数を占むるかどうかの問題を通り越して、議會政治そのものに反感を持つやうになつたのだ。
私の胸には幾多の疑問が湧いた來た。

議會は多数決を政治の基礎としてゐる。議會は所謂デモクラシーの原理に依つて多数決主義を執つてゐるのだ。従つて私は多数決主義の政治を研究すると共に、之が運用に當る國家の選良なるものに就いて、その頭と人物とに注意をむけ、制度と人間とを對照しつつ研究を始めた。

議會制度は近代政治の最も貴重な産物であり、而して代議士は國民の選良である。而も熱心なる研究の結果幾許もなくして、私は最も進歩した制度と最も優れた選良の如何なる者であるかを知つて落膽した。私はそれ以來議員に對しても全然敬意を失ひ、議會政治にも愛想をつかした。

世の中には理論だけ聞いて居ると甚だ結構であつて、實際には問に合はぬものが少からずあり、なかには理論がよくて實際にわるいものさへある。然れば理論の可否は實際を見た上でなければ判断が下せない。議會論者であつた私が一朝にして非議會論者となつたのも、議會政治の實際を目のあたり目撃してからのことであつた。

蓋し、議會政治はマルキシズムの跋扈の前驅であつて、議會政治がなければマルキシズムもなかつたのであらう。マルキシズムは人類のベストであり、而してそのベストの温床となつたのはデモクラ

シーの議會政治である。

私はいつたい之迄運命に恵まれて居るといひ得る。私の議會政治に對する考の變つたのがベルリンでなくて、ウィーンであつたことも亦運命の恵の一つであつた。當時ベルリンは、カイゼルの勢望が強かつた時であり、國粹派の連中はカイゼルをさへ尊いものにして置けば、夫れで國民の幸福が充たされるものと考へて居た。この人々はカイゼルあるを知つて、時代と人間との推移を聊かも知らなかつた。従つて私が議會政治に對して失望を感じた場所がオーストリでなくてドイツであつたら、私は何等の頓着なく、直ちにデモクラシーを嫌忌する國粹派に投じたであらうと思はれる。

と、ところでオーストリではそれが出来なかつた。

オーストリでは議會政治が、わい、と言つて、直ちに反對陣營である王室中心の運動へ奔ることが出来なかつた。議會政治既にオーストリを救ふ能はずとすれば、ハプスブルグ王室には尙更オーストリを救ふ力がない。従つて議會政治を葬ることは良いが、之を葬つたあとで何を持つて來るかの問題が生じて來る。普通ならば議會政治を廢して、その代りハプスブルグ王室を中心とする組織が出来るべきだが、私は又それも厭なのだ。

私は未だ若かつたが、私の前に、さしだされた政治問題はかくの如く複雑であつた。私は相當に頭をひねつた。

四、無責任な議會政治

八四

抑も議會政治の弊害は一にして足らぬ。そのうちでも最も甚しきはどこにも責任をとるものがないことである。

議會政治にありては偶々國家人民にとりて面白くない議案が通つても、それに對して責任をとる者がいない。怎麼へ、なことをやつても内閣が更迭するか、議會を解散するか、然らざれば聯立内閣のなみ、かみを少しばかり變ずれば、それで一切事済みだ。

議會の多數黨なるものは、之亦いつでも多數であるのではなく、多數黨は絶えず變つて常なきものである。變つて常なきものに責任を持たせようとしても駄目だ。之だけでも議會政治は無責任な政治だ。

議會は責任をとらぬとしても臺閣に立つものが責任をとるかといふに、責任をとつても殆ど無意義なやうだ。議會政治にあつては内閣は多數決で通した議案の決議をそのまゝ施行するのみである。かくの如き輕き地位にある者に責任をとらせたとて意味をなさぬではないか。

議會は没分曉漢の集團である。之等の徒衆を説いて、まゝ政府提出の法案を通過させるのが内閣に首班たるものの腕だと言ふ者がある。然りながら政治家にあつて重しとなすところは大きな抱負經綸

であつて、議員の説落しではない。議員は本來頭のない連中である。之を説得することが出来ないとして、それで政治家に腕がないとはいはれない。代議士などはその成るを樂しむべく、その始めをはかるべきでない。政府の經綸が素晴らしい程、議會はきつと反對するを常とする。凡そ古來の大事業は盲目の大衆に對する偉人のプロテストでないものはない。果して然らば、議會が政府の提案を容れない場合、内閣の諸公は如何に進退すべきか。

議員を買収しても議案を通すべきか。

私は此に對して否と答へる。政府の有する政策は已に國家百年の大計として必ず實現されぬばならぬものである。而も議會が之を認めずして反對するとすれば、政府が須らく挂冠すべきである。それでも尙恥づるところを知らず、恬然として職に留まつて居るべきでない。

若し眞に責任を解する政府ならば居据りなどをせず必ず辭職するであらう。それにも係らず平氣で地位にとゞまつて居られるやうな人間であるならば、それは畢竟破廉恥な政治家である。その人から云へば、政治がどつちへ轉んでも責任は議會にあつて、己には責任はないのだといふことになるのであるが、それはすれ、つ、からの政黨屋であつて、政治家でない。かくて議會政治は無責任政治であり國民を指導する大人物を容れざるの政治である。而も人類の進歩は空虛な多數の人間の頭に係らず牙えた個人の頭により進められるものなるを奈何。或は曰く、政治の上に於て個人が重きをなした時代

八五

は已に過ぎ去つた、現代は凡てに於て大衆が重要な役割を演ずる時代であると。誤り之より大なるはない。世の中が進歩すればする程偉大なる個性の力に俟つものが益々多くなるのだ。

賢者は愚者の上にあり、智者は不肖者の上にあり、優れたる者上にあつて、劣れるもの下にあるのは千古渝らざる自然界の鐵則である。自然はデモクラシーでなくて、アリストクラシーだ。

議會政治は此の法則を無視し、優れたる「個」を排斥して徒らに「多數」をとる。自然はアリストクラシーである。デモクラシー議會は自然のアリストクラシーに反する。但しこゝにいふところのアリストクラシーは腐敗せる上流貴族の謂ではない。

五、グレシャムの法則

デモクラシーを基礎とする議會政治が如何なる弊害を國家に及ぼしつつあるかは世多く之を知るものがない。蓋し市民の多數は議會政治の提灯を持つユダヤ系新聞に誤られて、事物の真相が判らないのだ。近代の政治は極めて低調である。之亦議會政治に伴ふ弊害の一つである。議會政治にありては政治家の生命は經綸でなく、素より國務擔當の氣魄でもなく、専ら大衆の機嫌をとることである。従つて爲すある政治家は潔しとせず、相次で政界から隱退し、取るに足らぬ斗符の輩が羽を伸ばして跋扈するに及んで、一國の政界はくだらぬ人間の集會場となつた。

無論此の如き輩には腕もなければ頭もない。而して彼等自ら己の無能を知るに至つて、議會は益々彼等に便宜な政治となつて来る。何となれば議會政治は優れた個人を必要としないからだ。

言ふ迄もなく彼等は責任を解しない。彼等の多くは任期が長くなり、短い年月の間に幾度でも交代するものだから、己のやつたことが、あとになつて怎麼結果になつても知らぬ顔をして居ることが出来る。かくて責任を解する政治家は愈々少なくなつて、政治屋の方が幅を利かすこととなる。

その政黨の領袖連なるものは之亦多くは卑怯者で、責任をのがれることに専らなのだ。之も多數決主義の弊害だ。いづれの場合でもさうであるが、政治の上でも事稍重大になつて来ると、領袖なるものは多數の背後に隠れて自らの可否を言はぬ。之則ち廉恥の尙ぶべきを知らざるものであつて、苟も責任を解する者の堪ゆるところではない。議會政治の自然の結果であるが、一國政治の源である政府議會が責任を知らざる人物のみとなりては、その弊は直ちに國政の上に反映せざるを得ない。かくて國家は上下を擧げて何人も思ひ切つたことを思ひ切つて斷行する勇氣がなく、一時を糊塗して足れりとするに至つて、政界は萎靡不振救ふべからざるに至る。

惟ふに多數政治とは馬鹿者政治の謂である。多數は馬鹿を代表するが、賢者を代表しない。

百人の馬鹿は一人の賢者に如かざる如く、卑怯者は何百人寄つても一人の勇者に如かぬ。多數決主義は馬鹿者の政治であるばかりでなく、併せて卑怯者の政治である。議會政治に有爲な政治家の現れ

ないのは此の爲であらう。

一方政治家の素質低下とともに、誰も彼も政黨の領袖になりたがり、國民をあつて指圖の出来るのを得意にしてゐる。而もかく政界に、モ首領が多くなると、獵官に急なる彼等は、じつとして己の順番を待つて居ることが出来ず、長い列を造つて、己の前に立つて居るものの片時も早く居なくなるのを待ち、ねらつて居る椅子に、あきが出来、すべり込みが出来ると機かほつとする。それでゐて、何でも良いから先にありつた者が早く失敬しないと皆から怨まれる。

それ故政黨の獵官運動は激しい。さりながら、なかには嚙りついて動かぬものもある。かうなると黨内の内規を破つた者のやうに言ひふらし、あらゆる追出し策を講じて、や應なしに没落を餘儀なくするが、然うなると没落した者が再び例の長い列に加つて、来るべき己の順を待つことになるから、黨人になつても思ふ地位にありつき、之を守るのは容易なことでない。

かくて黨人のねらふところが専ら政府に入りて重要な地位を占むることになれば、勢ひ臺閣の椅子の更迭が恐しくはやくならざるを得ないが、頻繁なる閣僚の更迭は政治上最も忌むべく、時としてはそれが、國家にとりカタストローフ・カルなことさへある。何となれば、更迭が早ければ、無能な者、馬鹿者の早く淘汰される利益はあるが、同時に又抱負經驗を抱いて内閣に入つたばかりの有爲の閣僚が職についたばかりで爲すこともなく、勿々として政府を去らねばならぬといふ不利な場合も出て来る。さなきだに政黨内閣では手腕のあるものは概して、やがられる。殊に他の閣僚が何れも黨人で當人ばかりが政黨出でない場合には、黨出身の閣僚は共同戦線を張つて異分子の追出しをやる。黨人は仲間だけでやつて行き度いのだから、少しでも己より才能の優れたものが外から這入つて来ると邪魔物扱ひにして追出すのだ。而してこのことは無能なくせにこんなところだけ驚くべく鋭敏なもの黨人に共通の特徴だ。

政治家の貫禄はかくて愈々低下するばかりだ。

オーストリでは首相の任免は皇帝に依つて行はれたけれども、それは殆ど形式的であつて、實際は議會の意に反しては皇帝は何も出来なかつた。他の平大臣に至りては、純西歐風とも言ふべく、首班の裁量に依つていつでも更迭し、且その更迭が殊に激しかつた。始めはさうでもなかつたが、終りに幾月といふよりも寧ろ幾日といふ間に大臣が頻繁に代つた。而してその都度閣僚の質が低下したこと勿論である。大臣は國政變理の才能ある人でなければならぬ。然るに所謂政黨内閣では、大臣の能力は政黨と妥協苟合する才能のいかに依つて判斷されたのは悲しむべきことだ。私はオーストリの代議員會に於て、刺すところなく議會政治の弊害を看取した。

六、製造される輿論

議會政治について私の懐いた多くの不快の一つは、その運用に當る所謂國家の選良なるものの低級なことである。試みに少しく彼等の人物を検討せしめよ。議會の事情に通じ、代議士の内幕を知るに及んで益々議會政治の弊害を見せつけられた。凡そ世の中に公平に觀て、議會政治程間違つた政治はない。

九〇

抑も代議士なるものは一般の民衆に依つて選舉される。ところがその選舉なるものが既に不正の多いものであるから、選舉せられて議會へ出る者がいかにして官途にありつくか、いかにして時めくべきかをのみ考へるやうなし、ものであることに何の不思議もない。蓋し、大衆は始めから政治の頭がない。従つて選舉すべき人物もわからず、輿論とか評判とかいふものに依つて僅かに選舉するのみだ。而もその又輿論なるものが、頗るたちのわるいものである。

世のなかには執拗に惡性の宣傳を續けて居る一部のものがある。大衆は不知不識の間に之に動かされるのであつて、輿論と稱せらるるものの大部分は此の種の宣傳から生れるのだ。

教會では新教でも、舊教でもそれ／＼の信條なるものがある。この信條なるものは所屬宗派の教育の結果であつて、眞の宗教的生命は之と關係なき場合が少くない。それと同じく、政治に於ても輿論と稱せらるるものは、大衆の心からの要求でなく、外から加へられた人爲的なものであることが多い。政界には絶えず宣傳に依つて大衆をあやつるものがあるのだ。

宣傳の第一の機關は新聞だ。新聞は成人の教育機關だ。學校だ。唯國家の學校は公共の經營に依るものであるに反し、成人教育の學校たる新聞は國家ではなく、野心家に依りて營まれるの相違があるのみだ。私はダーレーンに居た頃新聞社の社長とか、新聞記者とかいふものを、い／＼といふ程深く知るのはない。新聞に大々的に書き立てられるものは、必ずしも一般の者が大々的に感じて居るものではない。反つて時にはその反對の場合も少くない。それにも係らず、いつの間にかそれが輿論なるものに造り上げられて了ふ。又新聞は一笑に附すべき世間の些事を、とらへて政治上の大問題にデッチ上げることもあれば、それと逆に忘れてはならぬ國家の重要問題を早く忘れさせて了ふこともある。新聞は白を黒とし、大を小とし、曲筆を弄することに於て自由自在だ。事情を知らないうちは、私はどうして新聞にこんな魔力があるのかに少からず驚いた。新聞はまさに國家の中の國家たる觀を呈して居るではないか。

かくて名もなき平凡な男が、突如として一月経たないうちに素晴らしい名士に持ち上げられ、普通の人では一代かかつても得られないほどの大きな人氣を、さ／＼と行つて行くことがある。之も新聞の惡戯である。さうかと思へば清廉な學ぶべき人物が、此の上もない不徳漢のやうに書き立てられて、居るべき地位にとまつて居られないやうなこともある。これ等の惡戯は何れもユダヤ人の小細工に基くものであるから、新聞紙の裏面を知るには先づユダヤ人を知る必要がある。

九一

ユダヤ人のことは尙あとで述べるとして、新聞の悪戯は以上述べたところに、とどまらず、他の家庭の秘事を發き立てて罪なき人間を社會的に糺り、社會に出てゐる家庭にありても毫も非難の餘地なき人間に對しては、根も葉もないことを書き立ててその人を中傷する。無論傷けられた者は取消を要求するが、一度新聞に掲げられると取消などは役に立たぬものである。要するに濡衣を着せられた者は之を雪ぐ機會がないことになる。彼等が或は新聞記者の務と云ひ、或は新聞記者の特權とかいふやうなことをほざいて、公私と、を構はず出入跋扈することも憎むべき惡徳だ。

かくて輿論なるものの凡そ三分の二は、ヨタ新聞の捏造にかかはるものである。而も議會政治なるものは又この輿論を、たねにして行動するものだ。

新聞と輿論との關係をもつと詳しく述べれば、いくら書いても盡くるところがないが、以上述べたところだけでも、輿論の奈何なるものであるかが明かになるとともに、輿論を基礎とする議會政治の間違ひだけであることも了解されよう。

議會政治は馬鹿な政治である如く、又危險な政治でもある。人若し議會政治の馬鹿さと危險とを知らんとせば、所謂西歐のデモクラシーとゲルマン族の眞のデモクラシーとを對照するに如くはない。西歐デモクラシーの產物である議會政治の特徴は、四五百人の代議士が國家の政治を支配するにある。議會政治の國にありては、内閣は政府と稱するけれども、この政府なるものは議會の鼻息を窺ふ

ことなくしては、何事も出来ない無力なものであつて、殆んど獨立の意志を有しない。然りながら政府は同時に何等の責任を感じない。政府は單に議會の命を奉じて動くのみで、國策を決定するものは政府でなく、議會である。而して政府は又投票の多數で動くのであるから、政府は畢竟議會に於ける多數黨の意志を執行する機關たるに過ぎないことになる。従つて政府の任務も亦専ら政黨との妥協苟合の巧拙に注がれ、多數黨を纏める政府は有能で、多數黨の機嫌を損ふ政府は拙劣なものとされる。かくて政府の施設は政治の經綸でなくて、多數黨の獲得である。政府は多數黨と結託するか、新黨を製造して永く居据らんとし、それが出来なければ内閣の明け渡しとなる。内閣の仕事は多數黨の向背に依つて進退することだけだ。

政府の墮落右の如しとして、然らば肝腎の議會は奈何。民衆に選ばれた五百の頭顱は決して國民のうちの優れたものでもなければ、牙えた者でもない。蓋し無智な民衆の投票から有爲の政治家の生れるわけではない。殊に普通選舉に至りてはこれ全く天才の政治家を排除するの制度である。古今東西を通じて、大衆は卓越した天才を排斥するの傾向を有する。従つて民衆の選舉に依つて偉人を得んとするは、駱駝が針の孔を通るよりも困難だ。

古へより今に至るまで、偉人は他の選舉に依らず、自らの力に依つて出るものである。然るに議會政治にありては政治を支配するものは一人の偉大なる政治家でなくて、平凡なる五百の

小人である。政府を興し、政府を倒し、政府を組織し、政府を互解せしむるものは一に議會の力であつて、議會の承認を経ずしては政府と雖も何事もなすを得ないのだ。

これ單に理論が然うであるばかりでなく、實際の運用に於ても亦然るを見るのである。議會政治は凡ての問題を議會で解決する。而して議會に提出する問題は單純でなくて千差萬別であるが、それらのことに就て適當な知識経験を有する者は議員のうちいくつものことを考へ來れば、それだけでも多數決萬能の議會政治が如何に不適當なものであるかがわかるであらう。議會政治では重要な經濟措置までも議會の賛成を得なければならぬのだが、實際議員のうち、經濟界の事情に通ずるものはいくつもあるまい。従つて國民の生活に重要な關係を持つ經濟の問題を經濟の知識なき議會に附議し、その裁決に委すが如きは無責任極まるものだ。

此の如きは單に經濟ばかりではなく、他の諸問題も亦同様だ。議會の討議は政治、經濟、教育の各般に互る。従つてそれらの問題を處理して行くにはその都度その道に經驗ある議員を選んで之に當らせるのが當然であるが、現在の議會制度では議員の任期が定まり、知識なくとも任期中の議員が知らない問題を扱つて行くといふことになるのは是非なきことである。蓋し外交に通ずる者必ずしも交通の問題に詳しくはない。同一の議員と同一の議會をして問題を處理させるから不都合な事の生ずるのは當然だ。而も議員の多數はわからずやだから、普通ならば大政治家を以てしても頭をなやますべき

大問題を、手軽く考へて平氣で片をつける。その大膽さは寧ろ驚くばかりだ。

議員とてもそれで良いと思つて居るのではない。彼等と雖も始めからの恥知らずではないが、政治の組織が頭のわるい彼等にわかつてもせぬ問題を處理させるから、議員の方でもいつのまにか無責任になつて了ふのだ。本當ならばわからぬ問題を出されたら、辭退するのが當然である。諸君、こんな問題を出されても、我等には理解する力がない。少くとも僕には分らぬ。」と正直に白狀すれば責任もなくなり、間違ひもないのだが、知つた風を装うていぢり廻はすから、無責任になる考へはなくても結果は自から無責任なことになる。

議會はかくの如くにしてごまかしの府となり、始めは正直であつた議員もいつか議員の惡風に染んで、自分のわるいことがわからなくなる。わるいと知りながら、賛成したりするやうにもなる。議會は多數で決められて行くのだ。自分一人反對したとて大局はどうにもならない。とすれば反對して憎まれるより賛成して置いた方がよい。

人間ももうかうなつてはだめだ。

人或は言ふ、多くの議案のうちには議員にわかつた問題のあることは勿論である。然りながらそれらの問題については黨が方針を決定してくれるから、それに従つて行動さへすればよい。黨にはそれぞれ専門家があつて研究して居ると。一應尤もな議論であるが、少數の黨の委員で片がつくのなら、

それで結構である。五百人といふやうな多数を議會に集めて討議する必要がどこにあるか、餘計なことではないかと反駁したくなる。ところで、議會政治の秘密の鍵は寧ろここにあるのだ。

今日の議會は天下の賢才を集むるを目的とせずして、附和雷同を事とする馬鹿の代議士を集めることを目的とする。而して少数の者は蔭にあつて之を操るのである。此の如き政治組織にありては議員が愈々馬鹿であれば、操縦が愈々容易といふことになり、黒幕は裏に隠れて責任を免かれ、議會は唯だ、しに使はれて居るばかりだ。

觀來れば議會政治は虚偽の政治であり、隠謀のからくりである。之を便とするものは少数の覆面者流であつて、苟くも責任を解し、公明を尊ぶ政治家ならば、之を欣ぶ道理がない。畢竟議會政治は士君子の政治でなく、日の光を畏るる野心家の政治家だ。議會政治は、今日も然るが如く、今後も永くひとりユダヤ人を利するの政治組織だ。

議會政治をユダヤ人のデモクラシーとすれば、ゲルマン族のデモクラシーは之と全然趣を異にする。ゲルマン族のデモクラシーは多数の凡俗を選挙するのでなく、信頼すべき一人の統率者を選びてそれに全責任をもたせる。古代ゲルマン族の間にあつては多数決によつて決するといふが如きことなく、一人で全責任をとり、生命がけで働くやうな男らしい人物を皆で選び、之を統率者として推戴し、他の者は欣んでその命に服するのである。

人或は言ふであらう、一人に責任を持たしたら、進んで統率者の他位につくものはあるまいと。それに對しては唯次の如く答へるばかりである。曰く、議會政治の如く廻りくどいことをなして居るのはゲルマン族のデモクラシーではない。臆病な人間なら聞いただけでも尻込みするやうな責任の重い地位を、自ら買つて出るのがゲルマン的デモクラシーだ。ゲルマン族のデモクラシーでは、小人が誤つて統率者の地位を盗むやうなことがあつても、決して永くは勤まらない。周囲のものは直ちに發見して彼を驅逐して丁ふ。卑怯者！此の地位は汝の汚すべきところでない、速かに去れと。ゲルマン族の間では、責任を知らざる政治家は一日もその地位に止ることが出来なかつた。

× × ×
 以上は近代議會政治に関する私の結論である。私は之が爲二箇年も議會へ通ひ、右のやうな結論を得てからは、復びオーストリアの議會に足を踏み入れなくなつた。

七、ハプスブルグ王朝とドイツ民族

ハプスブルグ王國は近年に至つて衰亡の著しいものがあつた。それにはいろいろの原因もあるが議會政治はその重なるものの一である。議會政治になつてからは議會ではドイツ人の優勢が次第に失はれ、政府部内に於てもドイツ人は一步一步退却を餘儀なくされるのみであつた。而もドイツ人の衰勢

と共にオーストリ國內の異種族は跋扈し、前世紀の終り、今世紀の始め頃は、い、か、なる愚者にもドイツの衰退と共にオーストリの瓦解は、到底免れぬものと斷定されるに至つた。

かくてハプスブルグ王國は綱紀の弛緩につれて國內諸民族の輕侮を買つた。單りマジャールのハンガリーばかりではなく、スラヴ族の諸州に至るまで、もはやオーストリを己等の組み立てて居る國家ではなく、自分等に縁のない餘所の國のやうに考へるやうになつた。本來ならば協同の國家であるオーストリが弱つたら、協力して建て直すのが本當であるのに、オーストリの異種族は努力せざるばかりでなく、崩れるものなら寧ろ一日も早く瓦解した方がよいとさへ考へた。

それにも係らず、オーストリが尙餘喘を保つたのは議會ではドイツ族が讓歩を重ね、地方では異種族が互に軋轢し合つて居た爲である。而も大勢は日を追うてドイツ人に非であつた。殊にフェルデナンド大公が皇儲と定つた後はオーストリ・ドイツ人の地位は目に見えて墜まつて行つた。大公はやがて帝位に上る人である。オーストリの未來の君主である。而して未來の君主たる人がオーストリ・ドイツ人を壓迫することになつたのである。皇儲は元來チリク人び、い、きであつた。そのチリクび、い、きである所以は、チリク人の勢力を抜き來つて國內のドイツ人を掣肘せんとしたのであつて、純粹なドイツ人ばかりの地方も皇儲の政治的勢力が加はるに従ひ、次第にチリク化し、ドイツ人の都であるウィーンに於てさへ、チリク人は我物顔に振舞つた。

フェルデナンドの皇妃はチリクの出であり、家庭ではチリク語が話された。大公の野心は中歐にロシアと別なスラヴ族の國家を建設するにあつた。皇儲がローマ・カトリック教派に力を入れたのも此の爲であつた。蓋しロシアの宗教はオルソドックス派であるから、ロシアの勢力の侵入を防ぐにもローマ・カトリックで對抗するのが最も良いと考へたのだ。之即ち宗教を政治に利用するものであつて、信仰の點から言つて不純である。況んやそれに依つて同時にプロテスタントのドイツ人をも抑へんとしたものなるに於てをやだ。而もその結果は期待に反し、ハプスブルグ王室もローマ・カトリックの教會も、共にその弊を受けるに至つたのは、自業自得とは云へ、氣の毒な事であつた。

かくてハプスブルグ家は王位を喪ひ、ローマ法王廳はオーストリといふ一つの大きな教區を失ふに至つた。

フェルデナンド大公のドイツ人抑壓は、やがてオーストリ國內のオール・ドイツ運動（アルドイッチ・エ・ベグエーグンク）を誘發した。

一八六六年の戦敗後ハプスブルグ王室は、ドイツに對し一日も復讐の念を忘ることはなかつた。唯直ちにフランスと提携してドイツに當ることをしなかつたのは、當時メキシコのマックス帝が悲劇的な最後を遂げ、それが専らナポレオン三世の無責任の罪とせられ、オーストリ人は一般にフランスを怨んで居た爲である。それでも尙王室では、フランスに、みれんを持つて居た。それ故に一八七〇年

の戦争がドイツの徹底的な勝利に終つたればこそ良かったが、さうでなかつた。グーテンの朝廷は或は中途より戦争に参加してドイツに報復を試みたかも知れなかつた。オーストリがそれをなさなかつたのは、ドイツの勝利が大き過ぎて手出しが出来なかつた爲である。かくて二重王國のフランツ・ヨーゼフ皇帝は欲すると否とに係らず、欣ばしいやうな顔をしてドイツの勝利に對せざるを得なかつた。

グーテンの王室は形勢非なるが爲に憤を抑へてドイツに接近を装うたのだ。然るにオーストリ・ドイツ人は之と異なり、狂喜して肚からドイツの勝利を迎へた。彼等はオーストリがドイツに合併するの時機至れりとなした。而して同時にオーストリ・ドイツ人はハプスブルグ王朝を廢し、獨逸兩國のドイツ人が直ちに同一國家の一國民となるべきを主張するに至つた。

ハプスブルグ王室は此の形勢を見て國內のドイツ人を、徐々に而も容赦なく淘汰し去ることに肚をきめた。こんな政策がドイツ人の憤激を買はない道理はない。オーストリより驅逐されんとするドイツ人は蹶起した。凡そ近代史のうちでドイツ人が懸命になつたことのこれ程眞剣なるはなかつた。荷もドイツ人であり、ドイツ民族の將來を憂へたオーストリのドイツ人志士は、昂然起つて政府に反抗した。但し之は國家に對しての反抗ではない。同胞民族への反抗でもない。オーストリ政府のやり方に對しての反抗である。ドイツ人の見るところに依れば、グーテン政府のなすがままに放任する時は、オーストリ國內のドイツ族は、遂に自滅の他に行くべきところがないのだ。

惟ふに人類存在の最高目的は種の保存であつて、國家の維持ではない。況んや政府の存否をやだ。我等は此の道理を忘れてはならぬ。然れば、假に民族集まり政府を戴いて國家をなすと雖も、種族そのものが政府に依つて抑壓され、或は甚しきに至りては、國境外につまみ出されようとするやうなことがあつては、政府の手段が表面合法的であつても、國民は斷じて之を默視してはならぬ。國民はあらゆる武器を用ゐても、種族保存の爲に政府と戦ふべきである。

右の道理が明らかになつて始めて革命や獨立の意義がはつきりして來るのだ。古來内より壓制を蒙り、或は又外より壓迫を受ける時、爲すあるの民族は決して之を甘受することなく、必ず起つて壓制者を逐ひ、外敵を撃退するの天より賦與された民族本能の然らしむる所である。

かくて民族の生存權はあらゆる權利のうち最も重んずべきものであつて、此の權利を執つて屈せざる種族は地上にあつて存在を續くべく、此の權利を主張する意志なく、力なき民族は亡滅するであらう。

尙政府の合法的なるものの、必ずしも當にならぬものであることを、私はオーストリの政府に於て最も良き例證を見た。

當時オーストリの議會はドイツ人以外の他の民族が過半数を占めて居た。議會は露骨に反ドイツ的

であつた。而して王室たるハプスブルグの政府も亦反ドイツ的であつた。かくてオーストリアにありては、王室も議會も共に反獨的であつたが故に、彼等の爲すが儘になつて居たら、オーストリ・ドイツ人は國外に放逐されるより他に途がなかつたであらう。而して政府、議會は何れも所謂世の合法的權力なるものなるが故に、之に反抗するのは無論非合法的である。而も合法的ならんとして我慢して居れば、オーストリ・ドイツ人の終焉は免れないのだ。存亡の危機に立つたドイツ族は「合法的」なるものに拘泥して居られぬこと勿論だ。

一〇二

世には一種の形式論者がある。彼等は人間が法律を作つたのであつて、法律が人間を作つたのでないことを忘れ、甚しきに至りては、恰かも人間が法律の爲に存在するやうなことを言ふ。度し難い連中だ。

かかる形式論の迷夢を覺醒し、民族よりも國家が重いのでなく、國家よりも民族の重いことを教へたのは、當時のオール・ドイツ運動であつた。

オール・ドイツの運動は恰も燎原の火の勢で、殆んど國內を風靡するの概があつた。然るにどこまで伸びるか判らぬと思はれた黨の運動は意外にも、はやく凋落し、競争者であつた基督教社會黨が、つて代り、私がウィーンへ出た頃は後者ひ、とり盛んであつた。

オール・ドイツ黨が衰へ基督教社會黨が日の出の勢で舞臺に上り來りたるは、私にとりて不思議な

思をさせた。私はその原因を知らんとしてひ、そかに注意しはじめた。

有體に云へば、ウィーンへ出た當時の私は心からオール・ドイツ黨び、きであつた。議會で彼等が畏るところなく「ホーヘンツォレルン萬歲」を叫ぶのを聞いた時、私の心は躍つた。ドイツとオーストリは一つにならねばならぬと呼ばれた時、私の心は躍つた。ドイツ民族の權利について彼等が一步も譲歩しなかつた時も、同じく私の心は躍つた。

ドイツ民族を救済するものはオール・ドイツ黨以外にない。これが當時の私の感想であつた。そのオール・ドイツ黨が俄かに衰へて來たのだ。私には、どうしてもその理由が解せられなかつた。

私はオール・ドイツ黨の衰へたる所以、基督教社會黨の興れる所以を研究しはじめた。而してその第一著手として黨の首領であるシェーネレルとリューゲルとの人物を比較した。

八、シェーネレルとリューゲル

人間としては兩人とも、他の議會人を遙かに抜いて居た。腐敗した政界にありて嘗て一度もよからぬ風聞を立てられたことはない。廉潔の士であつたことも同じだ。それでも私は何となく個人的にオール・ドイツ黨の首領であるシェーネレルが好きであつた。

頭腦のよい點ではシェーネレルの方がリューゲルより確かに良かった。シェーネレルはオーストリ

一〇三

土崩の避け難きことを誰よりもはつきりと見透して居た。若しオーストリばかりでなく、ドイツ國內でも彼の火の如き警告演説に耳を傾けて居たら、世界戦争で孤立に陥るやうな、マをやらなかつたであらう。惜しい哉、頭が良かったけれども、實際的手腕がなかつた。

リューゲルは之と反對であつた。彼は世間を知り、人生の表裏に通じて居たから、すること總てが實際的であつた。理想家であるシェーネレルは、案を立てても之を實行する力がない。大衆は物わりのわるいものだ。之を引きつけるには、こつがある。シェーネレルにはそれがわからなかつた。

シェーネレルの政治的地盤は有産階級であつた。凡そ新運動を起すには、争闘を辭せぬ元氣な無産大衆を抱き込まねばならぬ。臆病で引込思案の有産階級は思ひ切つた戦が出来ない。同時にシェーネレルは有産階級を根城とせるが故に、労働問題に理解がなかつた。之は當然なことだ。

リューゲルは凡ての點に於てシェーネレルと行き方を異にした。彼は今日の有産階級に多くの望をかけなかつた。有産階級には氣力も熱意もないからだ。彼は有産階級を當にせずして、中産以下の階級に目をつけ、之を運動の中心勢力とした。中小階級は既に没落の危機に立てるものであるから、何よりも先づ闘争意識が熾んだ。リューゲルがこの階級に著目したのは之が爲であるけれども、世間を知つてゐる彼は同時に有産インテリの階級に對しても之を利用するを忘れなかつた。ここらがりューゲルのリューゲルたる所以である。

中小階級は闘志の熾んな階級であるから、ここに地盤を築いたリューゲルの新政黨が極めて底力あり潑刺たるものであつたこと勿論である。他方彼は從來の關係によりカトリック教の若い僧侶をも味方へ引込んだ。之が亦、うまく成功してカトリックの坊さんは續々リューゲルの新黨へ加はつた。

此のやうにして八方に手を伸ばしたリューゲルは策士であつた。然りながら彼を策士以外に何物もない人間と考へるのは誤りだ。彼には策士たると共に、一面熱烈な大改革者の面影があつた。

彼の政治的目標は極めて率直簡易なものであつた。彼は手段としてヴィーンを手に入れようとした。オーストリは腐りかけた肢體であつてヴィーンは其の心臓であり、オーストリが僅かに餘命を保つてゐるのも要するにヴィーンが鼓動してゐるからだ。然ればヴィーンの鼓動のとまるときはオーストリの息のとまる時だ。オーストリの死を生視するならそれで良い。苟くもオーストリを生かさんとすればヴィーンに活を入れるに如くはない。リューゲルがヴィーンに生氣を吹込まんとしたのは此の如き信念に基いたのだ。理論としては一應正しいと云へる。併し既に手遅れであつた。ヴィーン市長としてのリューゲルの功績は不滅と言つて過言でない。而もヴィーンの刷新に依つてオーストリを救はんとする彼の計畫は實現されなかつた。彼は救ふべからざるものを救はんとして失敗した。

此の點ではシェーネレルがリューゲルに比し優つて居た。彼はオーストリの前途に始から見切りをつけて居た。

一〇六
リューゲルのヴァーレン復興は美事に成功したけれども、それに依りてオーストリアを救ふことは出来なかつた。

他方シェーネレルのオール・ドイツは運動としては失敗したが、見切つた如くオーストリアは遂に救はれなかつた。彼には先見の明があつた。

かくてオール・ドイツ黨ばかりでなく、基督教社會黨も亦やがて敗北した。ヴァーレンを救ふことに依りてオーストリアを救はんとしたリューゲルも、オーストリアを見切つてオール・ドイツの理想を打ち建てんとしたシェーネレルもともに失敗した。

九、「オール・ドイツ」の敗因

世には覆車の戒めといふものがある。我がナチス黨員たる者は良く兩者失敗の原因を探求し、同様の誤を再び繰り返してはならぬ。

私の観るところに依れば、オール・ドイツ運動失敗の原因は三つある。オール・ドイツ運動は革命である。而して革命は必然社會問題に關聯を持つて居るべき筈なるに係らず、オール・ドイツ黨は社會問題に多くの關心を持たなかつた。之が一つ。蓋しシェーネレルが運動の中心を有産階級に置いたことが、いつのまにか同黨を活氣のないものにした。

蓋し有産階級のドイツ人は極めてオトナシイから、天下太平の時は治め易いが、國歩艱難に遭遇すると意氣地がなくて役に立たぬ。然れば革命の如き闘争意識を必要とする運動には有産階級では駄目だ。革命は、どうしても氣輕な大衆を味方にせねば成功せぬ。オール・ドイツ黨の人々にはそれがわからなかつた。

かくて黨は有産階級を基礎として運動を起したから、無産大衆は、理解があつても這入れなくなつた。オール・ドイツの如き運動は宗教的な氣分をもち、身を殺しても悔ひない人間が集まつて來てこそ成功する。然らば、そんな頭の熱い連中をどこに求めるかと云へば、それは無産大衆の他にはない。オール・ドイツ黨が、民族的大運動の旗を掲げながら、大衆に手をつけなかつたのは手落ちであつた。

オール・ドイツ黨出現當時のオーストリアは既に救ふべからざるの運命にあつた。その議會は議政の府といはんよりも寧ろドイツ人を葬る機關となつて居たから、ドイツ人にしてドイツ民族の勢力を挽回せんとせば、先づオーストリアの議會を解消せねばならなかつた。それでさへうまく行くかどうか解らぬが、最後の手段として残されたものはそれ以外になかつた。

かうなると次の問題が起つて來る。議會を解消するとして、之を内から崩壊せしめるか、或は攻撃して外から倒すかである。而してオール・ドイツ黨は前者を選んだ。即ち彼等は議員として議會に入

り、内よりして議會を破壊せんと企圖した。而も議會を解消せんとして議會へ這入つた彼等は、打ちのめされて外へ出された。

一〇八

顧みれば、彼等としては議會運動に向つて進むの外はなかつた。外部よりの攻撃に依りて議會を解消せんとせば不撓不屈の勇氣と、限りなく犠牲者を出しても意に介せぬだけの決心が要る。此の勇氣と決心があつて始めて目的の達成がある。正面より立ち向ひ角をつ、かんで牛と闘ふ。傷も受ける。幾度か地にも倒れる。それにも屈せずして闘ひ續ける者に勝利の榮冠が授けられる。有産階級には勇氣も決心も根氣もない。オール・ドイツ黨が犠牲の多い外部の國民運動を捨てて、議會主義を採用したのも畢竟同黨が有産階級を味方とせる爲である。

オール・ドイツ黨が議會主義に奔つたのは、必ずしも右のやうなことを意識的に考へてからのことではない。唯ずる／＼にその方へ進んで行つたのだ。抑も議會政治が、わ、るければ、議會と一切縁をきるのが當然である。議會はわ、るい、ものと知りながら、自ら議員となつて議會へ這入つて行くのが既に誤りだ。

オール・ドイツ黨の人々は心に思へらく、假令直接運動たらずとも、議政壇場より國民に呼びかけたら必ずや大きな反響があらうと。迂闊である。又思へらく、議會での言論は自由なるが故に、忌憚なくものを言つても處罰せらるる虞がないと。怯懦である。かくて彼等の議會運動は迂闊と怯懦から

出たのだ。然れば彼等の運動も亦實際に於て殆んど役に立たなかつた。

第一に彼等は議政壇場に立つてオール・ドイツの趣意を宣傳するといふが、如何なる名論卓説も議會の宣傳は議會の傍聴人に限られて居る。然らざれば之を新聞で讀む者に限られて居て範圍が狭い。説いて廣く國民に訴へんとせば、議會外に於ける國民大會の直接なるに如くはない。

議會の傍聴人は野次馬が多いのみならず、面白いものは聞いてゐるが、關心のない問題には耳を傾けない。之に反し國民大會とすれば、傍聴人は専らその爲に集まつて来る者ばかりだ。説くものは無論熱し、聴く者にも熱がある。それを知らずして議會での理想を説くが如きは、まさに豚に眞珠を投げてその愚を悟らざるものである。代議士の雄辯宏辭は畢竟徒勞だ。事實に於てオール・ドイツ黨の議員は咽喉をからして怒鳴つたけれども、何等の議會的效果はなかつた。

單に議會の内部ばかりでなく、議會の外に於ても黨の運動は振はなかつた。オール・ドイツ黨議員の演説と云へば、新聞紙は默殺して書かなかつた。偶々紹介するのがあると思へば前後を切りとつて連絡のない變なものとなつて紹介された。甚しきに至つては、故意にその意味を變へたものさへ少くはなかつた。されば何にも知らない一般大衆は、オール・ドイツ運動の眞意がわからず、オール・ドイツ黨と云へば直ちにつまらぬ人間のつまらぬ運動のやうに感じ出したのは無理もない。凡そ演説の筆記は、あとさき纏まつたものでなければ、讀んでも完全に意味のわからないものだ。ところ／＼を切

一〇九

抜いて見ただけでは意味が通らないばかりでなく、反つて誤解を抱かせる事が多い。

然るにオール・ドイツ黨員の演説で新聞に掲載されるものは、悉くと云はない迄も概ね、カッ、トされ居た。

元來オール・ドイツの運動は政黨の運動たるべきものでなくて、理想の運動たるべきである。従つて之を率ゐる者亦最も勇氣ある人物でなければならぬ。オール・ドイツ運動の失敗は理想の運動たらずして政治運動となつたところにある。

理想の運動は上に立つものに犠牲を畏れざる勇氣があつて始めて成功する。上に立つて率ゐるものが利害の打算にのみ巧みになつては、跟いて来るものも亦専ら利に依つて動くことになる。人々をして一身の利害を忘れて働かせるには、先頭に立つ者が先づ毀譽褒貶を度外に附し、知己を百年の後に俟つの覺悟を定めて邁進するを要する。世俗的地位や人の欲する利権を目的とするやうでは、周圍に集まつて来るものにもろく、なものがない。理想の運動たるべきものが一度政治運動となれば、幹部も黨も自ら椅子や利権を漁るやうになる。尤もそれにより多數の黨員を有する羽振の良い政黨にはなるかも知れぬが、黨内では始からの純理論者は邪魔物扱ひにされ、新たに加つた如才のない伶俐な連中のみが幅を利かせて、政黨そのものが生命を失つて了ふ。

オール・ドイツの運動は本來理想運動たるべきこと右に述べた如くであるが、之が成功には何もの

にも驚かぬ幹部と多數の開士とを必要とする。然るにオール・ドイツは議會中心の政治運動となつた爲に、幹部は腐敗し、集まつて来る者は開士でなくて政治屋となり、出来上つたオール・ドイツ黨そのものは何等特色なき平凡な政黨と化した。彼等は闘ふことの代りに「雄辯」を練り、「掛引」を學び舌を鼓して一席辯じ去れば、それで足りると考へる議員ばかりとなつた。信念の爲なら生命をかけて惜しまぬといふ氣概の士はどこにも見られなかつた。

一方議會外の同志は黨員を議會へさへ送れば、それで目的が達せられるものやうに考へて、自ら活動することをなさなかつた。かくして議會に打つて出たオール・ドイツの運動は期したやうな反應を示すことが出来なかつた。殊にオール・ドイツ黨所屬代議士の演説と云へば、新聞がいつも虐待した爲、黨の人氣はわるくなるばかりであつた。

オール・ドイツ黨の代議士には、始めから大衆の中へ飛び込んで行つて之を味方とするが如き勇氣のあるものがなかつた。大衆相手の啓蒙運動は形式的な演説だけではすまぬからだ。

議會中心の政治運動は骨が折れない代り力もない。大衆を獲得するには直接大衆に接する必要がある。而して大衆との接觸は大衆相手の演説大會である。オール・ドイツ黨は之を忘れた。

かくしてオール・ドイツは遂に大衆の運動とはならずして、少數者が議論を開はす俱樂部のやうなものになり、黨の評判はわるくなつた。

筆を持つものは言ふ、筆は剣だ、古來筆に依らざるの革命はない、舌の力は畢竟筆に及ばぬと。然りながら冷やかな理論や或は註譯は、或は筆に依つて傳へられるかも知れぬ。端的に人の心をつかむものは筆でなくて舌だ。政治でも宗教でも人を動かす力あるものは雄辯の魅力だ。之には古今東西の別はない。

古より今に至るまで歴史的大運動は一として大衆の運動たざるはない。而して大衆の感情を奮起せしむるものはいつとも雄辯である。

一人の雄辯は時に全民族の運命をも左右したことがある。雄辯が人を感激させるのである。自ら感激せずして他を感激せしむることは出来ぬ。内に感激があつて始めて言葉にも感激がある。自ら感激する人の雄辯は振り上げるハンマーの如く、深く閉ざれた扉を叩き破らざればやまぬ。志士の熱罵は國民の心に迫つて行く。

心に感激なく、口に言葉なき者は畢竟選ばれた闘士でない。インキ壺をかかへて理論をひねくつて居る筆の人々には、陣頭に立つて實際運動を指揮する力がない。

偉大なる運動はいつまでも大衆との接觸を忘れてはならぬ。而して凡ての問題を大衆本位に依つて處理して行く必要がある。

大衆運動では大衆に、いやな感じを持たせることを一切避けねばならぬ。而も大衆に氣をわるくさせ

ないといふのは術策としてではない。どんな高遠な理想でも大衆を味方とせざれば實現が出来ないからである。

苟くも大事を成さんとせば、現實に直面して困難を犯す勇氣がなければならぬ。荆の途を歩まずして月桂の冠を戴くことは出来ぬ。血みどろになつて大衆を獲得するのは荆の途を行くにもひとしい努力だ。議會で喋つてばかり居るのは容易なことだ。オール・ドイツ黨はこの努力を避けて容易に就いた。大衆に著目せずして議會中心の政治に奔つたのは、オール・ドイツ運動失敗の第二の原因である。

かくてオール・ドイツ運動の失敗は社會問題に理解がなかつたこと、政黨となつて議會に打つて出て大衆との接觸を圖らなかつたことにあるが、この二つの敗因は互に關聯せるものである。オール・ドイツ黨は革命の動力が何であるかを知らざるが故に大衆に對する認識を缺き、大衆に對する認識を缺くが故に社會問題に理解を持たうとしなかつたのだ。彼等若し革命に於ける大衆の力を知つたならば、社會問題に於てもプロバガンダの方式に於ても、つとまゝやつたに相違なく、運動としても議會をねらずして、街頭と工場とをねらつたであらう。而もそれが彼等には出来なかつた。

オール・ドイツの運動にはもう一つ失敗の原因がある。之も大衆に對する認識不足に禍されたものだ。オール・ドイツ黨がカトリック教會を敵として戦つたことがそれである。

オール・ドイツ黨がカトリック教會を攻撃する理由は左の通りである。

ハプスブルグ王室はドイツ人のオーストリを變じてスラヴ族のオーストリたらしめんとし、その爲にはいかなる手段も避けない。宗教をも避けない。宗教を政治に利用するのは罪惡だ。ハプスブルグ王室はドイツ人を除くべく、かかる罪惡を犯しても憚らない。而してその最も正しき例はチエック人の僧侶をしてドイツ人の司教者たらしめたことだ。

ドイツ信徒のなかへ入り來つたチエックの僧侶は宗教のことを司らずして、政治に力を用ゐた。彼等は先づチエックの勢力をドイツ人の間に扶植した。

チエックの僧侶がさうであれば、ドイツ人の僧侶も亦之に對して爲すところがあらねばならぬ。然るに彼等は此の點に於て殆んど何の役にも立たなかつた。チエック僧が宗教の力を藉りて政治の力を伸して來れば、ドイツ僧も同じくドイツ人の勢力を張るべきであるのに、彼等は積極的にドイツ人の勢力を張るどころか、チエック僧の鋭い攻勢を抑へることさへ出来なかつた。かくてオーストリに於けるドイツ人の勢力は先づ宗教方面から始まつた。

ドイツ人にもカトリックの僧正達は少くなかつたが、之等の人々もドイツ人の勢力維持には無頓着であつた。ドイツ人のカトリックの僧正は、ハプスブルグ王室がドイツ人を抑へても之を止めんとはせずして黙視して居た。

オーストリのカトリックの教會はドイツの支柱とならずして、ドイツ人を壓迫するハプスブルグ王室の道具とさへなつた。民衆の利害に無頓着なるドイツ・カトリック僧の態度は、由つて來るところが遠い。然るにシェーネレルはオール・ドイツ黨の黨首を以て、カトリック教會がドイツに依つてなくて、ローマに依つて動くが爲だと即斷した。而してそのローマ法王がドイツに對して好意を有せぬは言ふ迄もないとした。

教會問題はここに至り、宗教の問題でなくて政治の問題となつた。オール・ドイツ黨のカトリック教會攻撃は信仰の可否でなく、カトリックの教會がスラヴ族の手先となつて居るのが怪しからぬといふのだ。

シェーネレルは一面猪突的な男であつたから、カトリック教會がオーストリ・ドイツ人の敵だと思ふや、直ちに教會に戦を宣した。而して教會を屈伏せしむる手段として、所謂ロス・フォン・ロームなる運動を始めた。彼は教會を制する最も有效なる策は、ローマ法王と絶縁するにありとなしたのだ。若し此の運動が成功して、法王と縁をきることが出来たら、オーストリのみならず、ドイツでもカトリックとプロテスタントとの軋轢もなくなり、オーストリの挽回にもなつたであらうが、それが出来なかつた。シェーネレルの對教會戦は誤つた前提から出發せる故である。

ドイツ系カトリック僧侶のチエック僧に比し民族的觀念の薄いのは事實である。

ドイツ系の僧正達にはドイツ民族の爲に肌を抜ぐと云ふやうな考へは夢にも浮んで来ない。之も亦同じく事實だ。チラックのカトリック僧は宗教よりも政治に力を入れて居るに反し、ドイツ人カトリック僧は宗教本位で同胞たるドイツ人の政治的運命などには無頓着であつた。併しながら之必ずしもカトリック僧に限つたことではない。他の方面に於ても、ドイツ人には一般にこの傾向が存する。

試みにドイツの官憲なるものを見よ。ドイツは屈辱的鐵鎖を脱して獨立を回復しなければならぬ。然れば此の際國民的運動を起すものがあれば、苟くもドイツ人である限り官に在るものであつても之を庇護して可なりである。然るにドイツの官憲は、いづれも拘于定規で、國民運動を抑へる。軍隊の幹部といふものも亦同様で、政府の手先となり、民衆運動を抑へて得々として居る。

然ればドイツ人のカトリック僧が國の利害に冷淡であることも不思議とするに足らぬ。ユダヤの僧侶などは同胞たるユダヤ人のことになれば教會の仕事を休んでも活動するが、ドイツの僧侶は教會本位で人種の差別などがない。人種的觀念のないのは僧侶ばかりでなく、ドイツ人一般のくせともいふべきものだ。

凡そ「國權」、「デモクラシー」、「平和主義」、「國際連帶」等は一として空虚な概念ならざるはない。然るにドイツ人は極めて眞剣である。主義と稱するものは理論の遊戲だ。政治の利害は國民の死活だ。理論倒れのドイツ人は國民死活の實際問題にも論理の遊戲を適用せねば氣がすまないのだ。

① ドイツ人は形式主義だ。形式主義のドイツ人はやがて目的と手段とをはき違へるところまで行く。

國民の獨立運動は政府の顛覆を必要とするところもある。さうなるとドイツ人は、もう反對する。人民が政府を倒すは國權に反するといふのだ。抑も國民は政府の爲に存するのではなく、政府は國民の爲に存するのである。政治の要諦は國民の福利であつて、政治の形式ではない。それにも係らず、ドイツ人は獨裁政治と云へばフレドリック大王のやうな偉人でも排斥し、議會政治と云へば探るに足らぬ小人が跋扈しても、それで満足する。之亦形式主義の罪である。

ドイツの平和主義者は國民がさいなまれて血みどろになつて居ても、手をつかねて見て居る。力に依つて抑壓者に反抗するは平和協會の趣旨に反するといふのだ。ドイツの社會民主黨は「國際連帶」に心中立てして居る間に、他國の社會黨は遠慮なく愛國者に變つて行つた。ドイツ人は融通の利かぬ國民だ。悲しむべき現象であるが、抑も之を改めるには由つて来るところを検討しなければならぬ。

ドイツ人の形式的なるは國民がねぢけてゐる爲でもなければ、又上からの命令に由るものでもなく、幼い時から何々主義を詰め込まれ、ドイツ人に仕立てる國民的教育を受けなかつた爲だ。

デモクラシー、平和主義、社會民主主義的教育は頗る徹底して居るから、この方の教育を受けた者は先づ之等の主義を生命よりも大切なものと心得、國民存亡の重大問題に直面しても「主義」に因はれ、自己保存の民族的本能に依つて動く力を喪つてゐる。

カトリック、プロテスタント兩宗派の人々にも亦此の弊がある。

プロテスタントの教會は、どちらかと云へばドイツ的である。此の點カトリック教會と趣を異にするが、それにも係らず、プロテスタント教會にもドイツ的になり切れないところがある。

例へば、ドイツ精神、ドイツの自由、ドイツ語の純潔といふやうなことになるれば、プロテスタント教會はドイツ的であるが、ユダヤ人問題になると、もう態度が變つてくる。ユダヤ人は國家に大害をなすものであるにも係らず、プロテスタント教會はユダヤ人排撃について來ない。ここらがプロテスタントの煮え切らぬところである。

ウィーンに居た頃、閑暇と機會とのあるがまゝに私はドイツ人のかう言つた傾向を幾度か虚心坦懐に検討した。而して私の以上の判断の誤でないことを知つた。

ウィーンは雑多な民族の集合場であつて、ウィーンに居れば凡そ各民族の國民性を看取することが出来る。則ち平和主義と云つてもそれを鵜呑みにするものはドイツ人ばかりであつて、ユダヤ人は平和主義と口で言つて居ても、ユダヤ族の利害を忘れたことはない。インタナショナルと云つても、それを眞面目に遵奉して遷るを知らざるものはドイツ人ばかりであつて、チツク人やポーランド人は口にインタナショナルを唱へて居ても嘗て國民的利害を忘れたことはない。此の如きは一は平和主義乃至國際主義そのものの弊にも相違ないが、一はドイツ人としての自覺が足りない爲であり、畢竟は教育がわるいのだ。

オール・ドイツの人々は須らく思をこゝに致すべきであつた。然るに彼等は之を考へず、カトリックさへ排斥すればそれで事足るとなし、教會を目的としたのは始めからの錯誤であつた。

我等は先づドイツ青年に己の國の尊きことを教へねばならぬ。ドイツがあつて始めて世界があり、己があつて始めて他人があるのだ。世界があつてドイツがあるのでなく、他人があつて始めて己があるのではない。ドイツ人の學ぶべきところはここにある。かくてドイツの教育が空理を排し、國民的となれば、カトリック教會も自らドイツ的となるのだ。

カトリックもプロテスタントも同じく本來國民的である。唯その教育が之を歪曲して居るに過ぎない。その顯著な證據は世界大戰にある。

當時國民は上からの命を持つまでもなく、自ら進んで國難に赴いた。而してプロテスタントの牧師はカトリックの坊さんと手をとつて戦線、銃後に活動した。此の時に當り國民の間には唯一つのドイツの國家あるのみで、プロテスタントもなければカトリックもなかつた。ドイツの強かつたのはその爲だ。

然ればオール・ドイツ黨としては、先づ次の問題を考へるべきであつた。則ちオール・ドイツ黨の使命はオーストリ・ドイツ人の衰勢を挽回するにある。カトリックといふ宗旨がその邪魔になるかど

うかといふことである。

1110

若し邪魔にならなければ、放任して置くのが最も賢明だ。政黨として宗教に干渉するのは不利だ。之に反して若し邪魔になると見たら先づカトリックの教義から改めてかゝることだ。ところでさうなると、教會の問題は政治の問題ではなく、宗教改革の問題となる。而も政黨として宗教改革を試みるは誤だといふことになる。宗教は宗教家に依つて改革さるべし。政黨の運動で宗教改革が出来ると考へるものがあつたら、それこそ宗教のこともわからず、教會の事情をも辨へぬ迂闊な人間である。又或は言ふ、オール・ドイツ黨がカトリック攻撃をなすに至つたのは、反對黨が宗教を利用せるが爲である。

いづの世にも宗教を政治に利用する者はある。但しそれに依つて直ちにその宗教を非難するは當を得ない。政黨者流は何でも利用して獲るところがない。無論宗教をも利用する。而して此の如き徒輩にかぎつて宗教問題で攻撃されることを欣んで居る。彼等は己を攻撃するものを以て恰かも宗教の冒瀆者であるが如く言ひふらすのだ。而して世間も亦表面のことばかりを見て、攻撃した者を宗教に理解なきもののやうに考へるのを常とする。

議會に於ける宗教問題は實際に於ては信仰に關係なきものである。政治屋は唯之を弄んで居るのであつて、迂闊なものがそれに引きかかるだけなのだ。

又多くの牧師のうちには僧衣を身に纏うて政治に狂奔して居る者もあり、眞の道を説くべき舌を以て、そ八百の政談演説を試みるものもある。然りながらこの坊さん一人の故に教會まで非難するのも同じく誤りである。世の中には、わい坊さんもあるが、極めて眞面目な貴ぶべき坊さんも少なくない。上から下まで爛れきつた世のなかである、偶々生ぐさ坊主が一人二人あつたとて、或は又政治屋の手先になつて働く牧師があつたとて、教會の罪となすべきではない。ドイツの空の晴れ渡つて國民に春の來ることを、我等とひとしく待つて居る多くの坊さんもある。

或ものは更に言ふ、宗教問題はちろそかにしては置かれなさい。私は之に答へて次の質問を發した。若し自信があつたら、君自ら宗教改革に乗り出しなさい。決して政黨の手を借りてはならぬ。政治の運動に依つて宗教の改革をはかるが如き人間は教會を攻撃する資格がない。坊さんがわるかつたら追ひ出して自ら坊さんになるまでだ。その勇氣がなかつたら、或は又自ら改革の自信がなかつたら始めから手を出さぬことだ。政治と宗教とを、ごつちやにしてはならぬと。

宗教が政治と結んではならぬやうに、政治も宗教に關係してはならぬ。民衆の心持がわからず、國民の傳襲に理解のない政黨は、宗教のことに口を出したとて何の役にも立たぬ。

反對黨が教會を利用したとて、己も亦教會を利用してはならぬ。

オール・ドイツ運動に關して私の到達した意見は次のやうに要約することが出来る。オール・ドイツ

1111

運動は社會問題に理解がなかつた爲に同志の熾んな大衆を味方とすることが出来なかつた。之が一つ。オール・ドイツ運動は議會中心政策をとつた爲、大きな國民運動となることが出来なかつた。且つ議會政治に特有な弊風が加はつて來た。之が一つ。オール・ドイツ運動はローマに背いてカトリック教會を敵とした。之が爲に中産階級は離れて行つた。之が一つ。オール・ドイツ運動は右三つの原因で失敗した。

一二三

オール・ドイツ黨がカトリック征伐により教會から十萬人の信徒を奪ひとつたことは事實である。但しそれに依つて教會には大した打撃を與へることが出来なかつた。何となればオール・ドイツ黨へ移つて來た信者は、それでなくとも教會から離れかかつて居た信仰の薄い人間であつたから、教會は寧ろ厄介拂ひをしたやうに考へた。去るものも信仰の爲でなく、去らるものも亦平氣なところに現代の輕佻さがある。オール・ドイツ運動に加つて來たカトリック信者のうちには、政治的利害の打算に依つたものが少くなかつた。

之を黨の側から見ても、カトリック教徒を收容したことは、偶々以て黨の結合を弱めるに過ぎなかつた。

かくて洋々として船出をなしたオール・ドイツの運動は忽ちにして擱挫した。

近代の運動は大衆の心理に理解がなくては成功せぬ。若しオール・ドイツ黨の領袖が此の道理を心

得て居たら、カトリック征伐などをなさなかつたであらう。凡そ勝利を得んとせば目標を幾つにも分けてはならぬ。目標はいつも一つに限つて置かねばならぬ。二兎を逐ふ者は一兎をも得ない。オール・ドイツ黨が反宗教にまで手をつけたのは誤りであつた。

凡そ歴史を綜覽するに政黨にして宗教改革に成功せるものは皆でない。而も學んで歴史より教訓をひき出し來る者は甚だ少い。民衆を率ゐる偉大なる人物はいろ／＼の術を解して居る。而して民衆の注意を一つの點に集中して、散漫ならしめないこともその一つである。目標が一つに限らるれば、之に向つてぶつかる力が強くなる。此の故に巧妙なる統率者は、多くある敵をも之を一つのものに見え、るやうに工夫する。何となれば、一時に多くの敵を作るときは動もすれば味方の正義を疑はしむるところである。どちらを見ても敵といふのでは、弱いものは氣あくれがして、これ程皆が敵にするところを見ると、向ふばかりがわるいのでなく、こちらにも良くないところがあるのでないかなどと考へて自信を失ふ。それがわるい。

味方はどこまでも正しい、敵はどこまでもわるい、この自信があればこそ強いのだ。戰に於て自信がなくなれば萬事休すだ。同じく敵と言つても種類は雑多である。その雑多なものを纏めて一つの敵のやうに思はせるのは上に立つものの手腕である。味方をして自信を失はせない爲である。

オール・ドイツ黨には之等のことがわからなかつた。

一二三

一二四
彼等の目は、正しい目標に注がれた。彼等の心は純であつた。唯その手段が誤つて居た。彼等は、かゝるはげな登山者の如きものであつた。分け登る高嶺の所在が不明であつたのではない。踏み出した足の歩みが弱かつたのではないが、脚下に氣がつかなくなつた。而して墜落した。

一〇、基督教社會黨

基督教社會黨の行き方は之と全く反對であつた。彼等の選んだ途は正しかつたが、目標が外れて居た。

彼等は大衆を味方に引き入れることの必要を解した。それ故に又始めより社會問題に重點を置いたことも宜い。中小階級に中心を置き、職人階級へまで喰込んで往つたことも要領を得て居る。かくて黨そのものは堅實で元氣な存在となつた。彼等は又宗教には手を觸れなかつた。それ故に教會の力強い支持をも得た。プロバカンダにも力を用ゐて民衆に働きかけた。之等はいづれも基督教社會黨の優れたところであつた。それにも係らず、オール・ドイツ黨と同じく没落したのは畢竟目標が外れて居た爲だ。オーストリは到底救はるべきものでなかつた。

基督教社會黨の排ユダヤ人主義はユダヤ人の異教徒たるを非とするのであつて、民族としてのユダヤ人を排斥するのではない。之が抑も大なる誤である。基督教社會黨の領袖は言ふ、オーストリでは民族の區別を問題としてはならぬ。之を問題とすればオーストリは僅かの間に崩壊するであらう。殊に異種族の集まれるヴィーンに於ては民族問題をとり上げてはならぬ、といふのが彼等の持論であつた。

當時のヴィーンはチエック人の最も幅を利かした時であつて、民族の區別をやかましく言つたら、基督教社會黨と雖も黨内分裂の憂き目を見なければならなかつたであらう。之も同黨が民族問題に觸れることを欲しなかつた一つの理由であらうが、基督教社會黨はユダヤ人の宗教を攻撃するばかりで、ユダヤ人を排斥しなかつたから、或者は基督教社會黨の排ユダヤ主義は、ユダヤ人を改宗させる運動に過ぎないと云ひ、或者は基督教社會黨の宗教的やつかみだとなした。我等のユダヤ人排斥は宗教の問題でない。ユダヤ人の存在は人類の禍害であつて、之を除くとは全人類の運命にかゝるのだ。基督教社會黨には之がわからなかつた。

基督教社會黨はドイツ人の利害のみを言つてはならぬと言つた。而して彼等はドイツ人のみを主とせず、他の民族との協力に依るのが亡びんとするオーストリを救ふ所以だと考へたが、併しオーストリは反つて之が爲に亡びた。基督教社會黨にはこの缺陷があつたのだ。

私はオール・ドイツと基督教社會黨の兩黨を比較研究した。オール・ドイツ黨は黨の目標が正しかつたし、基督教社會黨はその黨首のリューデルが好きであつたからだ。

リューゲルの長い葬式の列がラートハウスを出てリングシュトラッセの方へ動いて行つた時、数十萬の市民の間に交つて私も同じく見送つた。オーストリアは遂に崩壊の他に行くべき途がない。今日の状態では如何なる人物があつても、この頹勢を挽回することは出来ない。リューゲルが此の朽ちかけた國に生れたのは不幸であつた。彼にして若しドイツに生れたら、働き甲斐があつたらうに、惜しいことをした。葬列を見送りながら私はさう思つた。

リューゲルの死んだ時はバルカンの形勢が既に危殆に瀕してゐた。然れば彼の逝いたことは悲しいが、生きてオーストリアの没落を見なくてすんだのは彼の爲に幸福でもあつた。

オール・ドイツ及び基督教社會兩黨については、外にも研究すべきことが少くない。オーストリアは畢竟没落の運命にあつた。それを没落させずに建て直さんと試みたところに基督教社會黨の間違ひがあつた。オール・ドイツ黨はナシヨナリスチックであつたが、ソーシヤルではなく、大衆の心がつかめなかつた。そのユダヤ人排斥は宗教としてでなく、民族としてユダヤを排斥せんとするにあつたから、此の點は基督教社會黨より良いが、カトリック征伐はどちらからどう見ても同黨の誤りであつた。

基督教社會黨はナシヨナリスチックでなかつたが、運動の方法は巧であつた。リューゲル以下の黨員は社會問題に理解を持つた。之同黨の優れたところであるが、彼等の排ユダヤ主義は徹底しなかつた。

つたこと前に述べた如くである。

若し基督教社會黨が大衆的であると同時にナシヨナリスチックであり、オール・ドイツ黨がユダヤ人問題や大ドイツ主義に於て徹底して居た如くに、社會問題、殊に社會主義に對して理解を有して居たら、兩黨のどちらかが成功したであらう。それがうまく行かなかつたのは、黨の罪ではあるが、一歩進んで考へれば、結局罪はオーストリア自身にあつたと見るべきであらう。

私は個人としてオール・ドイツ黨に力を入れて居たから、同黨が瓦解してから後は私はどの政黨にも關係しなくなつた。オーストリアの政黨中ドイツ物興の任に堪へるものが一つもなかつたからだ。

二、モザイクのオーストリア

かくて私はその時以來政黨には見切りをつけたが、ハプスブルグ王室に對する不快の念だけは深まつて行くばかりだつた。殊に外交問題を考へること愈々深きに及んで、他日ドイツを躓かせるものがオーストリアなりとの確信は愈々強くなつた。オーストリアの國家に依つてドイツ民族の運命を開拓することは不可能だ。ドイツ民族の運命はドイツに依つて開拓されねばならぬ。それは單に政治の上ばかりでなく、文化の方面に於てもドイツ國の協力なくしては大陸に於けるドイツ民族の發展がないのだ。かくてオーストリアに望を絶つた私の目は自らドイツに向けられた。

オーストリアは複雑な國であり、ウィーンは政治、外交を學ぶものにとりて比類なき學校だ。それ故に私の頭はウィーンに止まらんことを要求したが、私の心は、はやオーストリアにはなくて他のところにあつた。

オーストリアは既に生ける屍であつた。私はそれを思ふと、たまらなく、ぢれつた、なつた。オーストリアは遂に救ひ難き運命にある。ドイツはいつまでも、こんなものと手を携へて居るべきでない。私は絶えずそれを考へた。

オーストリアは不肖の輩の跳梁するところであつて、ドイツ人には餘地がなくなつて居る。殊に不快なのは、首都ウィーンが人類の展覽會のやうになつて居ることだ。ウィーンはチラク人、ポーランド人、ハンガリー人、ルーテン人、セルビヤ人、クロワト人のごみ溜だ。そのなかでもユダヤ人の、さばつて居るのが最も堪へ難い不快である。

私のドイツ語は大バイエルンのドイツ語であつた。私は、どうしてもそれを忘れることが出来なかつた。それにつけても嘗て獨逸文化の中心であつたウィーンの町に、ドイツの言葉が少くて異種族の土臭い言葉が幅を利かして居るのは、どうだ。こんなことも私をして益々オーストリアを不快に思はせるたねになつた。

オーストリアの亡滅は必然的である。之を亡滅せずには保つて行かうといふのは殆んど滑稽の沙汰だ。

當時のオーストリアは一種のモザイクだ。而も確りしたモザイクでなくて、つなぎが朽ちて崩れかかつて居るモザイクだ。手を觸れずに眺めて居れば、暫らくの間は形を保つて居るが、僅かでも外から力を加へたら、忽ちに瓦解して姿を止めなくなるであらう。問題はオーストリアが立ち直るか立ち直らないかではない。オーストリアの瓦解がいつ来るかといふ「時」の問題だつた。

私は嘗てハプスブルグ王室の爲などを考へたことはない。私の考へて居たのは大ドイツの實現のみであつたから、今オーストリア瓦解の運命が前に迫つても私は何とも思はなかつた。何とも思はないばかりでなく、寧ろその早さを望んだ。オーストリアを葬る鐘の鳴る時は、憧れのドイツの生れ出る時である。

私は幼い頃からドイツへ行きたかつた。それ故にオーストリアに厭氣がさすと共に、ドイツへ行き度いといふ私の思は目を逐うてつのはかりであつた。お終ひには私の生れた故郷がドイツへ併合されてくれたらと思ふやうになつた。さうしたら一舉にして私もドイツの國の人になれるんだ。こんなにドイツを戀しがつた私の心は他の人には恐らく判るまい。それが判るのはドイツに合併せんとして合併し得ざる地方の人々である。然らざれば一度合併して後に引離された地方の人々だ。然らざれば祖國から分離してもドイツ語を捨てずに固く守つて居る地方の人々だ。然らざれば祖國に忠なるが爲に迫害を忍んで居る國境外のドイツ人だ。ドイツ外にあつて自分で、つらい思をなした者でなければ

私のあこがれを理解することが出来まい。

身はドイツ人でありながら、ドイツの國籍を有しない程、つまり、母國から離れた地方の者には、祖國へ歸る日が俟たれてならないのだ。祖國へ歸り、同胞と一つになつて苦樂を共にするまで、他國に編入されたドイツ人の惱みは消えない。

かくて私は遂にウィーンを去ることになった。厭な町でも、去るとなれば、いくらかの感慨なきを得ぬ。ウィーンは私にとつて終生忘れることの出来ぬ生きた學校であつた。私が町へきたのは小僧に毛の生えた年頃であつた。私がこの町を去つた時は、もはや眞面目な一人前の人間となつて居た。私の人生觀の確立したのも此の町であれば、私の政治に關する頭の出来たのも此の町だ。ウィーンは私の修養時代であつた。

「ウィーンの巻」が他の章よりも詳しくなつたのも之等の事情によるものだ。今や我がナチス運動は始めてから五箇年も経たざるうちに、力強い大衆運動となつた。而も運動の根幹である黨の綱領には私がウィーンに居た頃の體驗に基いて立案されたものが少くない。例へばユダヤ人問題の如き、社會民主黨問題の如き、或は又社會問題の如きは空論でなく實地の見聞より割り出されたものであつて、私がウィーンに行かなかつたら、これ程適切な政綱を造ることが出来なかつたらうと思ふ。之もウィーンの賜物である。

祖國ドイツ崩壞の原因を知らんとせば、マルキシズムの陰謀を知らねばならぬ。然らざればドイツ革命の真相をつかむことは出来ぬ。而してマルキシズムの世界的陰謀を知ることにて於て、私が他の人に比し一日の長のあるのも、之亦ウィーンに流寓中マルキシストの運動の裏面を窺ふを得た爲である。ウィーンはどの點から見ても私にとつて生涯の貴き學校であつた。

第四章 世界大戦の巻

一、戦前の局面

私は子供の時から、商賈人や官吏ばかりが幅を利かせて居る現代に生れたことを残念に思つた。歴史に残つて居る華々しい戦などは、もう二度と見られなくなつたのだ。どこを見ても他愛もない「民族の平和的競争」があるばかりだ。かくてどこでも「國」は國家といふよりも寧ろ商會のやうなものになり堂々たる國家を以てして互に顧客に媚び、註文をとり、合ひ、ひたすらもうけのみをねらつた。同じく生れるなら私は百年も前に生れたら良かったと思つた。さうしたら歐羅巴でも未だあちらこちらに戦争があつた。當代は商賈人でなければ人間でないやうに云はれるが、百年以前は商人でなくても、幅が利いたのだ。私の生れて來たのが過ぎたのだ。私は、いつもそれを思つて、クタクタした「安寧」と「秩序」との他に何ものをも知るまいとする時代、それが私の氣にいらぬのだ。かくて私は子供の時から世の所謂平和論者ではなかつた。則ちバチフィストではなかつたのだ。而して、いくらそれを改めようとしても駄目であつた。

それに故、ボア戦争が起つた時には、私は毎日新聞に、かちついて、熱心に戦争の記事に讀み耽つた。太平にして世の中に退屈して居た私には、遠國の戦争の記事を見るだけでも氣が晴れたのだ。

それから日露戦争の勃發した時には私も相當大きくなつて居た。従つて戦争を考へる頭も進んで居たが、日露戦争では私は始から日本に味方した。これは寧ろ國內關係又は民族の關係に依るものであつて、私はロシアの敗北はオーストリ國內に居るスラヴ族の敗北なりと考へたから、日本に力こぶを入れたのだ。

日露戦争から又更に多くの歳月が流れた。而して永遠に平和であるべく見えた世界は畢竟風の前の静けさであつたことが漸くに感知されて來た。ヴィーンに居た頃から世の中は些かづつ物騒になり、バルカン半島の空には低氣壓が漂うて無氣味な空氣の重たさを感じさせて居るうちに、やがて第一のバルカン戦争が起り、歐羅巴各國を、ヨットとさせた。それ以來どこでも神經が過敏になり、人々は重苦しい戦争の惡夢に、なされ、通して、遂には避けられるものならさけたいが、それも望んで得られないものなら、いつそ早く戦争になつた方が反つて良いと言ふやうになつて、世界戦争は恐しい勢で爆發した。

オーストリ皇儲フランツ・フェルデナンド大公の狙撃は私がミュンヘンに移つてからである。凶變の報を得た時は私は一時、ハット思つた。それは狙撃者が、ひよつとしたらドイツ學生ではあるまいか、

と想像したからである。フランス・フェルナンドは豫てよりスラヴ族に厚意を持ち、ドイツ人を抑えて居た人である。それ故にドイツ人に同情を有する者は皇儲を除かねばオーストリ・ドイツ人の勢力が伸びないと考へて居た。こんな事情であつたから、私は始めに皇儲の狙撃の下手人はドイツ人ではないかと考へたのである。然るに、その後犯人がドイツ人でなくてセルビヤ人であることを確むるに及び、今更ながら天命の畏しきを知つた。ドイツ人を抑へてスラヴ族を支持して居た皇儲フランス・フェルナンドは、自ら庇護せるスラヴ族の青年に殺されたのだ。

願ればオーストリとセルビヤとの關係は此の時既に騎虎の勢にあつた。行くところまで行かなければ、收まらないのが當時に於ける兩國の確執であつた。

人或は言ふ、オーストリの最後通牒が悪かつたと。併しながら、オーストリならずとも、あの場合セルビヤと一戦を交ふる他はなかつたであらう。セルビヤは常にオーストリの瓦解を待つて居るのだ。若しあの時でなく、皇帝フランス・ヨーゼフ崩御の時機を待つて事を起されたら、オーストリとしては之を禦ぐ術がなかつたであらう。因みにフランス・ヨーゼフを古來の最も賢明な皇帝として宣傳して居たものは、内外のスラヴ族であつた。世間をして崩れかかるオーストリを支へて居るのは、フランス・ヨーゼフのみの力だと信じさせて置けば皇帝の崩御と共に事を起すに便なるが爲である。フランス・ヨーゼフはかくして宣傳の用に供せられたばかりであつて、彼自身は決して明君ではなかつた。

かくてオーストリは避けられる戦争を避けなかつたのだ、と言ふのは事實ではない。オーストリとセルビヤとの戦争は、到底避けんとしでも避けられないところまで進んで居た。或は少しく之をささへ延ばすことは出来たかも知れぬが、それも長く一年か二年だ。而もささへ行けば行く程戦争はオーストリに不利となるばかりであつた。

次にドイツとしてもあれ以上開戦を延ばすことは出来なかつた。若し一年乃至二年ばかり戦争を延ばしたら、世界を擧げてドイツを敵とすることは或はなかつたかも知れぬ。言ひ換ふれば、ドイツは世界を敵として戦ふ必要がなくなつて居たかも知れぬが、その代り起つて来る戦争は世界戦争でなく、オーストリの分割の形で起つて来たであらうと思はれる。而もさうなれば欲すると欲せざるとに係らず、ドイツは之を默視して居ることが出来ず、己も之に参加するから畢竟戦争は世界戦争になるだらうし、わるく行けばオーストリの分割を、手をつかねて傍觀せねばならぬやうな羽目にならぬとも限らぬ。かく見ればドイツとしても大戦はどの途避けられなかつたのだ。

ドイツでは社会民主党は以前からドイツとロシアとを戦はせようと企て、中央黨は又宗教上の關係から、いつもオーストリを支持して居た。

それ故に、彼の言ふ通りにして居ても、戦争は避けられなかつたのだ。而も今になつて開戦が良かったの、わるかつたのと、口やかましく論じて居るのは、社会民主党や、中央黨の連中であるから驚

く。又政府も政府だ。戦ふ肚なら早くからその準備があるべきだ。オーストリアなどと手を切つて居た方が良かったのだ。最後に平和、平和と言ひながらいやく世界戦争へのめり込んだのは醜態だ。

一三六

二、大 戦 来

オーストリアの最後通牒は、文句苛烈に過ぎたといふものもある。併しながら假にあれをもつと煮え切らぬものにしたらどうであつたらう。さうしたところで、恐らくは開戦は避けられなかつたであらう。何となれば、民衆は當局の軟弱な態度に憤激して、イン政府を顛覆したであらう。民衆はあの通牒でさへ手緩しとして不満であつたのだ。若しそれが嘘だといふ者があつたら、それこそ健忘症か、腹からの嘘つきだ。

又一九一四年の戦争は民衆に強ひられたものでは決してなかつた。民衆は進んで戦はんことを欲した。當時の歐洲は久しく不安のうちにあつたこと前に述べた如くである。人々は限りなき不安のうちにをのくよりは、寧ろ一と思ひ片をつけようと思つた。ドイツ二百萬の壯丁が欣んで戦場へ赴き、最後の血の滴を盡しても悔ひなかつたのもその爲だ。

私は素より生ぬるい平凡な時代に厭きて居たから、開戦の報を聞いて救はれたやうな氣がした。私は跳り上がつて欣び、生れて始めて生き甲斐のあることを感じた。

大きな解放の戦が始まつたのだ。この戦争は地上未だ嘗て無かつた程大きなものだ。戦は最早やセルビアとかオーストリアとかの問題ではなく、實にドイツ全民族存亡の戦となつて居たのだ。

皇儲異變の報道がミュンヘンに達した時、私の頭を掠めたものが二つあつた。此の事件は戦争になるといふこと、それが一つ。オーストリアは欲すると欲せざるとに係らず、ドイツと一緒に戦はねばならなくなつたといふこと、これが一つ。

私は嘗て考へた。オーストリアが戦争をやることになれば、同盟の誼としてドイツは當然救援に赴かねばならぬ。則ち戦争に参加せねばならなくなるが、反對に一朝ドイツが事を起して戦争となる場合それが同盟の爲に生じたものであつても、オーストリアは逃げはせぬか、といふことであつた。何となれば、ドイツの爲に起つことは、オーストリア内のスラヴ族が之を欲しないからである。それをも無視して起つとしたら、オーストリアは戦に参加する前に、既に國內から崩壊するであらう。私はそれを畏れて居たのだ。然るに、今やオーストリアが自ら戦争を始めたのだから、私の一つの度は先づなくなつた。私はそれ pensando ぼつとした。

大戦の意義は私にとりては極めて簡單であつた。一九一四年の戦はオーストリアがセルビアを膺懲するの戦から轉じて、ドイツ民族が存亡の爲に戦ふの戦争となつて居た。

ドイツ民族の解放とその將來とを獲得するの戦争となつて居た。若し此の戦争に勝つことが出来た

一三七

ら、ドイツは始めて廣土衆民の點に於て眞に大國の班に列し、後世子孫に對してもパンの心配をさせなくてすむやうになるのだ。私は少くとも世界戦争をさう解した。

私は子供の時から、一生涯に一度は戦争に出て國の爲に戦ひ度いものと思つて居た。何となれば戦に出たこともなくてウラーなどと云つても、その聲は空虛だからだ。戦争當時私は既にオーストリアを去つて居た。私はかねて戦争は避け難いものと考へて居た。而も同じく戦ふなら、厭なオーストリアに居て、厭なオーストリアの爲に戦ふのは厭だ。同じく戦ふならドイツ民族の爲に戦ひ度い。ドイツ民族を代表するドイツに行つて、ドイツの爲に戦ひ度い。之が私の念願であり、又戦前にオーストリアを離れて居た所以でもある。

八月三日私はルードウヒ三世陛下宛出征願書を奉呈し、即時バイエルン聯隊に編入されることを願つた。當時政府は多忙を極めて居たから、許可は容易に下がるまいと思つて居たのに、意外にも出征の許可は願書を出したその次の日に下つた。私の欣喜はいかばかりであつたらう。戦く手を制しなから封を切つて許可書を読み、即刻バイエルン聯隊に出頭せよとの文句に至つたとき、限りなき欣喜と感謝が私の胸を打つた。それから數日を経て私は軍服に身を固めることとなつた。ドイツ人は誰でもさうであつたらうが、私にとつて此の時から一生涯忘るべからざる時が始まつた。私は仲間を伍して教練をなし、やがて出征したのであるが、その時の思ひ出は昨日のことやうに今でも目の前に浮んで来る。

矢は既に弦を離れた。戦が始つてからは家や身を思ふものは我等の仲間にはなかつた。唯一つの氣がかりは、出征が遅れて、大きな戦に出られなくなることであつた。それ故に華々しい勝利の報道が来る毎に、戦場へ送られる日の早からざるを怨んだのは私ひとりでなく、當時皆のもの一致した思であつた。

そのうちにやがてミュンヘンを離れる日がやつて來た。私共はラインの流に沿うて西へと向つて行つた。ラインの河浪は静けくゆるやかに流れて居る。河の中の河であるラインは悠久に流れて行くのである。この河を不倶戴天の敵である佛人の手に委してたまるものか。かくて曉の光が河霧の間からさし込んで來た時、限りなく長い輸送列車の窓から、軍歌「ラインの守り」が一齊に歌ひ出された。

三、死の洗禮

それから間もなく、私達は冷たい濕めつぽい夜を冒してフランダの野を歩いて居た。そして夜霧が晴れて朝日が昇り始めたかと思ふ間もなく、豆を煎るやうな音が私達の耳を襲つた。敵の彈丸は音を立てて私達の列の間へ落ちて來たのだ。忽ち修羅の巷だ。鳴る、響く、叫ぶ、吠える。人々は熱つぽい目をしてひたすら前へ／＼と突進したかと思ふと、やがて大根煙に、生垣の内外に、敵味方入り亂

一四〇
れての肉弾戦が開始された。此の時後方で遙かに國歌が聞え、それが次第に近づいて来る。而してやがて私達の隊へ近づいて来た時、その歌はまがふ方なき「ドイツ・チュラント・ユバ・アレス」であつた。私達も亦始めて聲を合せてドイツ・チュラントの歌を怒鳴つた。戦は勝つたのだ。

之が抑も私の初陣であつた。抑も初陣とは死の洗禮のことだ。私達はこの時から人間が生れ變つたやうになつた。十七歳の子供までが大人のやうな面構へになつた。リスト聯隊の義勇兵は教練は積んで居なかつた。併し戦陣に臨んで潔く死ぬことだけは、やくから心得て居て、此の點で若武者達は老兵に比して一步もひけをとらなかつた。

かくて次第に戦は開けて行つた。而してそのうちにふと、恐ろしいものが私達の胸を壓して來た。國の爲に戦つて死ぬのは國民の務めだ。だが生物の本能は、どこまでも生きよと云ふ。人々は義務と本能との葛藤に悶え始めたのだ。私とても亦同じくこの悶えをのがれることが出来なかつたが、幾度か思ひ悩んだ末、一九一五年の末にはもはや肚が据つて居た。義務の觀念が、死の恐れを征服して終つたのだ。その時から私は生死に心を動かさなくなつた。そして若い義勇兵はいつの間にか恐を知らぬ武人になつて居た。

之は私ひとりではなく、全軍皆さうであつた。人々は毎日の戦で生れ變つたやうに強くなつたのだ。ドイツ軍は休む暇もなく、二年三年と續いて優勢な敵と戦つた。私達は既に幾千年の歲月を見送つて

來た。今後も亦幾千年の歲月が続くであらう。然りながら、世界大戦に於けるドイツ軍を論ぜずして軍の勇敢を論ずることは出来まい。ドイツ軍の奮戦は、永く人類の戦史を飾るべく、又苟も子孫の此の世に存する限り、ドイツ人はいつまでも父祖の勇武を誇るであらう。その頃の私は戦に夢中であつた。それ故に自ら政治に頭をつき込むやうな考へもなければ、又その時間もなかつた。私は國民が居つて戦線に銃後に各々の務を果して居る間に、かの代議士なるものが坐してあごを叩いて居るのを見ただけで、政治などはいやになつて居た。

かくの如くにして私は政治を憎んで居たが、それにも係らず、事一度國民の運命に關するものあるとき、殊に軍隊のことに關するものあるときは、黙つてばかり居られなかつた。

私が當時默視し難しと考へたことは二つあつた。

その一つは大勝利の報道に、國民が熱狂するのを非とするの議論であつた。一部の新聞は戦の始めから勝利の報道に夢中になるのは、大國民の襟度^{きんど}に非ずとして、ひそかに之を非難した。その説に曰くドイツ軍の強いのは昔から内外に知れ渡つた事實であるから、今や僅かの勝利を得たとて狂喜して慶を失するは外國に知れても面白くないといふのである。又戦争はドイツの目的でなく、ドイツはいつでも講和の用意あるものであるから、熱狂して好戦國民のやうな感じを外に持たせることは良くないといふやうなことも一つの理由とされて居た。然りながら之は大きな間違ひである。凡そ人氣といふ

ものは一度出ば、なを折られると、二度と、ものやうな活氣を呈しなくなるものである。人の氣勢は無我夢中の、ところに生命がある。而してそれがあつてこそ戦争も續けて行けるのだ。人氣を抑へて戦に勝利を得ようといふのは、とんだ錯誤だ。

私は大衆の氣持を深く知つて居るから、一部の新聞の、かうした態度を遺憾とした。大衆は上品な理想でなく、感情で動くのだ。そして、そこに熱狂的な働きが現はれて来る。従つて輿論指導の任に當る政治家乃至新聞は進んで民衆の人氣をかき立て、ことに力を盡すべきであるのに、引き立てることに務めず、反つて之を抑へんとするに至つては、殆んど狂氣の沙汰といふべきだ。而もドイツの新聞はそれを敢てしたのだ。他の一つはマルキシズムに對する當局の態度であつた。マルキシズムは一種のベストである。然るに私の目にはそれが當局に解つて居ないやうであつた。開戦と同時に政黨政派の區別を設けるのはわるい、國民は一致協力すべきだ、と聲明して黨の協力を求めた。そして政府はそれでマルキシズム諸政派の心をとり得るものと信じた。而して抑もマルキシズムが政黨でなく、世界革命の陰謀であることには、はじめから氣がつかなかつたのだ。

一九一四年八月の開戦當時にありては、ドイツ労働者は既にマルキシズムと袂を分ちかけて居た。それでなければはじめから彼等は從軍を肯んじなかつたであらう。當局は此の現象を見て、マルキシストが愛國者になつたと言つて欣んだ。然りながら世に之程大きな間違はない。而もこんな誤を犯す

のは要するに當局にマルキシズムを深く研究せるものがなかつた證左である。蓋しマルキシズムは地上に現存する民族的國家の崩壊を目的とするものである。ユダヤ人は此の陰謀を以て各國に働きかけて居るのだ。然れば一九一四年の開戦となつて、マルキシズムに染まつて居たドイツの労働者がはじめて多年の惡夢から醒め、敢然として祖國の爲に銃をとつて起つて及び、實狀を目撃したユダヤ人は愕然として色を失つた。彼等はドイツ労働者をとり込む爲に約六十年も働き續けて來たのである。然るに今や多年の成果が開戦と共に一朝にして水泡に歸し去らんとするを目撃しては、居ても起つても居られぬ程の淋しさを覚えねばならなかつた。然りながら彼等は其の儘退却することはなかつた。彼等は形勢の非なるを見るや、今度は俄かに態度を變じ旗をぬり換へて愛國者の如き顔を装ひ始めた。

四、好 機 去 る

ドイツ政府當局からすれば、正に此の時こそマルキシストのユダヤ人を片づけて了ふ時であつた。マルキシズムはドイツ労働者の國際的連帶を説いて居た。之が、所謂インタナショナルイズムである。然るにインタナショナルイズムは開戦と共に崩壊し、一方ドイツの労働者は始めて祖國愛に甦つたのである。然れば當局の吐さへきまつて居たら、開戦の機會を利用してマルキシズムを一網打盡に片づけることは、敢て困難でなかつたであらうと思はれる。

戦場では貴い國民の子孫が續々倒れるのだ。銃後に於て共產黨の不良分子を處分したとて何の不思議があらう。然るにも係らず、政府は、この肚がなく、カイゼル先づマルキシズムの首領連と握手して彼等の歡心を喪はざるに努め、當然亡び去るべきマルキシズムを、亡びずして反つて榮えしむるに至つたのは千秋の恨事だ。此の頃からマルキシストの運動は一層陰險になつた。政府が舉國一致の實を擧ぐる爲、彈壓の度を緩めたのに乘じ、マルキシストは表面は舉國主義を標榜しながら着々と革命の運動を進めた。

蓋しマルキシズムは徹底的に撲滅すべきである。之を撲滅せずして、妥協するが如きは思はざるの甚しきものである。私は心ひそかに當局の煮え切らぬ態度に憤慨した。然しながらマルキシズムを放任して置くことが、他日、あのやうな恐しい革命となつて祖國を覆す程の大事に至らうとは、私にさへ當時氣がつかなかつた。

然らば一體、どうすれば良かったのか。それは、わけのないことだ。革命運動の首謀者を一遍に檢舉して監獄にぶち込み、永く國民に害を及ぼさないやうに片づけて終ふことだ。それが爲には軍隊の力を用ゐても良い。それと共に各政黨は解消し、議會も文句を言つたらバヨネットで包圍し、それでも言ふことを背かなかつたら、一と思に議會もやめて終ふばかりだ。共和國となつた今日でさへ、政府は政黨に解散を命ずることが出来る。況んやあの當時のことだ。やぐざな政黨を解消するぐらゐは何で

もなかつた。何となれば、事は國家の存亡に關係して居たのだ。

人或は云はん、思想の戦には思想を以てすべきである、武力を以て思想を抑壓せんとしてもそれは畢竟徒勞であらうと。勿論余も亦屢々考へたことがある。

蓋し思想戦の對策は次の原則に基いて行はるるを可とする。即ち思想を制するには思想を以てするのが最も良いけれども、外からの力を以てすることは必ずしもわるくはない。但しそれには、やつぱり抑壓せんとする思想に代るべき理想の用意されてあることが必要だ。つまり、當方に執りて代るべき理想さへあれば、外部から彈壓を加へることは對手の思想をはやく消滅させる所以である。之に反し、代るべき何等の理想をも有せずして、暴力によつてのみ抑壓せんとしても目的を達することは不可能である。徒らに力によりて思想を壓迫せんとすれば、畢竟多くの無辜の血を流し、その爲に國家自らが衰亡して永く起つことが出来なくなるばかりだ。更に思想の彈壓は被彈壓者に對する同情などを喚起し、事態を紛糾せしめる不利もある。況んやあの當時だとわかつたら、最も良い方法は双葉のうちに摘みとることである。

力によりて思想を壓迫せんとすれば多くの場合に期待が外れ、反つて反對の結果を誘致する。理由は凡そ次の如し。

凡そ腕づくにて思想を彈壓せんとするには非常な根氣が要る。即ち一度彈壓を始めたら、どこまで

も根氣よくそれを繼續し、中途で止めたり、或は緩めたりしては斷じてならぬ。何となれば、暫らくでも抑壓の手を緩めるときは、忽ちに抑壓された運動が擡頭して、以前よりも一層強くなるのを常とする。彈壓はその度毎に迫害する者の反抗を昂めるからである。之即ち思想の彈壓には撓まざる根氣を必要とする所以であるが、此の如き根氣は到底彈壓のみを知つて、他を知らざる司直の者には望めない。此の如き根氣は必ずや内に何等かの信念ある者でなければ望めない。思想の根柢なくして力のみで行かうとする彈壓のいつも失敗に終るのも畢竟之が爲である。彈壓は多くは個人の一時的決斷によるものなるが故に、その人が地位を退けば、その運動も亦共に消滅して跡をとめなくなるのは止むを得ない。

一四六

五、新理想の確立

かくて思想の彈壓には、代るべき新理想を以てすることの必要が闡明された。而もこの新理想は單に他の思想を打破するといふ消極的なものでなく、わづい、思想を破壊するだけに止らず、進んで新しい境地を開拓する積極的なものでなければならぬ。蓋しかゝる運動には力があるけれども、抑壓だけの消極的運動には力がない。精神の戦に於ても防禦を専らとするものは敗れ、いつでも攻勢を持する者が勝つ。かくて、外から彈壓を加へる場合に於ても、思想戦では對手の思想に代るべき新しい理想

を用意して置くの必要がある。從來マルキシズムの撲滅運動が相當力を用ゐて來たにも係らず、失敗に終つて居るのは、マルキシズムに代るべき理想を與へない爲である。ビスマルクは社會黨の彈壓に力を用ゐた。それにも係らず、目的を達するを得なかつた理由も同じくここにある。ビスマルクも亦社會主義の惡むべきを知つて、社會主義に代るべき理想を與へなかつた。

然らば世界戦争勃發當時、又は大戦進行中はどうであつたか。遺憾ながら當局の對社會黨策はビスマルクに毫も異なるところがなかつた。

大戦當時の社會民主黨は則ちマルキシストの集團である。然れば政府としては速かに之を葬るべきである。然るに當局は之を處分するよりも、寧ろ之と妥協するの態度をとつた。私は之を非なりと考へると共に、マルキシズムに代るべき理想の持ち合せが當局にないのを遺憾とした。今假に社會民主黨を解散するとすれば、勞働大衆は依るところを失つて歸趨に迷はねばならぬ。當時社會黨に代つて之を收容すべき政黨又は運動が一つとしてあつたであらうか。インタナショナルに慣れた左翼の大衆が、そのまま右翼に轉向するものとはどうしても考へられぬ。

人或は云ふ、大衆は畢竟馬鹿な者だと。然りながら政界では往々頭よりも大衆の感じがヨリ正しい判斷を持つ場合がある。斯く云へば論者は直ちに反駁して來るであらう。曰く、勞働大衆は國家主義を抛擲してインタナショナルに合流して居る。之則ち大衆が馬鹿な證據であると。然りながら、

一四七

そんなことを云へば國家主義の諸黨のうちにも馬鹿なものがあるといふことになる。何となれば當今の弱々しいデモクラシーは、その弊害インタナショナルに劣らぬものである。然るにも係はらず之を信奉するものは殆んど全部インタナショナルに反對なる國家的政黨であるのは如何。インタナショナルに傾いて居るといふだけで大衆の知愚を判断せんとするのは誤りである。少くとも右翼諸黨の人々まで、毎日ユダヤ人の作る新聞を読んでデモクラシーを渴仰して居るうちは、労働者のインタナショナルを笑ふことは出来ぬ。蓋し政界流行のデモクラシーも、労働大衆のインタナショナルも、要するにその製造元は一つなんだ。則ちユダヤ人こそはデモクラシーと、インタナショナルの本家であつて、國民は右たると左たるとを問はず、その毒に當てられて自ら悟るところがないのだ。

一四八

扱て労働大衆が馬鹿であるか否かは別とし、所謂ドイツのインテリなるものは畢竟労働大衆なるものを抱き込むことが出来なかつた。彼等は始から労働者を階級の異なつたものとして見下して居るのだから、戦争が始まつてからでも俄かに之を己の陣營に引きつける力がなかつたのは當然だ。

既成諸黨は自ら國家的政黨と稱し、プロレタリアの大衆に對抗して居た。ドイツはかくて「國家的政黨」と「プロレタリア大衆」との二大陣營に分れて、事毎に衝突して居た。而も二つの陣營に分れて戦ふことになれば、舊事大主義の既成政黨が破れて、畢竟新進の大衆、則ちマルキシズムの勝利となるのは自然の勢と言はねばならぬ。

かく見來ると、開戦の初年であつた一九一四年に於ては、當局に決意さへあつたら、社會民主黨に一大彈壓を下すことが出来たかも知れない、とは理論としては言ひ得るが、政府、政黨ともにマルキシズムに代る理想の持ち合せのなかつたことを考へると、社會民主黨は一時屈伏しても、間もなく再び擡頭して來たらうと思はれる。此に大きな缺陷があつたのだ。

私は戦前から右のやうな意見を抱持して居たから、幾度も機會があつても既成政黨に加入する決心がつかなかつた。而も今や政府が社會民主黨を持てあまして居るのを見、而してそれが専ら新理想の缺如に基づくものなるを見るに及んで、益々私は以上の信念を固めた。私は社會民主黨をやりつけるには、既成政黨では駄目であることをつくつくと感じた。

此の間私は仲間の者達に屢々私の右の意見を語つて聞かせた。

かくて私が後年政治運動に身を投ずるに至つた動機は既に此の時にある。

私は又戦争が済んだら繪を描く傍ら、辯士として活躍するんだと仲間吹聴して居た。之も決して、いや、だんではなかつた。

一四九

附 戦争と宣傳 (「マイン・カムフ」第一卷第六章)

緒言

私がプロパガンダに注意し出したのは今に始まつたことでなく、ずつと以前からのことであつた。凡そ政黨のうちでプロパガンダの最も巧みなのは社會民主黨であつて、マルクス主義の勝利の一半は宣傳の力に依るものであると云へよう。プロパガンダは巧みに之を利用するときは畏るべき威力を發揮する。プロパガンダの利用は一の技術に属するものであるが、遺憾ながら既成政黨側では此の方面に殆んど理解がなかつた。彼等のうちで稍々プロパガンダを理解し、之を實際に行つて居たのは基督敎社會主義の人々のみであつた。

かくて私はプロパガンダのあらそかにすべからざることを、豫てから知つては居たが、その威力を目のあたりに見せつけられたのは世界戦争が始つてからである。但しプロパガンダが猛威を逞しうしたとしてそれは決してドイツ側でなく、聯合國側のプロパガンダが力を發揮したのであつて、口惜しいことの限であつたが、これが動機となつて私は、これまでよりも一層深くプロパガンダなるものを研究することになつた。世界大戦のドイツ側の宣傳のまづきは吾々兵卒にさへ目にあまるものがあつた。

蓋し聯合國側の宣傳の成功はドイツの宣傳の、ヘマに基いたものであるとも云へる。實にその間に於ける聯合國側の宣傳は機微に入つたものであつて、私は彼等のやりくちを見て大に學ぶところがあつたけれども、肝腎の當局は何にも感じなかつたやうである。ドイツ當局の一部がたかを括つて居た爲であり、一部は始めから學ぶ氣がなかつたのだ。

率直に云へば私はドイツ側に當時宣傳といふやうなものが一體あつたか、どうかと問ひ度くなる。蓋しドイツにも宣傳が全然なかつたのではないが、それが極めて半上落下な、ヘマなものであつたから益をなすことなかりでなく、反つて害をなした。若しドイツに宣傳なるものがあつたとすればそれは有害無益なものであつた。

一、宣傳は手段のみ

ドイツ側のプロパガンダは形式も不充分であり、内容も間違つて居た。

抑もプロパガンダなるものは、プロパガンダそのものを目的とすべきものであるか、或は又他に目的があつてプロパガンダはその手段に過ぎないものであるか、ドイツの宣傳を論ずるに當つては先づ此の點を明かにせねばならぬ。

抑も宣傳は畢竟手段である。それ故に宣傳の當否はその効果が目的に沿ふや否やに依つて判斷さる

べきである。然らば今ドイツが宣傳に依りて得んとする最終の目的は何か。他でもない、ドイツ國民の獨立自由、ドイツ國民將來の食料確保、而してドイツ國民の面目の維持である。就中、最後に擧げた國民の面目こそは最も大切なものであつて、苟くも面目を損しても恬然たる國民は早晚滅亡すべきものである。戦はざれば止む、苟くも戦へばよろしく勝つまで戦ふべしだ。負けて平氣な國民には面目も自由もない。そんな國民は奴隸である。ドイツ人は今や國民の存亡の爲に戦つて居るのだ。従つて此の戦を支持し、戦に勝たせるのが宣傳の趣旨でなければならぬ。凡そ道だとか、道でないとか、汚いとか美しいとかは平居無事の時のことである。苟くも國を擧げての興廢の戦となれば、良い、わるい、美しい、きたないは言つて居られぬ。何となれば正邪善惡、好惡美醜の觀念は人間のフアンタジイから生れるものであつて、外界には本來正もなく不正もなく、美も醜もない。人間があつて善惡があり、美醜があり、人間がなければ再び正も邪も、美も醜もなくなるのだ。道とか道でないとか云ふ人々は篤と此の點を考へねばならぬ。且正邪、好惡の觀念は地上の總ての民族に固有のものでなく、之を存する民族は少いのである。従つて假に人類が残存して居ても、肝腎の優秀な民族が亡びてしまへば、善惡、正邪の觀念も地を拂つて亡びて了ふのだ。

道義の問題は大切ではあるが、それに拘泥して居て、戦に負けるやうなことがある場合には、頓着して居ることは出来ぬ。その場合には自己保存の問題が、第一義的に考へらるべきである。道とか道

でないとかは第二の問題だ。

善惡正邪は所謂ヒューマニチーなるものである。ヒューマニチーに就ては私が喋々するまでもなくモルトケが、とくの昔に道破して居る。戦争になれば早く片づけた方が一番ヒューマニチックなんだと。つまり殘酷でも何でも良い、早く敵を屈伏させればよい、それが最も人道的だといふのだ。

次は美しいとか、汚いとかはエスチーチックの問題である。之も國を賭しての戦となれば、きたない、きたなくないは言つて居られぬ。凡そ世のなかで一番きたないことは負けて他の奴隸となることだ。蓋しエスチーチックの問題などはユダヤ人に任かせて置いた方が良い。而もユダヤ人自身が存在の爲に、どんなきたないことを爲して居るかを知らず、眞面目にこんなものを取り上げて問題として居ることは出来ぬ。かくて戦争に道義や、體裁などが不要であることが判れば、宣傳も亦人道や外間などに囚はれて居るべきでないことが明かである。

蓋しプロバガンダは目的でなくて手段である。プロバガンダの目的はドイツ民族の生存であるから宣傳も亦此の見地から出發すべきである。従つて早く勝つ見込さへあればどんな手段でも辭すべきでなく、國家の獨立を確保するものでありさへすれば、最もきたない手段が、最も美しい手段となるのだ。

戦時に於ける宣傳は須らく此の如き見地に立脚すべきである。

一五四
當時若し我が當局が、かく肚をきめて居たら、宣傳といふ折角良い武器を手にしなから、那婆、マはやらなかつたであらう。宣傳は用ゐることを知つて居る者に利用されると、恐しい働きをなす武器なんだ。

二、目標は大衆

宣傳に就いて論ずべき第二の點は抑も誰に向つて宣傳するかである。即ち宣傳はインテリに向つて施すべきものか、抑も又、ものの判らぬ大衆に向つてなすべきものかといふことである。

私は云ふ、宣傳は大衆對手のものであつて、インテリを目標とすべきものでない。

インテリに説くには學問を以てしなければならぬ。宣傳は學問でなきこと、展覽會の立札が展覽會でないと同様である。立札は觀客の注意を繪と色とに依つて會場へ向けられればそれで足りる。立札は、かによ、出來て居ても、それを見ただけで展覽會を見る必要がないことにはならぬ。立札は案内に過ぎないから、眞に繪畫を味はんとするものは自ら會場へ赴いて、一々歴觀して判斷を下さねばならぬ。プロパガンダは立札だ。

三、宣傳の使命

プロパガンダは人々に學問させる爲でなく、ある事件なり、事實なり、或は又あることの必要なる所以を大衆の頭に入れることである。今迄ぼんやりして居た大衆がはじめてそれらのことを氣にとめるやうになる。そこ迄持つて行くのが宣傳の目的なのだ。

それ故に深い理窟は判らなくても、大衆がその事實なり、事件なり、或はある事の必要なる所以なりを呑み込みさへすれば、宣傳の目的は達せられたことになる。かくて宣傳は展覽會の立札とひとしく、大衆の注意を喚起するに止まり、物知りの學者や物を知らんとして勉強して居る者の爲ではないから、宣傳は専ら大衆の感情に訴ふべく、六ヶ敷いことを言つてはならぬ。プロパガンダは須らく極めて通俗的なるを要する。讀ませようと思ふ大衆の一番頭のわるいものでも良くわかるやうになつて居なければならぬ。従つて宣傳の範圍が愈々廣ければ、宣傳の内容は愈々程度の低いものになつて來て良いのだ。殊に戦時の如く一般國民を對象とす場合には、判り難い理窟を並べて大衆を悩ますことは大の禁物だ。宣傳の當否は畢竟大衆に及ぼす效果に依つて判斷さるべきものであつて見れば、學者や一部青年の満足を買つたとて、それで宣傳が成功したものとは言はれぬ。宣傳は大衆の心の奥に喰ひ入りその注意をかき起すところに生命がある。

次に宣傳は大衆を目あてにするものである以上、學校の講義なんかのやうに多くのものを並べ過ぎてはならぬ。之も亦宣傳について注意すべき點である。

一五六
大衆は物の判りがわるく、且忘れっぽいものである。然れば効果ある宣傳をなすには、成るべく説明の要點を少くし、それを簡単な標語に纏め、最も吞込のわるい者でもそれを聞いた直ぐにピンと頭へ来るやうになつて居なければならぬ。之が宣傳の一つの原則であつて、之を無視して、あれもこれも一時にとり入れようとすれば、印象が自ら散漫になつて効果が薄くなる。大衆には吞込めないからだ。吞込めても永く覚えて居られないからだ。

宣傳は先づその與ふる心理的結果を考へることが必要である。例へば敵をやたらに弱いものやうに言ひふらす如きはよろしくない。世界大戦中ドイツ及びオーストリアの宣傳機關は、英兵をとるに足らぬ程弱いものだと言傳して居たものだ。然るに英國の軍隊は實際は弱くなく、なかなか強い兵士であつたから、始めて戦場で英兵にぶつた味方の兵は意外の思ひをなすと同時に、それがもととなつて政府の宣傳に信を置かなくなり、士氣の上にも非常にわるい影響を與へた。

四、英米の宣傳振

英國でも米國でも此の點は注意が良く行き届いて居た。兩國の宣傳は専ら民衆の心理に重きを置いて居た。彼等は始めからドイツ人を蠻人であると説き、フンだと罵り、ドイツ人を畏るべきもののやうに國民に思はせて置いた。従つて戦場でドイツ軍の猛烈な武器に出逢つてもドイツ人は國に居た時

に聞かされて居たやうに、果して恐しい蠻民であつたと言つて毫も驚かないばかりでなく、益々ドイツに對する敵愾心を深めた。而して同時に政府の宣傳は確かであつたと信するやうになつた。かくて彼等はドイツばかりが残酷な武器を用ゐて憚るところなき蠻族なりと思込んで居たが、事實は反對で聯合軍の武器はドイツの武器よりも遙かに残酷であつたのである。然るに係らず、英米の兵がそこに氣がつかず、ドイツのみを呪つたのは、要するに本國に居た時からの宣傳の効果なんだ。こんなところにもドイツと聯合軍との宣傳の巧拙がある。

殊に英國當局のドイツに就て云つて居たところは、平時から一つとして宣傳でないものはなかつたのに、英兵は、うまくあやつられて、最後までそれが宣傳であつたことを悟らなかつた。然るにドイツでは兵士がまづいつの間にか政府の宣傳を信じなくなつて居た。誠に遺憾なことであるが、政府が宣傳を馬鹿にして、平時から良い加減の人間に任かせて置いた結果がここに立ち至つたのである。

五、迂濶なるドイツの宣傳

ドイツの宣傳は講義としては此の上もない結構なものであらうが、肝腎の大衆の心理に就ては毫も心を配ることがなかつたから、宣傳の効果は、いつもゼロであつた。否、ゼロたるに止まらず反つて有害なことさへ度々あつた。

本来宣傳は公平を旨とするものでなく、始めから偏したものである。蓋し一方的にして偏したものでなければ宣傳の効果はない。ドイツの宣傳は此の點に於て最も大きな過誤を犯して居た。私は今思ひ出してドイツの當局は、良くも、悪くも、馬鹿なことがして居られたものだと思う。ドイツの役人はよくも本気で、あんなことがやつて居られたと思ふ。私は更にその間に何か、からざることが潜んで居て、故意にやつて居たのではないかとさへ疑ふ程である。

例へば、ここに石鹼を賣り出さうとして居る店がある。その店の廣告が新しい石鹼をほめると共に、他の店の石鹼をほめたたとすれば、どうなる。そんなことをしたら、恐らくは、誰も買はないであらう。

政治の宣傳だつて同じことだ。それ故に宣傳は本當のことではなく、嘘であつても良いのだ。要は相手を知るくして、こちらを良いものにさへすれば宣傳の目的が達せられるのだ。それがわからぬやうでは宣傳でない。

過般の戦争に就ても理窟は双方にあつたであらう。但し一度戦争となれば、非は全部聯合國側にあつて、ドイツ側には聊かの罪もないといふやうに宣傳するのが良いのだ。然るに我等の宣傳は之と異り、ドイツ側ばかりが、悪いのではないと言つて、辯明にのみ努めて居た。世に之程煮えさらぬ宣傳があらうか。抑も國民は外交家でもなければ國際法學者でもない。國民は感ひ易い凡俗な人間の集り

なのだ。その凡俗な人間に對し、敵だつて、悪いことばかりはないのだ、敵側にも三分の理窟があるのだ、といふやうなことを言つたのでは、先づ自分の國の立場に就て疑を持つやうにならざるを得ない。大衆には本来、どちらがわるい、かの判断がないのだから、敵にも、いくらか理窟があるなどと言はれると、どちらが良いのか見當がつかなくなる。殊に自國の政府が公平ぶつて敵にも理窟があると言つて居るに對し、敵側には非は全部ドイツにあるのだといふやうに、而も連續的に有力な宣傳をなして居る場合には、不知不識の間に、つり込まれて、自國の政府の宣傳よりも敵國政府の宣傳に信をおくやうになる。殊にドイツ人の如く公正を尊ぶ國民にありては、敵が正しいのだと聞くと忽ち戦意を喪つて了ふ。之がドイツの陣營の先づ動搖し始めた一つの原因である。

當局の意は無論、そんなところにあつたのではないが大衆には判らない。民衆は「頭」でなく「感じ」で動くものである。ところで、感じとなると極めて簡單でなくてはならぬ。イエスか然らざればノー、正か然らざれば邪、愛か然らざれば憎、真か然らざれば偽。大衆は單純であるから白でなければ黒で、白でもあり、黒でもあるやうなことは大衆には判らない。此の點英國側の宣傳は手に入つたもので、あいまいなことは断じて云はない。右が左か判らないやうなことは聊かも口にしない。それ故に群衆は嘗て惑ふといふことがなかつた。英の當局は先づ徹底的にドイツ軍の蠻行なるものを宣傳した。之が爲に戦線の兵士の敵愾心は、かき立てられた。次は戦争責任であつて、英國側はドイツばかりが、わる

ものであるやうに、よく宣傳した。之等は何れも感情で動く民衆の單純な心理を利用せんとしたものだ。

感情に訴へる宣傳の如何に深刻なものであるかは、戦争が終つてから四年になつても衰へず、聯合國民はいま尚ドイツ人を蠻民の如く卑しめ、ドイツだけが戦争の全責任を負ふべきもののやうに考へて居るのを見ても判る。

之等の點に於てドイツ側の宣傳の無能であつたことは云ふまでもない。ドイツの宣傳は第一に、いまいであつた。徹底して居なかつた。第二にドイツの宣傳には大衆の感じに訴へるといふやうなものがなかつた。いつも戦を欲するが如く、又講和を欲するが如き口吻であつたことは、少からず國民の戦意を挫いた。

ドイツの宣傳は、かくて徒勞であつたばかりでなく寧ろ有害であつた。

六、宣傳と根氣

凡そ宣傳に於て最も力を注ぐべきは、前にも述べたる如く、宣傳の要旨を簡單な項目に纏め上げ、それを幾度ともなく繰り返し宣傳することである。この根氣がなければどんな宣傳でも決して成功するものでない。

宣傳の要目が簡單であれば、内容が貧弱だなどと非難するものがある。然りながら内容を飾ることに努めたら宣傳もやがては文學青年の、おもしろくなるばかりで、大衆を引きつけることにならない。又曰ふ、同じものを繰り返してゐるのは陳腐である。然りながら、之を陳腐だとか、退屈だとか言つて居る連中は、多くはひやかしの輩であつて、讀んでも決して運動に投じてくる人間でない。私達はそんな連中を對手にして居られない。

宣傳は退屈さきにも、を讀んで居る人間の爲でなく、大衆獲得の爲である。然るに大衆は、おもしろがりやであつて、一つのことを理解するにも容易でなく、千遍も萬遍も繰り返して聞かせねばわかりきつたことでも覚え込まない。

プロバガンダの形は或は時に變更されてもよからう。然りながらその場合でも斷じて内容を變へてはならぬ。標語を説明するにもあらゆる方面から之を説くことの必要はあるが、いつでもその標語のところへ返つて来るやうな説明でなければならぬ。プロバガンダは此の如くにして始めて力がある。

根氣良くといふことはあらゆる宣傳の秘訣であつて、之なくして宣傳を語ることは出来ない。此の點に於て根氣にまさる宣傳はないと云ひ得よう。

政治でも商賣でも宣傳は同じことを根氣よく續けて行くところに勝利がある。而して根氣のよいこととに於ても聯合國の宣傳は勝れて居た。要點を少くし、大衆を目標に根氣よく續ける。それが聯合國

側の宣傳であつた。戦争は四ヶ年に亘つたけれども、聯合國は始めに掲げた宣傳の要旨は最後迄變へなかつた。それ故に始めに馬鹿々々しいと思つて居たものも、中頃はそれ程でなくなり、最後にはほんたうでもあらうかと信ずるやうになつた。人若しそれより四年半の後に起つたドイツの革命が、何れも戦時に於ける聯合國側の宣傳の標語を掲げて居たことを知るものは、如何に英米の宣傳の根強いものであつたかを知るであらう。

最後に宣傳には金を惜しんではならぬ。宣傳は精神的武器である。従つて同じく武器である以上、ふんだんに使はねば戦果は擧げない。而もいくら金を使つても、成功さへすれば使つた金を償うて餘りある。

英國は宣傳は一等の武器だと考へて居た。

然るにドイツでは宣傳は役に離れた政治家の手間仕事とされて居た。ドイツ側の宣傳が差引勘定して結局零なのはその爲である。

第五章 革命の巻

一、宣傳べたなドイツ

大戦中に於ける聯合國側の戦地宣傳は一九一五年に始まり、一九一六年に入つて益々活潑となり、一九一八年の初頭には畏るべき勢威を示すに至つた。宣傳は血なき虐殺である。かくて一九一八年には我が軍隊の到るところに、血のなき虐殺の跡が発見されるやうになつた。軍部では、とくにそれに気がついたけれども、政府は無能で何等の對策も講じなかつた。

當時の軍部は優秀な幹部を有して居たから、單に武器の戦ばかりでなく、宣傳戦でも敵に劣らぬ活動がしたかつたのであらうと思はれるが、遺憾ながら軍部には其の便宜がなかつた。兵士が四年の歳月に互に戦線の困苦缺乏に堪へ、甚しきに至りては生命を國に捧げて悔めることを知らないのも、畢竟銃後の父母妻子を思ふが爲である。従つて兵士を動かすには銃後よりする宣傳より有力なものはない。然るに軍自身にはそれが出来ない。

然らば當時銃後のドイツは何をして居たか。頭がわるくて氣がつかないのか、或は又知つて居て故

意に戦線を擾亂せんとしたものか、その邊のことはわからぬが、銃後では、ヘマなことはかりやつて居た。既に一九一八年の夏、則ちマルヌ南岸の撤退頃からドイツの新聞は弱音をば、始めた。そしてそのまゝの記事を載せた新聞が遠慮會釋もなく戦線へ送られて来るのであつた。私はそれらの新聞を見る毎に銃後では何をして居る、どうしてこんなものを戦線へ届けさせるのか、人が居らぬのかと怒鳴り度くなつた。

一九一四年にドイツ軍はフランスに雪崩れ込んだ。その時のフランスは、どうであつたか。

又我等は同じくイタリア軍をインソング河畔へ追ひ詰めた。その時イタリアでは何をなした。

フランスもイタリアも當局は沮喪した軍隊の意氣を振ひ立たせ、最後の勝利を信ぜしめる爲に大童の宣傳をなして疲れを知らなかつたでないか。

然るにドイツではどうか。

ドイツは始めから殆んど宣傳らしい宣傳をしたことがなかつたではないか。新聞は兵士に氣を落させるやうな記事を平氣で載せて居た。私は戦線へ来る近着の新聞を見る毎に頭がカツとなつた。政府には宣傳をやる者がいないのか、或は知つて居ても故意にやらないのか、何れにしても怪しからぬことだ。私に宣傳をやらしたら、ウンとやるんだがな！ 當局の無能に憤慨した私は度々そんなことを言つたものだ。

世の中は誠に思ふまゝにならぬものだ。私は今戦線に居る。而して黒ん坊の彈丸にだつて當たれば死ななければならぬ危い地位に居るのだ。銃後に居て宣傳に力こぶを入れたら、良い成績を擧げる自信はあるのだが、それがどうにもならないのだ。

私は無名の一兵卒だ。ドイツの軍隊は八百萬人あつて、私はそのうちの一人に過ぎないのだ。今更何を言つたつて始まらない。言ひ出して笑はれるより、口を、かんして兵の務を忠實にやつて行くに如くはない。私はさう思つては、あきらめるばかりであつた。

二、聯合軍の宣傳ビラ

ドイツ軍の中へ始めて敵の宣傳ビラが落されたのは一九一五年の夏であつた。

宣傳は時々文句や體裁は變つても内容はいつも同一であつた。其の要に曰く、

「ドイツ國內の窮乏は日を逐うて甚しくして戦争は限りなく續かんとする。而も勝利の望はないのであるから、國民はひとしく平和を希望して居るが、軍部とカイゼルが遮つて望を達せしめない。世界はドイツの國民と戦つて居るのでなく、世界大戦唯一の責任者であるカイゼルと戦つて居るのだ。カイゼルは世界平和の敵であつて、聯合國はカイゼルの斃すまで干戈を收めぬであらう。併し聯合軍はカイゼルを憎むがドイツの國民は憎まない。ドイツ國民は聯盟に收容して永く各國と共に

平和を享受せしめるであらう、云々。

宣傳ビラには尙プロシヤの軍國主義を打倒しなければ地上に平和が来らないとも書いてあり、中にはドイツの銃後から戦線へ送られる憐れな手紙の寫しまでも添へたものもあつた。

始めは我等も之を一笑に附して居た。宣傳ビラを皆で讀み了ると、一經めにこれを後方の軍幹部へ送り届ける。送り届けられればそれで忘れて了ふ、といふ有様でそのうち又ぞろビラが空から墜落のなかへ放り込まれて行つた。ビラを撒布して行くのは大抵敵の飛行機であつた。

此の間唯一事油断のならぬことがあつた。それは、宣傳ビラにプロシヤとバイエルンを離間する文字が連ねてあつたことである。則ち、バイエルン兵の守備する地域へ投下されるビラには、戦争の責任者はプロシヤであつて、聯合國はバイエルンに對しては敵意を有して居らぬ、バイエルンは利用せられてプロシヤの爲に火中の栗を拾ふものであるから、プロシヤから離れて来さへすれば、聯合國は何時でも欣んで之を迎へるに吝かでない、といふのであつた。

之が相當に利いて、一九一五年頃からバイエルン軍隊の間に反プロシヤの空氣が次第に濃厚となつて往つた。而してバイエルンの軍幹部が之を放任して取締らなかつたのは取り返しのかゝり怠慢であつた。何となればプロシヤがなければドイツがなく、ドイツがなければバイエルンだつて無いのだ。プロシヤ、バイエルン離間の宣傳は一九一六年以後も繰り返された。

聯合國の外からの宣傳と相並んで内地の窮狀を訴ふる銃後からの手紙も悪い影響を軍隊に與へた。

敵の宣傳ビラは飛行機で運んで来るのだから、持つて来るに骨も折れたであらうが、内地からの宣傳はそんな手数が要らない。内地からの宣傳とは銃後の女子供から戦線の兵士に送る泣きごとを並べた手紙である。之等の手紙が戦線の勇士にどんな悪影響を與へたかは想像に餘りある。女子供の手紙は敵の宣傳ビラよりもつと甚しく士氣に影響した。女子供はそれが戦争を永引かせ、廻り廻つて畢竟愛する夫や子の命を奪ふものであることに氣がつかなかつた。

かくて一九一六年には既に面白からぬけはひがあちこちに見られた。軍のなかには不満の聲が漸く起つた。飢を忍び、困苦に堪へ、家族はみじめな生活をなしてゐるのに、内地では贅澤と放逸に暮してゐる不心得な者が居るのだ。否、内地ばかりでなく、生死の巷である戦線ですらも勝手な眞似をするものが出た。

それでも兵の不平なるものは割合に單純であつた。今迄不平を並べて居たかと思ふと、忽ちそれを忘れて懸命に働いて居る兵士もあれば、愚痴をこぼして居た中隊が祖國の大事と飛込んで墜落を死守する者もあつた。軍隊は動搖して居たと言つても、當時は尙昔ながらの立派な軍隊であつた。困つたのは銃後の崩壊であつた。

一九一六年九月下旬私の所屬部隊はソナムの殲滅戦に臨んだ。戦は名狀すべからざる程激烈を極め

たものであつて、戦といふよりは寧ろ生きながらの地獄であつた。

恐しい猛火のうちに立つてドイツ軍は一步も後へ引かなかつた。

一九一六年十月七日私は遂に負傷した。

私は無事後方へ運ばれ、内地へ送還された。

私も征途に上つてからも、二年の歳月が流れた。私は二年振りで還るのだ。銃後の人達はどんな顔をしてゐるであらう。それを私は早く見度いと願つた。それ故にエルミの傷病兵舎で始めてドイツ女の聲を耳にした時は、可笑な言ひ方だが縮み上がるやうな欣びを感じた。看護婦志願で戦地へ來たドイツの婦人が、私の隣に臥して居る傷病兵に聲をかけてゐたのだ。

こんな女の言葉を聞くのも二年振だ。

私等を後方へ送還する列車が國境に近づくに従ひ、ちつとして居られなくなつた。二年前に初陣の若者として攻落したブリラセル、レーベン、リナチヒの町は後へ／＼と流れて行くのであつた。

やがて私等は國境を越えて始めてドイツの家を見た。嗚呼懐かしの祖國よ！

一九一四年の十月は戦場へ赴くべくこの國境を越えた。その時は一同はちきれさうな元氣であつた。一九一六年の十月は負傷兵としてこの國境を越えるのだ。今は唯感慨の静けさがあるのみだ。生きて歸るまいと思つて居た勇士も、復び祖國の山河を目にして泣いた。之が命をかけて護つた我等の

祖國であつたのだ。人々は懐しい思を新たにした。

私は二年前の出征した日と殆んど同じ日に、伯林郊外ベリッツの傷病兵舎に收容された。

何といふ境遇の變り方だ。ソンの塹壕の泥の中から伯林の病院の白いベッドへ移されたのだ。始めは氣がとがめてベッドへもぐり込むことが出来なかつた。周圍に慣れるまでは、白いベッドも氣がひけて這入れなかつたのだ。

と、ころで慣れて來ると、そこに又意外なことが少くなかつた。

戦線に居る兵士の魂といふやうなものはこゝでは影をひそめて見られない。欣ばれるのは戦場の手柄話でなくて、弱いことが自慢になつて居るのだ。恥しくて人の前で言はれぬ卑怯な話が得々として話されて居るのだ。これだけは戦地に居る我等の思ひもつかぬことであつた。戦線でも不平を言ふものはあつたけれども、それは戦が恐い爲ではなかつた。戦線に居る者は何れも強かつた。而して怯懦な人間は指彈されて勇氣のある者は相變らず尊敬された。ところがこの病院ではそれが逆になつて居る。こゝでは棒にも箸にもかゝらぬ悪い奴が居て大きな口を利き、凡そ兵はどこまでもこすく立ち廻るのが伶俐で、眞面目なのは馬鹿だと罵言して居た。なかでも質のわるいのが居て、己は本當に戦で負傷したのでなく、自分で鐵條網にひっかけ手に負傷させて、この病院へ來たのだと言つて居た。

こんな事は人に知られてはならぬ恥かしいことであるにも係らず、彼は得々として吹聴し、軍隊へ行

つたらこれ程の度胸がなくて、どうするかと得意らしく鼻をうごめかして居た。流石周囲の者は口を利かず聞いて居るものもあり、黙つて出て行く者もあつたが、又相槌をうつてはやし立てて居る者も少くなかつた。

私はその男の顔を見るのも厭であつたが、その男はその後依然として病院にのさばつて居て何等の處分をも受けなかつた。上の方では何者であるかを知らぬ筈はなかつたと思ふが、彼は少くとも私の居るうちはのさばつて居て誰からもがめられなかつた。

そのうち私も漸く歩けるやうになつて、ある日ベルリンへ出て見た。

町はひどかつた。ベルリンは數百萬の人口を擁する大都市だ。その都市が飢えてゐるのだ。而してどこへ行つてもみななぶらう／＼言つて居り、兵士の多く寄るところではペーリッツの病院同様、い傷兵が眞面目な兵士を嘲笑して居た。彼等は確かにどこかの廻し者であつたに相違ない。然らざればこんなふざけた眞似をする筈はない。

ベルリンはそれでも未だ良い方であつた。ミュンヘンに至りてはもつとひどく、士氣がすっかり頹廢して居た。

私は傷が癒えて補充部隊へ歸つてみると、ミュンヘンの町の人氣は見違へる程變つて居た。どこへ行つても聞えるものは怨嗟の聲ばかりで、誰も彼もがいら／＼して居た。單に町ばかりでなく、隊の

空氣も面白くなかつた。戦場から送り還される兵士は内地に止まつてゐる兵士のやうに大人しくないのである。ところが戦地に居た將校なら、言はなくても良く解つて呉れたが、戦に出たこともなくて應召で出て來たやうな老將校には兵の氣分が呑み込めないから、隊長と卒との間がしつ／＼行かぬ。こんな特殊の事情も加はつて軍隊の居心地は頗るわるかつた。その上、いでも戦場に出て要領良く道けるものは憐憫で、眞面目に戦ふものが馬鹿とされたことも不快なことであつたが、それにも増して私を憂鬱にさせたものは、隊に居た軍属が殆んどユダヤ人であつたことだ。軍の書記は凡てユダヤ人で、ユダヤ人は凡て軍の書記であつた。

經濟方面ではユダヤ人が跋扈して手がつけられなくなつて居た。彼等は戰時統制會社の名に隠れて國民の自由經濟を葬らうとした。

ユダヤ人は頻りに統制の要を説いて之を實行させた。従つて一九一六年から七年へかけて、ドイツ全土の生産は擧げてユダヤ財閥の掌中へ收められることとなつた。

然れば國民の反感は當然ユダヤ人に向けられるべきであるのに、事實は反つて反對であつた。私はそれを看て、こいつは不可ぬと考へた。

國民を搾取して居るのはユダヤ人である。攻撃は當然ユダヤ人の上に加へらるべきであるにも係らず、盛んにプロシヤ攻撃の宣傳が行はれて居たのは奇怪千萬だ。而も戦地同様内地でもこれに對して

バイエルン當局は何等禁止の措置を講じようとしなかつたのは遺憾であつた。試みに思へ、プロシヤ
なくして獨りバイエルンの存することなく、バイエルンなくしてプロシヤのみ存するの謂れはない。
プロシヤとバイエルンは唇齒輔車の關係にある。それを忘れて反プロシヤの宣傳を默認して居たのは
バイエルン當局の怠慢でなくて何であらう。

バイエルンに於ける反プロシヤ的宣傳はユダヤ人の惡戯であつた。ユダヤ人は已に對する國民の非
難を、他に轉嫁せんが爲にプロシヤを利用したのである。ユダヤ人は之に依りて同時にプロシヤとバ
イエルンを相争はしめ、バイエルンをしてプロシヤに叛かせつゝ、プロシヤに於て潜かに革命の準備
をなし、プロシヤ、バイエルンを一時に崩壊せしめた。

プロシヤ、バイエルンの反目は兄弟の争である。私は國牆の醜を目にするに堪へず、それから間も
なくミュンヘンを發つて再び出征の途に上つた。かくて一九一七年三月上旬には、私は戦地にあるも、と
の所屬聯隊で再び銃を執つて居た。

三、軍需工場のストライキ

此の間流石熾烈であつたドイツ軍の士氣も底をついたかに思はれた。軍隊には、ことなく弛緩の色
が漂つたのである。然るに同年則ち一九一七年の終頃になつて、ドイツ軍に再び活氣が芽え歸つた。

露軍大敗の報を得てドイツ全軍は新しい希望と勇氣とを得、最後の勝利はドイツだとの自信が各自の
胸に浮び來るに及んで、あちこちに鼻唄の聲さへ聞へて、ぶうぶういふ者もいつか跡を絶つた。

ドイツ軍は一九一七年秋にイタリー軍をもイソンゾ河畔で厭といふ程やりつけた。之が亦ドイツ軍
の士氣を振ひ立たせる一つの原因となつた。ドイツはプロシヤを破つて東に延びることが出来たばかり
でなく、イタリーを撃ちのめして南にも進撃の門戸を開いたのだ。ドイツ軍は輝かしき望を抱いて明
け行く一九一八年の春を俟つた。

他方聯合軍は重なる與國の敗北に意氣全く銷沈の態であり、はかばかしい戦も仕かけて來ず、戦線
は、いつになく静かなうちに十七年の冬は暮れた。併し之は畢竟風の前の静けさであつたことが後に至
つて知られた。

ドイツがかくして一舉に勝敗を決せんとし、今度こそはと總攻撃の準備に着手し、人と彈丸とを載せ
た車輛が西部國境へと動いて居る間に、思ひがけない事變が突發して全軍を震撼させた。

ドイツを勝たせてはならぬ、敵は春を期したドイツ軍の總攻撃を内から阻止するの計略を運らした
のだ。

それはドイツに起つた軍需工場のストライキであつた。

若しこの罷業が成功したら、ドイツ軍は此の時既に崩壊して、フォールヴェルツ紙の希望が成就した

であらう。則ち、ドイツ軍は軍需品缺乏の爲に二三週間を出でざるうちに敵軍に突破され、聯合軍は勝利を得、國際資本はドイツの經濟を支配し、世を擧げてマルキシストの天下となつたことであらう。

幸にして工場のレストランは大事に至らぬうちに片づけられ、戦線でも軍需品の不足を感じるやうなことはなかつたけれども、この不祥事に依つて軍隊の蒙つた精神的打撃は癒すべくもなかつた。軍需工場のレストランはドイツにとりて二重の打撃となつた。

このレストランがあつてからドイツの軍隊は始めて戦争繼續に疑問を持つやうになつた。ストライキは國民が戦を欲しない證據だ。銃後の者が既に戦を欲しないとすれば、我等は何の爲に尙戦を続けるのか。戦線の兵士はいつかさう考へるやうになつた。之が一つの打撃だ。

一九一七年の冬から一八年の春にかけて、聯合軍側は始めて深い憂色にこめられた。聯合軍は四年間も續いて攻め立てて居るがドイツを破ることが出来ないのだ。而も此の間ドイツは東に出で、南を伐ち、西部戦線は防禦にとめて居たのである。それでさへ破れなかつたドイツ軍が、今やロシアに徹底的の大打撃を與へ、軍を廻して西部の攻勢に轉ぜんとするのである。聯合軍が色を失つたのは當然である。

ロンドン、パリでは小田原評議が開かれ通してあつた。巧を誇る聯合國の宣傳もドイツ軍の優勢を

掩ひ隠すことが出来なくなつた。

戦線亦同様であつた。ドイツの兵は撃たれに出て来る馬鹿者だと言はれて居た。然るにその馬鹿者はロシア軍を叩きつけて恐しい力を示した。ドイツは久しく東部戦線を放任して置いた。敵は之を以て力が足らぬ爲だと言つて居た。ところが東部戦線の無爲は、畢竟ドイツの巧妙な作戦であつたことも明かになつた。聯合軍は驚いた。

ドイツ軍は三年間もロシア軍と對峙して居た。始めは攻めても殆んど効果がないやうに思はれたから、ドイツはロシアを攻めても徒勞だといふ聲が聞かれた。最後の勝者は數の多いロシアで、ドイツは戦ふ毎に出血を重ねるに過ぎないとも言はれた。

タシネンベルグの捕虜が徒歩で、或は又列車でベルリンへ續々送られて來たのは一九一四年の九月で、それ以來ドイツに來るロシアの捕虜は絶えたことがなかつたが、いくら殺してもロシアの軍隊は減ることがなくて益々増へるばかりであつた。一軍を殲滅するとすぐそのあとに新しい軍が生れて止まるところを知らなかつた。

然るにそのロシアが今や手厳しい攻撃に堪へずしてドイツに參つたのだ。聯合戦線の兵士の胸に恐怖と不安の念が動き始めたのは怪しむに足らぬ。彼等は來るべき春のドイツの總攻撃を思ひ戰慄した。これまで東部南部に忙しくて、力を專にすることの出来なかつた時さへ、西部ドイツ軍は強くて

勝てなかつたのだ。そのドイツが他の戦線の兵をも回収して悉く之を西部に集め、乾坤一擲の戦を挑まんとするのだ。聯合軍に果してこれを喰ひ止めるだけの力があるであらうか。英佛の聯合軍はそれを思うて不安を感じた。

人々は既に冷たい夜霧の間から忍び寄るドイツ軍の靴音を聞くが如く感じて慄いたものである。此の時忽ちドイツの空に當り、雲間に電光の閃くものがあつた。それは則ち既記の軍需品工場のストライキであつた。ストライキは丁度ドイツ軍が西部戦線で總攻撃に移らんとするの時に突發したのである。

聯合軍はストライキの報道を得て急に生氣を取り戻した。政府はあらゆる手段を以て沮喪しかけて居た戦線の士氣を鼓舞し始めた。英米佛の新聞は「革命の獨逸」「最後の勝利は聯合軍」などの大見出しをつけて戦闘熱を煽つた。而して之に依り既に浮き腰になつて居た西部戦線の聯合軍は再び自信を取り戻し、ドイツ軍を邀撃すべき態勢を整へるに至つた。

軍需工場のストライキは敵の戰意を固め、勝利の確信を強めしめた。之がストライキのドイツに與へた第二の打撃である。ドイツはストライキに依つて此の如き禍害を蒙つたのである。而もこのストライキの巨魁が、後に至り革命政府の大官に擬せられて居たのは驚くべきことでないか。

此の時以來聯合軍の士氣は頓に舉り、數ヶ月の間だ。それさへ忍んだら、勝利は我等のものだ。」と

いふ自信と希望が持たれるやうになつた。而して聯合國の議會も亦巨額の戦費を可決し、大規模の宣傳に依つてドイツを崩壊せしむべく一層力を用ゐ始めた。

四、毒瓦斯で失明

私が西部戦線の總攻撃に参加したのは、最初の二回と最後の一回とであつた。

前二回もさうであるが、最後の一回の思出は殊に忘れんとしても忘れない壯快なものである。ドイツ軍は一度一九一四年に進撃してから以來、フランス方面では永く守勢をとつて居た。然るに今度は漸く機熟して西部戦線でも攻勢をとる、ことになつたのだ。快んだのは私ばかりでない。三年も我慢して來たドイツ軍は、聯合軍に鐵槌を加へる日が來たと勇み立つた。塹壕には歡聲が聞え、進撃する長い縱隊からは「ファールラント」の朗らかな軍歌が起つた。ドイツ軍の意氣は此の時を以て頂上に達した。

此の間内地では政争が続いて居た。何の争か、ハッキリしたことは判らぬが、どの部隊へ行つてもその噂ばかりであつた。「戦は勝つ見込がないから止めろ。」「ドイツが勝つと思つてゐるのは馬鹿者ばかりだ。」「國民は戦に飽きた。戦を欲するのはカイゼルと資本家ばかりだ。内地では、こんなことが口から口へと傳へられたやうであつた。而して隊でも亦、いづしかそれと同じやうなことを言ふ者が多くな

つて行つた。

一七八

それでも始めは大きな害がなかつた。内地ではその頃頻りに普通選挙などと騒がれたが、戦線ではそんなことに氣をとられるものはなかつた。私達の仲間には「ドイツ・チュランド、ユバ・アレス」を叫んで死んで行くものはあつても「普通選挙」と叫んで死んで行くものは一人もなかつた。戦線では政争などを氣にするものがなく、エーベルト、シャイデマン、バルト、リープクネヒトの徒が俄に勢を得て出し、やばつて居るのを唯不思議に思つただけである。

普選の運動は私は始めから氣に喰はなかつた。政黨のなすところは國民の幸福でなくて、政黨の私腹を肥す爲なんだ。彼等はキンチャク切りだ。彼等の提灯を持つて騒ぎ廻ることは少數のキンチャク切りの爲に多數の労働者を犠牲に供することだ。彼等は國賊だ。私は彼等を葬らざればドイツの前途危しと考へた。

獨り私ばかりでなく、戦地に居た者は大部分私と同じ考を持つて居り、社會民主黨一味の宣傳にはのらなかつたから、戦地の兵は安心であつたが、内地から来る兵隊の目に見えて悪くなつて来るには驚いた。こんな質の低下した兵隊なら、來て呉れるより寧ろ來てくれない方が良いと私は思つた。殊に若い者達は大部分役に立たず、之でもドイツの軍隊かと疑はれるやうな者ばかりであつた。

敵はそのうち攻勢をとつて來た。それは味方の守勢にさへ及ばぬ手緩いものであつたが、それにも

係らず、ドイツの戦線にはどことなく動搖の色が見え始めた。

九月も末になつて、私達の部隊はフランダに向つた。フランダは私が義勇兵として出征した最初の戦場であり、こゝへ来るのは之で三度目だ。

一九一四年の十月、十一月は、私がこゝで砲火の洗禮を受けたところである。胸には祖國の愛を、唇には威勢の良い唄をのせてダンテへでも行くやうに、軽い氣持で彈丸のなかへ跳込んで往つたのもその時である。思へば私達も未だ若かつた。祖國の自由と獨立とを守る爲に貴い血を注いでも惜しいとは少しも思はなかつた。

次は一九一七年であつた。フランダは多くの戦友の埋まつて居るところだ。思ひ出せばその時死んだ戦友は未だ子供のやうな若い者ばかりであつた。その少年達がかけ代へのない大事な祖國の爲には得がたき命を捨てて戦場の花と散つて行つた。私は戦友の墓の前に立つて壯嚴な氣に打たれた。

今や私は三度フランダを守備することになつたのだ。

フランダでは英軍は三週間に互つて猛烈な攻撃を加へて來た。味方は苦戦に陥つた。それでも一歩も退かじと争つて居たが、とうとう後退の餘儀なきに至つた。その日は一九一八年七月三十一日であつた。

八月に入つて私達の部隊は交代となつたが、一聯隊もあつた多くの兵は僅かの數箇中隊に減つて居

一七九

た。生き残つた者は泥にまみれて、よろめきつゝ後退した。その憐れな姿は人間よりも幽霊に近かつた。

コミヌの町は一九一四年に一度攻略したところである。一九一八年秋、私達は同じく此の町に三度入城した。町は昔の町であつたけれども、軍の内容はもう、甚しく變つて居た。軍隊は大分政治かぶれがして居た。而してあとから送られて來た若い兵士は全然用をなさなかつた。

十月の十三日から十四日へかけての夜中であつた。英軍はイーフル前面の南の戦線へ、毒瓦斯を放つて來た。敵はゲルブクロイツを用ゐたのであるが、私はまだそれが恐しく質の悪い毒瓦斯であることを知らなかつた。十三日の晩には私はウェルウクの南の丘に居て、戦友と共に英軍の猛射を浴びて居た。ところが夜半になると、もう仲間が瓦斯で倒れ、あるものはそのまゝ永遠の別れとなつた。やがて夜明け頃になつて私も亦苦痛を感じた。而して刻々に痛みがつり、朝の七時には燃えるやうな兩眼を押へて後方へよろめき、去らざるを得なくなつた。

それから二三時間も経たない内に、眼のなかに燃えるやうな痛みを感じ、同時に、あたりが眞暗になつた。かくて私はボンメルンなるバーゼブルクの陸軍病院へ送還された。而して私がドイツの革命を知つたのも亦此の病院であつた。

五、革命の勃發

その頃ドイツでは名狀し難い厭な空氣が人々の頭を壓した。世間では今にも何か起るらしいことを言つて居たが、何が起るのか私には判らなかつた。此の春には軍需工場のレストランがあつた。私は再びそのやうなレストランでも起るのかと思つた。又海軍が怪しいといふ噂も、度々傳はつて來たけれども、それも事を好む輩の揣摩臆測で、根のないことだと思つて氣にもとめなかつた。病院のなかでは戦争が早く片づいてくれれば良いといふことは、皆の口から出たけれども、何人も今日言つて明日戦争が終りにならうとは思へなかつた。それに病院では新聞が讀めなかつたから、外部の事情は少しも判らなかつたのも無理はない。

十一月に入つて一般の情勢は愈々緊迫を加へて來た。すると突然ある日のこと、トラックに分乗した水兵がやつて來て、革命に参加せよと呼んで廻はつた。自由の爲の革命だと言つて、生意氣なユダヤ人の小僧が二三人で指揮してゐた。

この前後私も快方に向ひ、燃えるやうな眼の痛みは去つて、微ながらも明暗の區別が出来るやうになり、此の分ならまだ働けるだらうと思つて自ら慰めるやうになつた。然りながら無論二度と繪が書けるだらうとは、自分でも考へなかつたところへ丁度この革命騒ぎが起つた。

私は革命も始めは地方的なもので、全国的なものでなからうと思ひ、仲間の者にもさう言つて落ちつかせた。而して皆がそれで納得した。殊にバイエルン出の傷兵は何れも私のいふところが本當だと云つて賛成してくれた。そして又、こを見て病院内には革命に加擔するものがなさうに思はれた。こゝに於て更に私は考へた。ミュンヘンの市民はヴイテルスバッハの王室に忠誠なものであるから、一二のユダヤ人が煽動したとて革命を起すことは斷じてなからうと。私は革命のミュンヘンを想像することさへ出来なかつた。

一八二

私は目前の革命なるものは畢竟不逞水兵の一時の惡戯であつて、二三週間も経てば自ら消散するものと考へて居た。然るにそれは全然私の考へ違ひであつた。革命は日を重ねるに従つて大きくなつた。地方的と考へられた騷擾は全國的大動亂となり、その上戦地からは聞くも汚らしい噂が傳つて來た。ドイツ軍が敵に降伏するといふのだ。いかなる私もこれだけは噓に過ぎなからうと思つた。忘れもせぬ、十一月十日だ。牧師が病院へ來て短い話をした。それで私達にすつかり事情がわかつた。

私は興奮して牧師の短い演説を聞きもらさじとした。上品な老牧師はホーヘンツォーレルン家は、もはやドイツの王冠を戴いてはならぬことになつたと言つて慄へた。祖國は共和國になつたと言つては慄へた。神よ、この大變革に際しても見捨てることなく、明日の國民を守り給へ、と祈つては慄へた。

た。彼は言葉短かにホーヘンツォーレルン王家がボンメルンの爲に、プロシヤの爲に、否全ドイツの爲になした少からぬ貢獻を數へて王室の運命を、たゞ、法衣の袂でひそかに涙を拭うた。滿堂せきとして聲なく、聞ゆるものは傷兵どもの溜息ばかりであつた。どの兵を見ても眼に涙を宿さぬものは一人もなかつた。牧師は更に我等は永い戦争を止めねばならなくなつたこと、昨日迄戦つた敵のいふことを信じてドイツが休戦に入つたこと、ドイツの前途の危殆なことを説き來るに及んで、私はもう席に堪へられなくなつた。目の前が再び暗くなつた私は、それを抜け出し、廊下を手探りに寢室にたどり、若くや床上に身を投じ、燃えるやうな頭を抱へて夜具のなかに、もぐり込んだ。

私は皆て母の墓に立つて泣いたことはあるが、それ以來泣いたことがなかつた。幼い時から苦勞をしてゐるから、氣は強くなつて居るのだ。戦場で仲間が斃れ、屍となつて運ばれる時でも私は泣かなかつた。祖國の爲に死ぬのは本望じやないか、さう言つて泣きたくなる自分を自分で叱つた。毒瓦斯にやられて、永久に盲目になるのかと恐れた時も悲しみが込み上げて來たけれども、仲間を見よ、もつとひどいのが、いゝらでもあるぢやないか、と言つて涙を落さなかつた。そのやうにして辛い運命を黙つて忍んで來た私であつたが、祖國の情ない有様を見たり聞いたりしては、泣くより外に仕様がなかつた。私は大義の重くして一身の奈何に輕きものであるかを此の時あらためて痛感した。

萬事が水泡に歸したのだ。私達は限りなき辛苦と、絶え間なき飢渴を忍んだ。それも徒勞となつた。

一八三

私達は死を冒して務を果し、既に二百萬人の戦死者を出した。それも徒勞となつた。故郷を捨てて出征した兵士は抑も何の爲に戦つたのか。一九一四年八、九月の戦は猛烈を極めて死傷者は無數に上つた。彼等勇士は何の爲に惜しみなく命を捨てたのか。同年秋の義勇兵は十七歳の若武者をさへ交へて居た。彼等も亦何の爲に戦つたのか。祖國の大事と思へばこそ、ドイツの母は愛し兒も戦場へ送つたのであらう。然るにその祖國は今何の狀ぞ。思へば悲惨の極みである。ドイツの革命を見ては戦死者の靈も浮ばれまい。

抑もドイツの兵士が寒暑風雨を厭はず、晝夜の別を問はず、飢餓を忍んで屈せざりしは何の爲ぞ。敵の一斉射撃に身を曝らし、瓦斯の猛毒を冒して一步も退かなかつたのは何の爲ぞ。祖國を思へばこそでないか。

戦場に眠つて居る兵の墓碑にはかく刻まれて居る。

「旅人よ！ ドイツへ行く者は故郷の人々に告げよ。祖國に忠なりし吾等はこゝに眠る。」

と。之が彼等の持つ小さな異境の墓標だ。

然るにその故郷のこの有様は何だ。革命當時のことは、今思ひ出しても忌々しくて頭が痛くなつて来る。

それから後のことは殆んど言ふに堪へぬ。敵の言ふことを頼みにして國を渡すなどといふことは天下の大馬鹿者か、然らざれば薄氣味のわるい陰謀家だ。私は日夜革命の元兇を憎んで暮した。

私は今迄も病院を出たらどうして働かうなどと身の振り方を考へて居た。然るに今はそんなことはどうでもよいことになつた。而して革命だつて、言はば私の苟かに恐れて居たものが遂に來たのだ、と言ふに過ぎない。カイゼルは舉國一致などと言つて、マルキシストの首領連に握手を賜つた。之が抑も禍害の基であつた。彼等は左手にカイゼルの手を握り、右手に白刃を用意して居たのだ。ユダヤ人を相手にしては唯イエスかノーだ。妥協などは有り得ない。かくて私は漸く政治家となる肚をきめた。

ア	アウスレルリッ アメリカ移民 アルドイ・ウェーグ アルバイ・ウィング	二五 二六 二七 二八
イ	インソ イン河 インダナ・ナリズ インダナ・ナリ	二九 三〇 三一 三二
ウ	ウルウ ウイテルス・バ ウイナ・ター ウリヤム・テル	三三 三四 三五 三六
エ	英国の宣傳	三七
オ	オーストリ オーストリ人 オーストリ・ドイツ人 オーストリ・ドイツ運動 オーストリの「歴史」 オーストリの「敗因」 オーストリの「歴史」 オーストリの「敗因」 オーストリの「歴史」 オーストリの「敗因」	三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七
カ	カイズル カイズル・ドイツ カイズル・ドイツ運動 カイズル・ドイツの「歴史」 カイズル・ドイツの「敗因」 カイズル・ドイツの「歴史」 カイズル・ドイツの「敗因」	四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四
ガ	ガリシヤ	五五
キ	基督教社會黨 議會政治とマルキシズム 議會政治の無責任 議會政治の無責任 議會政治の無責任 議會政治の無責任 議會政治の無責任 議會政治の無責任 議會政治の無責任 議會政治の無責任	五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六
ク	クロワド人	六七
グ	グレンシャムの法則と議員	六八
ゲ	ゲルグクロイツ ゲルマン族のデモクラシー	六九 七〇
コ	國華、矢車草 國語と中央集權 「國際事情」 「國際事情」 「國際事情」 「國際事情」 「國際事情」 「國際事情」 「國際事情」 「國際事情」	七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇
シ	シオン運動 思想戦の對策 思想と年齡	八一 八二 八三

マルサ	二六	ルテン人	二六
ミュンヘン	一七、八三	レ	
雄辯の力	三三	レオポルド・シュタット	二六六
ユダヤ人	一七、八三	レーンベルグ	二六
ヨ		ロ	
ヨゼフ(フランチ)	一七、八三	ローニングリン	二七
輿論の製造	一七、八三	露西亞の敗戦(一九一七年)	二五
ラ		ロス・フアン・ローム運動	二五
ライベック	三三	勞資關係	二五
「ラインの守り」	一七、八三	勞働組合の没落	二五
ラートハウス	一七、八三	勞働者と社會民主黨	二五
リ		勞働者の運命	二五
リスト聯隊	一七、八三	ワグネル崇拜	二五
リュウゲル(カール)	一七、八三		
リマデヒ	一七、八三		
リンクタネヒト(カール)	一七、八三		
リンク街(ウィーン)	一七、八三		
リンツ	一七、八三		